

苫小牧駒澤大学紀要

第 11 号

- 1930年代における反ファシズム文学論 篠原昌彦 1
『党生活者』をケース・スタディとして
- 昔話・伝説における異郷の表現とイメージ 林晃平 15
浦島伝説を視点として
- ◇
- 〈翻訳〉「文化とは何か」『文化の危機』（第3章） 村井泰廣 (1)
- 社会地図学：その主張と批判 (2) (英文) 伊藤勝久 (15)
- 「和製」英語の考察 (英文) ロバート・カール・オルソン (43)
- 強制力と二言語使用教育(英文) セス ユージン・セルバンテス (59)
- 日本語の動詞による名詞の格支配の指導 楊志剛 (69)
に格の名詞と動詞とのくみあわせを中心に
- 「日本事情」科目の可能性 野田孝子 (103)

苫小牧駒澤大学

2004年3月

BULLETIN OF TOMAKOMAI KOMAZAWA UNIVERSITY

Vol.11

On issues of aggressive problems of anti-Japanese facism literature 1930' : Case study of " <i>Toseikatsusya</i> " SHINOHARA Masahiko	1
The Image of the Other World on Folk Tales and Legends : Through the Urashima Legend HAYASHI Kouhei	15
◇	
〈Translation〉" What is Culture " in <i>Cultures in Crisis</i> (Chapter 3) MURAI Yasuhiro	(1)
Social cartography: Claims and criticisms (Part2) ITO Katsuhisa	(15)
A Look at " Wasei " English Robert Carl OLSON	(43)
Coercive Power and Bilingual Education Seth Eugene CERVANTES	(59)
Instructions as to Regimen of Substantive Cases Using Verbs in Japanese : Focusing on the Combinations of Diptotes and Verbs Yang Zhigang	(69)
The Use of Subject; Nihon-Jijo (Aspects of Japan) NODA Takako	(103)

TOMAKOMAI KOMAZAWA UNIVERSITY

March 2004

一九三〇年代における反ファシズム文学論

——『党生活者』をケース・スタディとして——

On issues of aggressive problems of anti-Japanese fascism literature 1930'
: Case study of "Toseikatsusya"

篠原昌彦
SHINOHARA Masahiko

キーワード：語り、歴史意識、主体性、治安維持法、党・細胞

要旨

『党生活者』前編のテクストは、治安維持法の下で革命運動を担い、一九三〇年代を生き続けた生命が描かれていた。

「細胞」は、生命体を支えていく。テクストは今も生き続けていく「細胞」「地方委員会」を革命の主体として構造化していた。そこに、「解放」「解放するための不可欠な犠牲」の歴史的使命を担わせ描いていた。

非合法下の革命運動は、きつくて厳しい。

治安維持法による犠牲者たち、一人ひとりの生命のかけがえのなさを『党生活者』前編のテクストは、現在も未来も語り続けていく。

1. 語りの視点

『党生活者』前編には、独自の語りが仕掛けられている。「私」はけっして、表現主体そのままの「私」ではない。

フト須山は子供のようにテレて、

「何んだ、佐々木の手は小っちゃいな！」

と私に云った。」。

一人称「私」の語りでありながら、読者には「私」が「佐々木」と呼ばれていることが伝わる仕掛けになっている。それでは、「私」の語りとは何を意味し、どのような構造をもたらしめているのであるのか。

ここで、小説におけるテクストの語りについて、本論稿の基本的考えを確認しておきたい。

T・トドロフは、『言語理論小事典』の中で、

テクストはその〈自立性〉、〈閉鎖性〉(別の意味では、ある種のテクストは〈閉ざされて〉いないにせよ)によって定義される⁽²⁾。

『党生活者』前編の語りにおいても、〈自律性〉〈閉鎖性〉によって、小説の装置がつくられている。

「倉田工業」という軍需工場を小説の「場」に、非合法の「細胞」「地方委員会」の運動を組織化・実践し、治安維持法下の生命の危険を賭して「私」は党活動を行っている。

表現主体の歴史意義を明らかにし、階級意識と歴史を担い歴史を生きていく労働者農民の階級的主体性を明らかにする〈子ども〉の装置は、『党生活者』前編のテクストでも組み込まれている。

『党生活者』前編の中で、特に読者の胸をうつ次の部分を見てみよう。

私はこの頃、どうしても仰向けにゆったりと寝ることが出来なくなった。極度の疲労から身体の何処かを悪

くしているらしく、弱い子供のように直ぐうつ伏せになって寝ていた。私は想い出すのだが、父が秋田で百姓をしていた頃、田から上がつてくると、泥まみれの草鞋のまゝ、ヨクうつ伏せになって上り端で昼寝していた。父は身体に無理をして働いていた。小作料があまり酷なために、村の人が誰も手をつけられない石ころだらけの「野地」を余分に耕やしていた。そこから少しでも作をあげて、暮しの足にしようとしたのである。そんなことのために父は心臓をひどく悪くしていた。——私はどうしてもうつ伏せにならないと眠れないとき、自分がだんだん父と似てくるように思われた³⁾。

ここで語られているものは、〈歴史と救済〉というテーマである。表現主体が、「私」を通して、父親の階級的存在と階級の現実を語らせ、「私」に父親の生きた時間＝個の歴史を「想い出」させ、生き生きと記憶させる。親の個は〈子ども〉の内面に記憶されることで、階級の歴史的存在として集団化され、永遠化される。まさに、「類的存在としての人間」が表現されたのである。「自分がだん◇◇父と似てくるように思われた」「私」とは、労働者農民の階級的存在・階級の現実が内面化され、歴史を生き続ける労働者農民の集団そのものなのだ。つまり、『党生活者』前編の「私」とは、個ではなく労働者農民階級の典型であり、階級の集団そのものである。

「弱い子供のように」「寝ていた」父は、現在の「私」の中に生き続け、「私」として生き続けている。そして、歴史的現実の中で惨めな〈生〉を生きていた父の生命は、現実の「私」の中で、救済を求めている。解放としての救済、革命としての救済を求めている。親から〈子ども〉へと持続していく生命とその歴史。すなわち、人間の生命の生産と再生産が、解放・革命という救済を求めているのである。したがって、『党生活者』前編の「私」とは、労働者農民の階級そのものであるとともに、さらに救済＝解放＝革命の主体である前衛党そのものなのである。つまり、『党生活者』前編の中で表現された「私」とは、労働者農民の階級的存在と階級の現実、そして解放運動の主体としての前衛党を意味しているのである。言い換えるならば、『党生活者』前編のテクストとは、「私」によって語られた、マルクス主義の文学的形象化であり、前衛党の歴史的使命が内面化された革命運動の教科書と考えることが出来る。「私」によって語られた革命運動の教科書、それが『党生活者』前編の小説上の重要な仕掛けである。それは同時に、表現主体が読者に受容してほしいと願った革命へのメッセージなのだ。

惨めな〈生〉を生きてきた有限な存在、つまり一回しか生きられない個としての親の思いは、〈子ども〉の生命

の中に生き続け、救済を求めて解放運動の主体として前衛党の党員生活の中に再生する。『党生活者』前編のテクストとは、「転形期の人々」で形象化された〈過去〉の労働者農民の典型が、まさに〈現在〉の姿として革命運動の主体＝前衛党の党員生活となって一つの教科書として表現されたものなのである。

『党生活者』前編の中で、表現主体が明確にした歴史意識とは、このように親から〈子ども〉に受け継がれ、発展され、解放運動の主体として救済を求めて生き続ける前衛党の厳肅で崇高な使命を意味しているのである。

『党生活者』前編の中で、表現主体によって明確にされた歴史意識、救済としての革命、前衛党の使命は、一九三〇年代の日本マルクス主義の一つの到達点であった。二十世紀文学の特徴は、世界的同時性ということだが、マルクス主義が一九三二年の日本で『党生活者』前編という文学表現を得たことを私は重要視する。

『党生活者』前編のテクストは、一九三〇年代の日本マルクス主義の難問を提出したまま、未刊で遺された。その重い問題を受け継いでいくのが、その後の時代を生きる者の責務である。

2. 『党生活者』前編の表現主体・変革主体

『党生活者』前編のテクストとは、労働者農民の階級そのものである「私」によって、また同時に解放運動の主体としての前衛党を意味している「私」によって語られた革命運動の教科書である。『党生活者』前編の「私」とは、ただだんに典型が表現された個人であるだけでなく、もっとそれ以上の階級的現実と革命運動が表現されている〈集団〉そのものなのである。そのことは、『党生活者』前編の中で、表現主体によって繰り返し明らかにされていることである。

これらの同志の英雄的闘争は、私達を引きしめた。私はどうしても明日までやってしまわなければならぬ。仕事が眠いために出来なく、寝ようと思つ、そんなときに中の人たちのこと（引用者注、獄中の同志たちのこと）を考え、我慢し、ふん張った。……（中略）……そんな風で、我々の日常の色々な生活が中の同志の生活とそのままに結びついていて、内と外とはちがっていても、それが支配階級に対する闘争であるという点では、少しの差異がなかったからである。⁴⁾

『党生活者』前編の「私」とは、獄の「中」と「外」と緊密に結びつき、一体化して「支配階級に対する闘争」

を行なう党そのものなのである。

次にあげる文章は、先に引用した〈子ども〉の装置が組み込まれ、表現主体によって〈歴史と救済〉が語られていた部分の後に続く文章である。

私にはちよんびりもの個人生活も残らなくなった。今では季節々々さえ、党生活のなかの一部でしかなくなった。四季の草花の眺めや青空や雨も、それは独立したものと映らない。私は雨が降れば喜ぶ。然しそれは連絡に出掛けるのに傘をさして行くので、顔を他人に見られることが少ないからである。⁽⁵⁾

『党生活者』前編の「生活」とは、労働者農民の階級が解放されるための歴史的使命を背負って「支配階級に対する闘争」を行なうために「ちよんびりもの個人生活も残らなくなった」ものであると語られている。また、その「党生活」とは、自然の推移を感じさせる「季節々々」のささやかなものさえ「党生活のなかの一部」となっていることも語られている。『党生活者』前編の「私」とは、党と一体化し同一化した存在なのである。そのことは、表現主体によって別のところで次のように語られている。

一日を廿八時間に働くということが、私には始めよくは分らなかつたが、然し一日に十二、三回も連絡を取らなければならぬようになった時、私はその意味を諒解した。――個人的な生活が同時に階級的な生活であるような生活、私はそれに少しでも近附けたら本望である。⁽⁶⁾

『党生活者』前編の「私」とは、「一日を廿八時間に働く」ような「個人的な生活が同時に階級的な生活」を行なう存在である。「支配階級に対する闘争」を行なう革命運動の「党生活」の教科書、それが『党生活者』前編のテクストなのである。

以上の点を踏まえて、『党生活者』前編のテクストを受容した場合、『党生活者』前編の「私」の位相は、「政治と文学」論争で争点となったものと明らかに異なってくる。なぜならば、『党生活者』前編の「私」とは個人ではなく、革命運動の前衛党そのものなのだから。そして、そこに表現されたものは、表現主体の歴史意識と労働者農

民の階級としての歴史的使命なのだから。

3. 変革者の主体性問題

『党生活者』前編のテキストでは、党を体现する「私」の「細胞」が変革の主体として叙述されている。このことの意味は大きい。変革者の歴史意識が、表現主体によって、「個人的な生活が同時に階級的生活」が描かれている。そこには、「地方」「地区」「地方委員会」という語によって、革命の主体が明確に表現されている。

革命の主体はけつして、中央、もしくは「東京」に存在する中央委員会ではない。

「細胞」は生命である。変革者の主体となるのであり、「支部」という語にはなり得ない。「中央」を前提とする「支部」ではなく、「細胞」が生き生きと活動し革命運動の主体として、増殖運動を繰り返していく組織を形成している。

変革の主体は、革命の運動体の生命そのものを維持していく「細胞」の「私」にある。

そこで指摘したいのは、平野謙が一九四六年に発表した「政治と文学(二)」の中の次の文章である。『党生活者』前編のテキストで語られた歴史意識が、別の側面から鮮やかに浮かび上がってくる。

ここで私は憶いだす、イワン・カラマゾフが思いつめた語調でアリョーシャに問いかける場面を。「人類永遠の幸福を目的とする建物をたてる場合、ひとりのいたいけな子供を犠牲にして、その子の血と涙の上に建立しなければならぬとしたら、お前はその建築をひきうけるか、正直に答えておくれ」と問いかける一齣を(7)。

『党生活者』前編のテキストで語られた歴史意識は、平野謙が一九四六年にこの文章で提出したような個人の問題ではない。『党生活者』前編では、個人を包みこみ、そして個人の生命が親から〈子ども〉へと連続して生き続ける「類的存在としての人間」が表現されているのである。すなわち、一回しか生きられない個人の限界と悲慘さを、歴史の中で親から〈子ども〉へと生命が生き続ける「類的存在としての人間」として救済し、解放運動の歴史的使命に生命の意味を見出すのである。そのような歴史意識は、一九三〇年代の日本マルクス主義の一つの到達で

あり、マルクス主義哲学の「世界の客観的合法則性」の認識論に立脚したものである。その点は、かつて丸山真男が「現実を全体的に捉える理論及び世界観」「政治的トータリズムと科学的トータリズムとが見合った形⁸⁾」と表現した問題である。そこから「政治的優位」の原則が猛威をふるった一九三〇年代の日本マルクス主義の光栄と悲惨が演繹されるのである。『党生活者』前編のテクストは、まぎれもなくそのような一九三〇年代の日本マルクス主義の認識論、組織論、運動論をそのまま反映していると言っても過言ではない。いや、それだからこそ、『党生活者』が前編だけしか遺されていないことが惜しまれるのである。光栄も悲惨も含め、一九三〇年代の日本マルクス主義の問題は、今なお重く痛苦で未解決のまま遺されている。もしかすると、『党生活者』の後編のテクストを生み出す作業は、戦争と革命の二十世紀を経た今後の地球規模の人類課題にまで待たれるのかも知れない。なぜならば、マルクス主義は今なお生きた思想であり、批判的に発展していくものである。だから、『党生活者』前編のテクストが表現した歴史意識は、まさに二十世紀のマルクス主義の難しい問題を提示し続けているのである。

ヴァルター・ベンヤミンは、二十世紀のマルクス主義の難問に関し、一九四〇年に絶筆の形で書き遺した「歴史哲学テーゼ」の中で、次の文章を発表している。

「新しい天使」と題されているクレーの絵がある。それにはひとりの天使が描かれており、天使は、かれが凝視している何ものかから、いまにも遠ざかろうとしているところのように見える……（中略）……歴史の天使はこのような様子であるに違いない。かれは顔を過去に向けている。ほくらであれば事件の連鎖を眺めるところに、かれはただカタストロフのみを見る。そのカタストロフは、やすみなく廃墟の上に廃墟を積みかさねて、それをかれの鼻つきさきへつきつけてくるのだ。……（中略）……強風は天使を、かれが背中を向けている未来のほうへ、不可抗的に運んでゆく。その一方ではかれの眼前の廃墟の山が、天に届くとばかりに高くなる。

ほくらが進歩と呼ぶものは、この強風なのだ。⁹⁾（野村修訳）

ここで語られている〈歴史と救済〉のテーマは、二十世紀マルクス主義の歴史観を人間存在の深いところから難

しい問題として突きつけている。それはそのまま『党生活者』前編の「私」が課せられた使命と重なるものである。目を過去に向ければ「廢墟の山」があり、それにもかかわらず、「進歩」と呼ぶ歴史の使命を担っていくのである。『党生活者』前編で表現された前衛党が背負っているものは、このような〈歴史と救済〉の厳肅で崇高な使命なのだ。『党生活者』前編の中で、感動的な次の場面はこのことを雄弁に語っている。

見解は一致していた。だから問題はその決定的な闘争をどんな形で持ち込むかであった。……（中略）……それは矢張り正しいところへ向ってきていた。……（中略）……これは労働者の生活と離れていないところから来ていることで、我々の場合こゝに理論と実践の微妙な統一がある。⁽¹⁰⁾

こうして、前編最後のピラマキの場面が、表現主体によって歴史意識と一体化した「支配階級に対する闘争」として描かれるのである。それは、闘う者の自己犠牲と英雄的な精神としてテクストの中で語られ、解放運動の主体である「党」が鮮やかに表現されている。表現主体によって「類的存在としての人間」が歴史的使命を果たす献身が語られているのであり、そこに一九三〇年代の日本マルクス主義と前衛党の光栄と悲愴があったのである。

テリー・イーゲルトンは、ベンヤミンの『歴史哲学テーゼ』について「卓越した革命文書である⁽¹¹⁾」と述べているが、私は二十世紀における文学の世界的同時性を考えた場合、『党生活者』前編も同じように卓越した革命運動の教科書という評価を与えたい。

『党生活者』のテクストは、一九三〇年代の日本マルクス主義の困難な問題と、一九三〇年代の世界に共通するマルクス主義の難問を突きつけているのである。

4. 中央ではない「東京」

『党生活者』前編の叙述は、三二テーゼで論じられた社会構造を小説世界の基盤としていた。すなわち、絶対主義的天皇制であり、寄生地主制の半封建的「超国家主義」帝国の社会構造を、変革者の側から鋭く撃ちこむものとなっている。

『党生活者』前編のテキストでは、「東京」は相対化された場になっている。つまり、「東京」と「地方」は、社会変革の主体である「細胞」「私」にとって、等価値の場である。

不在地主の住む「東京」。侵略戦争を推進する「大日本帝国」の中央集権化された「東京」。国家権力の野蛮な暴力装置治安維持法を発動し続けて指令していく「東京」。軍需工場が位置する「東京」。

それらの「東京」に鋭く対峙し闘争し続けていくのは、「細胞」であり、「地方委員会」という語で表現されている。

私は倉田工業の他に「地方委員会」の仕事もしていたし、ヒゲのやられたことが殆ど確実なので、新たにその仕事の一部分をも引き受けなければならなかった。急に忙しくなった。が、アジトが確立した上に、工場が生活がなくなっていたので、充分に日常生活のプランを編成して、今迄よりも精力的に仕事に取りかゝることが出来た⁽¹²⁾。

私がまず気付いたことは、八百人もいる工場で、四五人の細胞だけが懸命に（それは全く懸命に！）活動しようとしている傾向だった。それは勿論四五人であろうと、細胞の懸命な活動がなかったら、工場全体を動かすことの出来ないのは当然であるが、その四五人が懸命に働いて工場全体を動かすためには、工場の中の大衆的な組織と結合すること（或いはそういうものを作り、その中で働くこと）を具体的に問題にしなければならぬ⁽¹³⁾。

革命運動の主体者にとって、「東京」は中央ではない。また、それぞれの「細胞」「地方委員会」は、中央の支部でも下部革命運動の主体者にとって、「東京」は組織では、けつしてないのである。

『党生活者』前編のテキストでは、「東京」は次のように「地方」と等価値の風景として叙述されていく構造を持っている。

帰りは表通りに出て、円タクを拾った。自動車は近路をすらすらしく、しきりに暗い通りを曲がっていたが、突然賑やかな明るい通りへ出た。私は少し酔った風をして、帽子を前のめりに覆った。

「何処へ出たの？」

と訊くと、「銀座」だという。これは困ったと思った。こついうさかり場は苦手なのだ。が、そうとも云えず、私は分らないように、モット帽子を前のめりにした。だが私は銀座を何カ月見ないだろう。指を折ってみると四カ月も見ていなかった。私は時々両側に眼をやった。私とその辺を歩いたことがあってから、随分変っていた。何時の間にか私は貪るように見入っていた。私は曾つてこれと似た感情を持ったことがある。それは一昨年刑務所へ行つていたときだった。予審廷へ出廷のために、刑務所の護送自動車に手錠をはめられたまゝ載せられて裁判所へ行く途中、私はその鉄棒のはまった窓から半年振りで「新宿」の雑踏を見た。私は一つ一つの建物を見、一つ一つの看板を見、一つ一つの自動車を見、そして雑踏している人たちの一人々々を見ようとした。私は、その人ごみの中に、誰か顔見知りの同志でも歩いているのではないだろうか、どの位注意したか分らなかった。その後、刑務所の独房に帰つてから一二日眼がチ力チ力と痛かったことを覚えている。¹⁴

「我等にとつて、工場は城塞でなくて、これア戦場だ！」

と、須山は笑った。

「それは誰からの切抜だ？」

「オレ自身のさ！」

——その後「地方のオル」（党地方委員会の組織部会）に出ると、官営のN軍器工場ではピストルと剣を擬した憲兵の見張りだけでは足りなく、職場々々の大切な部門には憲兵に職工服を着せて入り混らせていたという報告がされた。その細胞が最近検査されたが、それは知らずに「職工の服を着た憲兵」に働きかけたゝめだった。そういう「職工」はワザと表面は意識ある様子を見せるので、危険この上もなかった。倉田工業は本来の軍器工場ではないので、まだ憲兵までにはきていないが、事態がもう少し進むと、そこまで行き兼ねないことが考えられる。¹⁵

革命の主体として「私」「細胞」「地方委員会」が、テクストの中に明確に構造化されている。

侵略し続ける「帝国軍隊」「皇軍」の「帝都」東京は、『党生活者』前編で生き闘い続ける者にとつて、地方から

撃ち続け、かつ闘い続けていく場に相対化されている。

5. 生き続ける「細胞」「地方委員会」

『党生活者』前編のテクストで読者に感動を与える描写は、親子の情愛である。それは、革命を担う主体の一人ひとり、すなわち「細胞」の生命の核となつて、テクストに構造化されている。

三度目か四度目に家へ帰つたとき、伊藤は久しぶりで母親と一緒に銭湯に行った。彼女はだん◆◆仕事が必要になつて行くし、これからは今迄のように容易く警察を出れることも無くなるだろうというような考もあつたのである。それは蔭ながらのお別れであつたわけである。ところが母親はお湯屋で始めて自分の娘の裸の姿を見て、そこへへナ◆◆と坐つてしまつたそうである。伊藤の体は度重なる拷問で青黒いアザだらけになつていた。彼女の話によると、そのことがあつてから、母親は急に自分の娘に同情し、理解を持つようになったというのである。「娘をこんなにした警察などに頭をさげる必要はいらん！」と怒つた¹⁵⁾。

私は今迄母親にはつら過ぎたかも知れなかつたが、結局は私の退つびきならぬ行動で示してきた。然し六十の母親が私の気持にまで近付いていることに、私は自分たちがこの運動をしてゆく困難さの百倍もの苦しい心の闘いを見ることが出来る気がする。私の母親は水呑百姓で、小学校にさえ行っていない。ところが私が家にいた頃から、「いろは」を習ら始めた。眼鏡をかけて炬燵の中に背中を丸くして入り、その上に小さい板を置いて、私の原稿用紙の書き散らしを集め、その裏に鉛筆で稽古をし出した。何を始めるんだ、と私は笑つていた。母は一昨年私が刑務所にいるときに、自分が一字も書けないために、私に手紙を一本も出せなかつたことを「そればかりが残念だ」と云つていたことがあつた。それに私が出てからも、ます◆◆運動のなかに深入りしているのが母の眼にも分つた、そうすれば今度もキット引ツ張られるだろう、又仮りにそんなことが無いとしても、今は保釈になつているのだから、どうせ刑が決まれば入るのだから、その時の用意に母は字を覚え出しているのだった。私が沈む少し前には、不揃いな大きな字だったが、それでもちアんと読める字を書い

ているのに私は吃驚した¹⁶⁾。

「伊藤」「私」は革命運動を担う「細胞」として、母親の情愛、生命のつながりを階級意識へと高めていく装置となり、革命の教科書として読者に伝えている。

『党生活者』前編のテキストでは、親から子へと生命は受け継がれ、革命の主体、つまり「細胞」「地方委員会」へと表現されていく。

おわりに

『党生活者』前編のテキストは、治安維持法の下で革命運動を担い、一九三〇年代を生き続けた生命が描かれていた。

「細胞」は、生命体を支えていく。テキストは今も生き続けていく「細胞」「地方委員会」を革命の主体として構造化していた。そこに、「解放」「解放するための不可欠な犠牲」の歴史的使命を担わせ描いていた。

第二次世界大戦の末期、ワルシャワで武装蜂起がなされた。しかし、悲惨な壊滅的打撃を受けて敗北を余儀なくされた。

日本では、戦時下および敗戦後から今日まで武装蜂起はなし得ず、非転向の思想犯は、民衆の蜂起ではなく、敗戦後にもかかわらず三木清が獄死したことを知ったアメリカのジャーナリストの鋭敏な人権感覚とGHQの指令によって、解放された。そして、戦争放棄の憲法が樹立されていく。

非合法下の革命運動は、きつくて厳しい。

治安維持法による犠牲者たち、一人ひとりの生命のかけがえのなさを『党生活者』前編のテキストは、現在も未来も語り続けていく。

注

(1) 『小林多喜二全集』第四巻、新日本出版社、一九八二年、四四〇ページ。

- (2) T・トドロフ著、滝田文彦訳『言語理論小事典』朝日出版社、一九七五年、四六〇ページ。
- (3) (2)と同じ、四三〇ページ。
- (4) (2)と同じ、三九二ページ。
- (5) (2)と同じ、四三〇～四三一ページ。
- (6) (2)と同じ、四三一～四三二ページ。
- (7) 平野謙著『戦後文藝評論』眞善美社、一九四八年、五二ページ。
- (8) 丸山真男著『日本の思想』岩波新書、一九六一年、八七ページ。
- (9) 『ペンヤミン著作集1 暴力批判論』(高原宏・野村修訳) 晶文社、一九六九年、一一九～一二〇ページ。
- (10) (2)と同じ、四三六～四三八ページ。
- (11) テリー・イェグルトン著、今村仁司訳『ワルター・ペンヤミン 革命的批評に向けて』勁草書房、一九八八年、二七五ページ。

- (11) (2)と同じ、三七四ページ。
 - (12) (2)と同じ、三七五ページ。
 - (13) (2)と同じ、四一〇～四一一ページ。
 - (14) (2)と同じ、四〇七ページ。
 - (15) (2)と同じ、三七三ページ。
 - (16) (2)と同じ、三八四～三八五ページ。
- ※本論稿は、日本社会文学会発行『社会文学』第一九号 二〇〇三年九月発行の論文を書き直したものである。

(しのはら まさひこ・本学教授)

昔話・伝説における異郷の表現とイメージ

—— 浦島伝説を視点として ——

The Image of the Other World on Folk Tales and Legends : Through the Urashima Legend

林 晃平
HAYASHI Kouhei

キーワード：浦島太郎、異郷、昔話、伝説、イメージ

要旨

口承文藝の中でも、昔話・伝説における異郷表現は、異郷の登場する話が多く種類を持っている。わりには、そのイメージに確たるものがあるとはいいがたい。浦島伝説と龍宮に限定した場合でも、今日の日本人の持っている、海底にあり、独特な門構えを有した建物や、四方四季の庭を内包するイメージは、口承文藝からもたらされたものではなく、所謂御伽草子や草双紙類の読み物やその挿絵などの絵本などからの影響が強く、口承よりはむしろ視覚による情報伝達によって形成されきたものといえよう。

これまでに、浦島伝説の有り様を文献で把握して、その方向や変容を動態としてとらえ見据えてきた。それらを踏まえて、ここでは近年の口承文藝へと展開し、特にその異郷のイメージについて考察する。今日ある龍宮イメージは、これまでの研究から、江戸後期の草双紙を中心にして生成し受容されてきたことが明らかになってきた。(注二)その龍宮のイメージ形成をここでは、口承文藝における異郷のイメージに探ってみよう。

【〇】 問題提起

まず、最初に本稿で問題とすべき点を四つ挙げておく。

①口承文藝における異郷イメージの表現の特徴は何か

これは、異郷の具体的イメージがどのようなものかを探り、その特徴を探ることである。そのためには第一に

②異郷にはどんな種類があるのか

この異郷にはどんなものがあるかを確認する。その位置や呼称とその具体的内容の確認をおこなう。そして、

③異郷によって固有性はあるのか

そのそれぞれの異郷の固有性の有無を見ていきたい。そして最後に

④異郷のもつ意味は何か

これらを踏まえて、これらの見てきた異郷が、いったい口承文藝の中ではどういう意味合いをもつのかを考えてみる、という手順で進めることにする。

では、まず異郷について考える参考として、口承文藝における異郷の特徴を大掴みするために『日本昔話事典』の「異郷譚」という項目の文章からその一部を掲げておく。

日本の昔話のなかで、主人公がなんらかの理由で地下の国、あるいは海底の国とおぼしき所へ行き、歓待され、別れに際して財宝を贈られる、そして、たいていのばあい欲深い隣人がそれをまねてひどいめにあう、という構造をもった話型を異郷譚と言いならわしている。

(『日本昔話事典』小沢俊夫・四八頁)
これは小沢俊夫氏が執筆されたものであるが、ここでの異郷とは地下や海底と「おぼしき所」記されている。つまりはつきりどことは限定されていない、あいまいさを持った場所なのである。しかし、この話は話型的には基本

的に「隣の爺」などの隣人の模倣を有する話であり、そこに登場する異郷であるから、異郷そのものに重点が置かれていたのではないと見ることが出来る。つまり、他の異郷を中心とする話とは同列には扱えないという考え方も存在するであろう。

【一】 □承文藝と昔話と伝説

論を展開するにあたって、□承文藝を対象として考察するときの昔話と伝説の差異について述べておきたい。それは、浦島太郎の話を取り上げる場合には、これが昔話なのか伝説なのかと、その話の範疇をどうとらえるのかという問題が提起されることがあるからである。

浦島説話、浦島伝承などこの類の話に対していろいろな呼称があるが、稿者は基本的に□承書承に問わず、それらを一括して浦島伝説という呼称で代表させてきた。しかし、□承文藝に限定した場合、浦島太郎の話はどう扱つかという問題に触れざるをえなくなる。浦島太郎の話は、伝説にもあり、昔話にもあるからである。

そこで、まずこの今日の昔話と伝説や差異について簡単に見ておこう。福田晃氏の「昔話と御伽草子——『藤袋の草子』をめぐって——」と題する論文に示唆的な一節がある。

ところで、最初の奄美地方の調査ですでに強く感じたことであり、沖縄の調査を進めるに従っていちだんと強く感じられてきたことは、南島における昔話は、昔話というには、未成熟であり、それと伝説・世間話との境目がきわめてあいまいなことであった。あるいは、未成熟ということはが不適切であるとすれば、南島における民間説話の主流は、伝説にあると言いなおすべきかもしれない。ともあれ、本土にあつては、昔話を伝説や世間話の伝承と区別するものに、語りの形式があつた。つまり、昔話のなかでも、特に完形昔話とか本格昔話とかに分類される話型の場合、多くは発端の句として、「ムカシ」「ムカシムカシ」、あるいは「ザットムカシ」「ナントムカシ」「トントムカシ」、時には「ムカシムカシソノムカシ、ソノマタムカシソノムカシ」等々をもっており、その結びの句として、「ドットハレエ」「イチコサカエタ」「ムカシコツプリ」「ムカシマツコウ」等々をもつてられるものであるが、南島にあつては、このような語りの形式はほとんど見られない。たとえそれがあつたとしても、きわめて簡単なもので、それが形式として固定したものであるかどうかは不確かである。

（『昔話と御伽草子——『藤袋の草子』をめぐって——』上『國學院雑誌』七九卷一〇号（一九七六）四六頁下—四七上頁）

ここでは、まず、一般に昔話と伝説との区別するものとして語りの形式があることを挙げる。しかし、そう述べた上で、その区別が南島にはないことを指摘するのである。これを未成熟と取るか、主題とするもの違いと取るかはひとまずおいて、福田氏は、南島においては、昔話に語りの形式がほとんど見られないので、昔話と伝説の区別が極めて曖昧であると述べているのである。浦島太郎の話も、まさにそのような曖昧な存在であると思われる。確かに伝説にも昔話にも浦島の話は認定されており、以下に記すようにそれぞれに重なる部分も多いのである。具体的に、まず、その昔話と伝説の浦島太郎の話を見ていくことにする。

以下に「昔話」「浦島太郎」と伝説「浦島太郎」対照表」として掲げたのは、話の構成が簡便につかめるように、『日本昔話通観』と『日本伝説大系』にある話の要約を対照させて表にして示したものである。

昔話「浦島太郎」と伝説「浦島太郎」対照表

日本昔話通観・タイプ・インデックス	日本伝説大系 話型要約
<p>Ⅲ 異郷訪問 74 浦島太郎</p> <p>① 浦島太郎が子供にいじめられている亀を買いてとって放つと、亀は竜宮の乙姫の使いとして太郎を迎えにくる。 〔A420・1, B291, B366, Q51〕</p> <p>② 亀は太郎を背に乗せ目をつぶらせて海にもぐり、目をあけさせると竜宮に着いている。 〔F133, cf F370〕</p> <p>③ 太郎はしばらく乙姫にもてなされ、帰りに乙姫から困ったときにあけよ、と玉手箱を渡される。 〔D811・1, D1174, cf F379・1〕</p>	<p>二二 浦島太郎 (⑤五〇 ⑥一八五 ⑧一九五 ⑩二六六 ⑫一三三)</p> <p>1 a 浦島太郎は、亀を助けたお礼に竜宮に連れて行かれる。</p> <p>b 浦島太郎は、いつも酒を買いくる乙姫に、龍宮に連れて行かれる。</p>

④ 太郎が亀の背に乗り目をつぶって故郷に着くと数百年たっており、変わりはてているので、箱をあけると煙がたち爺となる。

[B366, F377, Z29 3, cf C321, cf C900, cf F379・2・2]

2 乙姫と別れて故郷に帰ると、地上では長い時間が過ぎていた。悲嘆にくれた太郎は、父母の墓前で玉手箱を開いて老人になって死ぬ。

3 a その地に太郎を神として祀る。

b 龍宮の太郎の子が、遅々のなくなった所に石柱を建てて弔いをする。

通観注 (1) 絵本などで普及し、その影響が大きい。(2) 沖繩の伝承は、男が拾った添え髪を女に返してそのあとをつけると、海が割れて道ができるとする。また香川・鳥取では、男は乙姫または亀と結婚し、出産に際しタブーを破ったのせいで、女は大蛇の姿となっており、子を残して去る、となる。

昔話では①②③で示されているものが、伝説では1aで一括されていて、④と2が対応していると理解すると、昔話も伝説も内容に差異はない。1bなるものは石川県松任市の石の木伝説で、これだけが異質なので別に掲げられている。

ところで、伝説には後日談ともいえる³があるが、昔話は④で終わっていて、対応するものがない。これが伝説と昔話の浦島太郎の大きな差異と言えよう。伝説では、単なる話の展開だけでなく、必ず証拠となる事物が残っていることが語られているということが知られる。しかし、この部分は異郷ということには直接関係しないので、ここではその指摘に留めておく。ともかくも、伝説も昔話も浦島太郎に関しては異郷ということに関して、ほぼ同じ内容が語られていることがわかる。そして、どちらを取るにしても浦島太郎の話の場合、話の根幹部分は変わらなしいといえる。ゆえにここでも昔話と伝説を一括してその対象として扱うことにする。

【二】 所謂御伽草子「浦島太郎」の龍宮表現の特徴

では、その浦島太郎の異郷とはどんなところであったのか、それを次には、具体的に見ていこう。ところで、昔話・伝説の浦島太郎の異郷を考える前提として、比較のために所謂御伽草子の「浦島太郎」の異郷の描写について確認しておきたい。この浦島の諸本の成立は近世初期から前期の一六〇〇年代中頃のことと考えてよいだろう。ゆえに、ここで描かれているのは近世前期の龍宮のイメージとして理解してよいと思われる。

浦島太郎の行った龍宮とはどんなところだったのか。浦島伝説の場合、その訪問先は、とこよ・蓬萊・龜の都・龍宮・龍宮浄土などと作品の中で呼ばれている。では、それらの異郷にはどんな特徴があったのだろうか。典型的な描写はあるのか。また、龍宮であることの必要条件は何か。

まず、代表的な例として、所謂御伽草子類の流布本の典型として祝言御伽文庫の本文を見ていこう。

さてふねよりあがり、いか成所やらんと思へば、しろかねのついでをつきて、こがねのいらかをならへ、門をたて、いかならんてんじやうのすまもこれにはいかでまさるべき、此女はうのすみ所、ことばにもおよばれず、中く申もをろかなり

(中略) さて女はう申しけるは、これはりうぐじやうと、申所なり、此ところに、四方に四きの草木をあらはせり、いらせ給へみせ申さんとて、ひきくして出にけり

まつびがしのとをあけてみれば、春のけしきと寛て、むめやさくらさきみだれ、やなぎのいと春かぜになびく、かすみのうちよりも、うぐひすのねものきちかく、いづれの木ずも花なれや

左にまとめたように、外観は金銀で構成された御殿で、天上との比較がなされ、四方四季の草木を配した庭を有するといふ以外にそれほどの特徴はないようである。その四季の庭の中からは、春の描写を参考に引用した。(注二)

龍宮の外観 銀の築土(門)・金の甍 天上(禁中)の住まいとの比較

四方四季の庭 東・南・西・北 春・夏・秋・冬 楽しみ深き所

和様庭園の造り 梅・桜・柳・鶯・霞

ところで、所謂御伽草子の「浦島太郎」の諸本は、大きく四つの本文系統に分けられるので、その中から流布本以外として、特徴のある本を二つばかり見ておこう。一つは、日本民藝館蔵の絵巻である。ここには、龍宮浄土と金の浜が登場している。

さても、この女はう、うみのうへにて、をりけるとをもへは、こかねのはまへ、おちつき、こなたへ、いらせ〔絵 第三圖〕
たまへとて、うちによひいれて、申やう、みつからは、(略)

かりそめとは、おもへとも、はや三年〔絵 第四圖〕にこそなりにける

あるとき、このりうくうしやうとの、四はうの、しきを、みせ申さんとて、たちいてける

まつ、ひかしのもんを、あけてみれば、むめ、さくら、さきみたれ、心ことはも、をよはれす〔絵 第五圖〕

(室町時代物語大成・第一・六〇三頁)

この民藝館蔵絵巻は、最近、新編日本古典文学全集『御伽草子』の「浦島太郎」に本文として採用され、初めて注釈が加えられたものである。しかし、その描写に流布本と大きく異なる特徴はない。ただ注目したいのは「りうくうしやうと」ということばである。一見これは龍宮城という語句の末尾に「と」が誤って衍字で入ったものとも考えらるが、これから見ていくいくつかのことを総合して考えると「龍宮浄土」と取ってよいと思われる。(注^三)

次に古樟堂文庫旧蔵絵巻を見る。これは絵巻といつても、奈良絵本を改装したものであるといつが、絵にも本文にも特徴を持つ興味深い本である。かつては古樟堂文庫に存したといつが、今は所在不明である。

御物がたりに、心いさみ、いつのまにかは、ほとなく、ほぶらいさんにつく、これこそ御すみかと、ありしかは、夢の心ちに

見たせは、かい〔絵 第九圖〕まんくとし、きわもなし

さなから、しつほうをちりはめ、くふてん、ろつかく、けんくはんをたて、しろかねのついち、あかゝねの、もんをたて、そらには、たまのはたをなひかし、らんかんには、るりのゆきけた、しきてわたせり、はくしゆのはたは、かせになひき、ぶきくるかせに、あたりて見れば、こと、ひわ、しやう、ひちりきの、しらへ〔絵 第十圖〕みちく、て、さなから、こくらくしやうども、かくやらんと、しやうしむしやうの、ねぶりも、さめぬへしと、心そゝるに、うれしくこそ、おもひける

もんくはいには、八たいりうわう、もんのはんをこそ、つめられける〔絵 第十一圖〕こと、おひたゝしきふせい、めをおとろかず、はかりなり〔絵 第十二圖〕

いまた四きののていを、みせまいらせめて、御てこしき、こしらへ、みなく、くわんにんとも、あまた、めしつれて、ぶうぶは、こじに〔絵 第十三圖〕めされつ、そのほか、さんかいの、ちんぶつ、とんのへて、まつ、はるの、に、いてさせたまふむめさくにはに〔絵 第十四圖〕ぶく風は、にほいもよそに、ちる花の、木すゑをつたふ、うくひすの、はつねもむすぶ、たにの水、こほりはいまたはつさくら、さきにけり〔絵 第十五圖〕やなぎのいと、なかきひも、やよひはすへと、なりてけり、

いての山ぶき、さきみたれ、まつのなたてに、なかふちの、はなむらさきの、くも見えて、わりなかりける、けしきかな

(室町時代物語集・第五・二〇二—二〇三頁)

この絵巻では、異郷の描写自体は、七宝・宮殿楼閣玄関・銀・銅・玉・瑠璃・琴・琵琶・笙・箏・筆・筆・筆と具体的詳細になっているが、基本的には他の流布本類の有り様と大きく異なるものではない。一番の違いは異郷の名が蓬萊山となっていることである。浦島の行き先は、なにも龍宮と決まっていた訳ではないのである。しかし、行き先の呼称が異なっているにもかかわらずではないようである。ただし、古代の常世や蓬萊に對して、中世の伝説でも龍宮よりは蓬萊の方が優勢であった。龍宮に固定していくのは近世に入ってからのことである。

ところで、こうした所謂御伽草子の話には、今日の昔話や絵本で知っている浦島太郎とは違うことがいくつもある。まず、亀に乗っていくことはない。舟に乗って行くのである。亀に乗るのは元禄時代の一七〇〇年頃のことと思われる。また龍宮のイメージも例えばあの特徴的な龍宮造り(注四)と呼ばれている所謂龍宮門が描かれていない。この龍宮門も江戸時代後期の一七〇〇年代の後半以降のことである。

【三】 昔話・伝説「浦島太郎」の異郷表現の特徴

さて、では、こうした御伽草子のイメージを念頭に口承文藝「浦島太郎」の異郷イメージを見ていこう。まず昔話の例を二つ挙げておく。どちらもかなり古い報告ながら、埋もれてしまっていたもので、最近刊行された『柳田國男未採択昔話聚稿』から引用する。これまでに未紹介であり、今日入手できる資料としては古いものに属するからである。まず、「浦島太郎」には次のような全文である。

昔々、浦島太郎(は)毎日毎日雑魚取りに海へ行つとゐる。子供が亀取つて殺しよる。そこへ浦島太郎通りかゝる。「その亀売つて呉れ。」言ふて、買ふて海へ流してやる。その亀は龍宮の乙姫様の使ハシメ(であつた)。

今度海へ又行つたら、「龍宮においなはれ。」言ふて亀が迎へに来るゲナ。そこで亀に乗つて行く。龍宮は夏は夏で晴やかなゲナ。冬は冬で温ふしたゝるゲナ。そーらエ、(良い)処やゲナ。大事に(浦島はもてな)して(貰ひ)御馳走したり踊つて貰たりて世話して貰ふ。十年暮れ、二十年暮れ、百年も暮れとゝるぢやるかいな。一べん帰りとなる。そで、「一べん戻りたい。何時まで居つても端がない。」言ふ。ホナ乙姫様が止める。「帰りたい。帰りたい。」あんまり言ふので、乙姫様が戻しちやつたる。

土産に玉手箱貰ふ。乙臣様が「この箱開けるな。」言ふ。言ふちやるケナ。

戻つて見たら親も死んでしもて無し、家も無い。友達も皆死んでしもて居やへんワナ。家も無し、知つた者も居らんし、帰る處もないケナ。仕様事(シヤウジ)（シヤウジ）無しに土産に貰た玉手箱開けて見る。ホナなんともかんとも知れん煙見(ケウリ)たいな物が出て来て、白髪(シラガ)の爺(オヤジ)となりけり。開けて惜(オソシ)しき玉手箱。

昭和十二年一月二日再採集、喜多村の話。この話は終末の如き一定の話を持つてゐて、以前は常に型通りに始めから終りまで語られてゐたものであらう。（柳田國男未採撰昔話聚稿 雑誌『昔話研究』前後、山田良隆氏 五七九—五八〇頁）

これは、兵庫県氷上郡鴨ノ庄村字喜多の「氷上郡昔話」として集められたもののよつであるが、浦島が亀に乗つて行つたところは龍宮で、その描写は「夏は夏で晴やか」で「冬は冬で温ふしたる」という気候に関するもので、要は「そーらエ、処」である。

次の太田村の牛窪みよが語つた話も、掲出の題名は「龍宮童子」とあるが、内容は明らかに浦島太郎である。

昔々或る所に一人の狩人がゐてな、或時何気もなく海辺に出て見るとな、其所に四、五人の小さい子供が集つて何かいたずらをしてゐる。

其こに出て来たのが此の狩人でな。其のいぢつていたものを見るとそれは一匹の大きなカメだつた。

其の狩人は大変があいそつに思つて其のカメを子供から買上げて海に入れてやりました。

すると二、三日たつて狩人が海に出て来ると、一匹のカメが出て来て、「モシ、アナタはこの間私をたすけて下さつた人では御座居ませんか」と言ふので、さうだと答へると、では私の背中にのり下さい。恩かへしに立派な所につれて行つて上げませう、と言つたので、太郎も其の背中にまたがり海の中に、と入つて来ました。

すると、ふと向ふを見ると何やら立派な御殿の様な物が見へるので不思議に思つてゐました。しかしだん、と其の傍に行つて見ますと其れは、立派な目もさめる様でした。コツ、と二度た、と中から頭のかみを下げた立派な人が何人も、出て来て、立派な所へ天井は星がキラ、輝くし、テーブルはさんごでつくつて有るし、立派な椅子等がちゃんとそろへて有りました。

其こに通されてしきに色々の物をたべて一週間は夢中ですこしてしまひました。しかし急に自分にかへつてかへりたくなり、いつも泣いてばかり居ました。お姫様等が色々だましたのにもきかず、とう、帰りたくを始めました。すると姫がこの箱はやたらにあげてはならない。もしもの事が有つた時といつて一つの箱をわたしました。すると太郎は又カメの背中に乗つて

ハル／＼と自分の我が家に帰ると全くかはっていました。姫の言つた事を忘れて其の箱を明けると見るまにお爺さんになつてしまひましたとき。」(『同書』川越地方昔話集・鈴木堂三氏・山田勝利氏・一九三二—一九四頁)

こちらは亀に乗つて行つた先は「立派な所に」とだけあつて龍宮とは明示されてはいない。そして、その描写も「立派な御殿の様な物」で「目もさめる様」なもので、その後も「立派な人」「立派な所」「立派な椅子」と「立派な」が三回もくり返され、結局具体的なものは「天井は星がキラ／＼輝く」「テーブルはさんご」という海とも限らないが不思議な世界である。

こつ見てくると、浦島太郎の行つた先は案外漠然としたところであり、先の御伽草子に比べてもはつきりとしたイメージがある訳ではないようである。

では、こついつた昔話について、次に「浦島太郎」以外の異郷についても見ておこつ。異郷について関敬吾氏に次に示すような興味深い指摘がある。これは、『日本昔話大成』の完成に際して、その跋文がわりに記された文章の一部で、昔話の異郷と話型について言及したものである。

さらに、隠れ里Ⅱ異郷訪問譚は、ATでは泉のそばの紡ぎ女Ⅱ親切・不親切な娘(AT四八〇)としてただ一例しかない。これもまたわが国では舌切雀、団子浄土、継子の栗拾い以下、少なくとも十五のタイプをあげることができる。

(『日本昔話大成』11・『集成』から『大成』へ跋文にかえて・三九三頁)

異郷訪問譚を「隠れ里」ととらえると、その話が外国に比べて豊富だと述べている訳である。話の分類の方法によつてそれに属する話の数が当然変わつてくるのであるから、こつした指摘は一概に言えないのであるが、膨大な昔話を一人の視点から整理を終えた後の記述であるゆえにこの指摘は貴重である。そして、この関氏の記述から、一見日本においては、異郷はたくさんの昔話をもっており、その種類も多いと考えられそうである。しかし、実際はそれほど異郷は多様ではないようである。その異郷描写を具体的に探してみると、その存在する場所は、竹藪・山の中 土間の穴・岩の穴 天上・海底などであり、その描写は、「鶯の内裏」や「十二座敷」の場合は「立派な門のある大きな屋敷」とあるように、屋敷や座敷という程度なのである。内裏ということばが使われていても、これは政治の場という意味でなく、いわば、都の象徴であり大きな御殿の象徴という意味合いで使われたことばであると思われる。そして、この内裏をさらに想像上のものへと広げていくと浄土ということばになるのである。つまり異郷としての「鶯の内裏」が「鶯の浄土」になり、また、「龍宮」と「浄土」が複合したイメージとなつたも

のが「龍宮の浄土」なのである。

しかし、結局このようなことばの上だけの具体的なイメージが希薄なものでしかないよつである。具体的な話を例に挙げて見ていく。「鼠浄土」という標題で掲げられた話の中では、そこは次のように描写される。

(前略) よくみるとそこに穴があつてそこから鼠が出て来て「お爺さん只今は有難たう。お爺さんお礼に良いところへご案内ませう。私の尾はちにつながつてお出なさい」といつた。つながてゐたら穴を潜つて地の底の大変広い座敷へ着いた。そうしたら沢山のねずみが踊りをして見せたり、歌を歌つて見せたりした。(以下略)

(『柳田國男未採扱昔話聚稿』奥能登昔話 三谷栄一氏 三九一—四〇頁)

この「鼠浄土」では、山へ行つてお昼に食べようとした団子が、転がつていつた先に穴があつて、その穴の奥が広い座敷となつていたのである。そして座敷は「大変広い」という以外に具体的な描写はない。ここではむしろ座敷であることが、そしてその座敷がとてつもないことこそが、異郷の条件だと思われる。次の新潟県見附市の「龍宮童子」の話になると更にはつきりしない。

(前略) ある日、いつものように花売つて帰つてくると、大水が出て川が渡られない。「はアて困つたことだ。これではうちへ帰ることもできないが——」と思つてみると、不意に足下から大亀が出てきて、乗れ乗れといわんばかりにしているんで、その背中に乗つたところが、思いも知らずどこへともなし持つていかれてしまいました。男はびつくりして、「ここはどこか」と聞くと、「お前は平田、乙姫様に花を上げ上げるんで、乙姫様がお礼をしまつしやるといつて、呼び申したがんだ」といふ。「そうかいな——」と思つて、乙姫様の御殿へ上がつてみたれば、(以下略)

(『日本昔話大成』六・八頁)

この話には「龍宮童子」という標題がつけられている。亀に乗つて行つた先の場所もはつきりとしていないし、その名称も「乙姫様の御殿」だけで具体的に書かれていないが、乙姫様が出てきているのでどうやら龍宮と考えてよいと思われる。しかし、その描写はまったくないのである。次の群馬県伊勢崎市宮子町の「龍宮の話」(高木一「神宮寺の鐘ヶ淵」)も同様である。

むかし、龍宮様(宮子町龍宮)に藤の木があつたので、阿感坊という人が鉈を持って藤のつるを取りにいつたそうだ。そひたら、まちがつて、鉈を川の中に落としてしまった。阿感坊は、下におりて、鉈を拾いに川の中に入って、龍宮に行きつた。龍宮で三日ばかりだと思つたら、三年たつてしまった。阿感坊が家へ帰つてみたら、家では、葬式まであるませていた。(後略)

(『日本伝説大系』四・二五三頁)



英泉画『画本錦之囊』・浦嶋

【四】 異郷の娘たち

ところで、具体的な描写が希薄なことに対して、逆にこの昔話・伝説の異郷イメージの特徴として挙げられるものは、そこに必ず乙姫という女のいることであろう。龍宮とは乙姫がいる異郷である、という見方ができる程、それは切り離しがたいものである。

しかし、そこでここ数十年気になっているのは、その龍宮というところには、なぜ乙姫以外の人物がいないのであるのか、ということである。本来の龍宮とは例えば、『法華経』の巻第五・提婆達多品では、沙竭羅龍王の住む所であって、そこには男子変生を遂げる八歳の龍女がいた。その龍宮の乙姫というからには、弟の姫であって、理

ここでは具体的に川の中に龍宮があるというのであるが、その龍宮の具体的な説明はやはりないのである。

こうして見てみると、龍宮を含めた昔話の異郷とは、具体的イメージのないただ不思議な場所なのであると思われる。しかし、改めて浦島太郎の異郷について今日的イメージを絵本の中に探ってみると、そこには確たるイメージがあることは既に確認ができている。その具体的例を一つだけ、江戸後期の絵手本から掲げておこう。文政十一年（一八二八）刊行の深斎英泉画『画本錦之囊』である。「浦嶋」と題し、龍宮城を背景にして蓑亀に乗っている浦島太郎の絵であるが、龍宮城には典型的な形の門があることが見受けられる。この絵からも今日的龍宮のイメージの伝達が、昔話・伝説よりは、絵画を通して百七十年以上も行われてきたことがわかる。

屈からいえば、本来年上の兄姫（姉姫）がいたはずだと思われる。

ゆえに所謂御伽草子の浦島太郎でも、古樟堂文庫旧蔵本には八大龍王も登場し、またこの乙姫も浦島に命を助けられた亀であって、八歳の龍女の妹であると説くのである。

しかし、御伽草子流布本系では、本文でも絵でも乙姫の姉妹は描かれず、その上龍王の存在すら希薄である。また、江戸期の草双紙類にも龍王は登場するものもあるが、既に乙姫は単独で出てくるものが多い。また、昔話類でも、本来の主であるはずの龍王の存在は希薄なのである。これらの原因を考えると、この異郷としての龍宮には、本来の龍宮とは異なる視点と論理が含まれていたからではないだろうか。

異郷には必ずその主がいる。そして、そこには主の娘という設定での女もいることが多いようである。たとえば、所謂御伽草子の『御曹子島渡り』では、御曹子源義経が渡った千島の喜見城の主「かねひら大王」に娘「あさひ天女」がいて、自らの身を犠牲にして義経が「大日の法」という巻物を手に入れるのを助ける。例外的に『天雅彦物語（七夕の本地・大蛇怪婚系）』の長者の三女などもあるが、異郷の女の例は多い。こうした異郷の女の存在とその女性が授ける財宝という発想が、異郷譚にはかつては存在していたのではないだろうか。

例えば、昔話・伝説においても「黄金の斧」という話型では、斧を落とした水の底には美しい女がいるように設定されている。また、その女は機織りをしていることもあるようである。それを具体的に見ると、大分県緒方郡大野町の「七が淵」〈柳田龍宮淵〉という伝説では、

七さんという人が木を切っていたが、オノが手からすべって川に落ちた。あとでオノを探しに行くと、淵の底に乙姫様がいて、機織りをしていた。機の方にオノがささっていたが、姫様は、七さんを歓迎した。七さんが家に戻った時は、すでに数年の年月が過ぎ去っていたという。それ以来、七が淵という名がついた。

（『日本伝説大系』十三・二七四頁）

という、斧を落とした淵の底には、乙姫がいて機織りをしている。そして乙姫は訪ねてきた男を歓迎する。乙姫と機織りの組み合わせは、一見奇異な気もするが、こうした異郷・女性・機織りという組み合わせを視野に入れて考えると理解できるのではないだろうか。「黄金の斧」の水神の例、美しい姉妹がいる岩手県下閉伊郡の話、淵の中で姫が機織りをしている大分県東国東郡の話、静岡県天竜市、福島県いわき市など、類例は多い。

このように異郷には女性がいるという特性を考慮すると、ひょっとして鬼ヶ島という異郷にも美しい女性がいたのではという考え方が成り立つ。

たとえば、野村純一氏が『新・桃太郎の誕生』の中で、詳細に触れているように（八〇頁）、地獄の鬼の姫の登場する話は岩手県『紫波郡昔話』に見られ、柳田国男は『昔話採集手帖』の最初にこの桃太郎を掲げているのである。その話は、桃ノ子太郎が黍団子を拵えてもらい鬼のいる地獄へ向い、鬼の寝ている間に地獄のお姫様を無事連れ帰るといふ『御曹子島渡り』にも似た異郷の姫との結婚を匂わせるもので、これも異郷の女の話の一端であるといふ見方ができるのである。この話は、最近刊行された『正部屋ミヤ昔話集』にもほぼ同じものが収められている。その出典は本からのみ記されて未詳であるが、やはりこのような発想から生まれたものであろう。

冒頭に引いた小沢氏の異郷譚の解説が財宝を贈られると述べているのもこの辺りのことをとらえてのことだった。ゆえに、昔話・伝説では、異郷そのものよりも異郷の女性にこそ重点があつたと見るべきなのかもしれない。

【五】 まとめ

先に引いた『新・桃太郎の誕生』の中で野村氏は、巖谷小波の叙景描写が冗漫過ぎることを指摘し、「昔話は元来、出来事のみ、いふなれば惹起した事件を主体に、それを骨太に繋いでいく。枝葉末節にとらわれずに進展していくのが方途であつた。」と述べている（四十頁）。そうした昔話の観点から見るとすれば、イメージが希薄な部分とは、昔話においては、枝葉末節な部分ともいえよう。そして、それを別の面からいうならば、昔話・伝説とは、枝葉末節もしくはディテールの少ない、具体的描写の少ないイメージに乏しいものである、ということにもなるのではないか。おそらく昔話・伝説はもともと詳細な描写を得意としない文藝なのであろう。そして、これは江戸時代後期から盛んになってくる、版本の絵本類とは大きく異なるものといえはしまいか。

先に述べたようには、龍宮には確実に絵で示されたイメージがあり、それによつて異郷の具体的イメージを継承してきている。それに対して、昔話・伝説が継承してきた異郷とは何であつたのであろう。日常とははつきり隔絶した世界で、私どもに何かをもたらず女性の存在する以外に、確たるイメージのない世界といえるのではないか。

こうした違いを招来する大きな要因の一つとして、メディアの違いが考えられよう。所謂口承文藝は、口頭伝承、ことばの音声による口から耳への伝承である。そこでのイメージの伝達は、僅かな身振り手振りを除けば、すべてことばによるものだろう。だが、ことばは未知のイメージを表現しようとするとき実に無力である。結局比喩の多様

によってかるうじて類推させる以外にはない。最後には伝家の宝刀「筆舌尽くしがたし」と述べて、説明を拒否するのである。また、仮に未知のイメージについて詳細に伝えようとすれば、それは詳細にすればする程昔話の本道からはずれていってしまうだろう。「必要以上の文飾を施したり、あるいは不用意にそこでの筋を膨らませようとすると、話は話としての矛盾を抱え、思い掛けぬ破綻を来すことになるのは避けられぬ宿命」(『新・桃太郎の誕生』三五頁)なのである。

一方、絵というメディアでは、見たこともないものも描くことさえすれば伝達することは可能である。そして描かれた絵は視覚イメージとなってそのまま明瞭な形をもって受け継がれていく。

たとえば、『遠野物語拾遺』に興味深い話が二つある。一つは一五六で、友人某が大病で息を引き取った時のこと、「絵にある龍宮のような門」が出てくる。これがあの世と冥土の入口を象徴していることはわかるが、語りの中で「絵にある」という、話とは異なるメディアの引用があるのが興味深い。また、続く一五七にも、別の友人が(病気で発熱するとよく幻覚を見るらしいのであるが)子供の時に鍋倉山の坂道を駆け下る際に転んで気絶した時に、倒れたと思うと「絵にある龍宮のような綺麗な処が遠くに見えた」とあることである。こうした表現は、異郷イメージが絵という視覚イメージで伝承されてきたことを示すと共に、『遠野物語拾遺』が本質的に昔話・伝説とは異なるものであることを象徴しているのではないかと思われる。

注一 その詳細は拙稿「龍宮的イメージの形成——近世の浦島伝説とその周辺をめぐって——」(『苫小牧駒澤大学紀要』第八号・二〇〇二・一一)を参照された。

注二 この祝言御伽文庫の四季の描写が、慶応義塾図書館蔵絵巻『酒吞童子』とほぼ同じであることは『いまは昔むかしは今』第四巻(一九九五・一一)、福音館書店)・三三七頁に指摘がある。その先後関係は詳らかにしないが、こうした草子同士の援用・流用の例は多い。

注三 池田弘子「浦の島子」(石田英一郎教授還暦記念論文集『昭和三九・七、角川書店)に、浦島太郎の訪問する異郷のわたつみの国を福井県の方言では「竜宮の浄土」というと説いている。

注四 龍宮の門のイメージについては注一の拙論、亀に乗ることについては「浦島伝説における近世的展開——浦島亀乗譚の生成をめくり——」(『説話文学研究』第三五号、二〇〇〇・七、後、浦島伝説の研究)二〇〇一・二、おつぷつに収録)に論文としてまとめているので、その詳細はそちらを参照されたい。

注五 こうした異郷において男を迎える女の存在については、間宮史子氏「異郷訪問譚における「山野の異郷」イメージ」(『日本昔話のイメージ』) 白百合児童文化研究センター叢書・一九九八・古今社)にも既に指摘がある。

参照テキスト

日本昔話集成 全六巻 昭二五〜三三 角川書店

日本昔話大成 全十二巻・別二巻 昭五三〜五五 角川書店

日本昔話通観 全一八巻 昭五二〜六四 同朋舎

日本伝説大系 全十五巻・別二巻 昭五七〜六一 みずうみ書房

柳田國男未採択昔話聚稿 野村純一編 二〇〇二年二月 瑞木書房

付記 本稿は、日本口承文藝學會・第二七回大会(二〇〇三年六月八日、於・岩手県遠野市あえりあ遠野)での口頭発表原稿を素稿とし、若干の補足を加えたものである。会場でのご質問を戴いた各位と司会の方々に感謝を申し上げます。

(はやし こうへい・本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第11号(2004年3月31日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 11, 31 March 2004

〈翻訳〉「文化とは何か」『文化の危機』(第3章)

〈Translation〉“What is Culture” in *Cultures in Crisis* (Chapter 3)

村井泰廣
MURAI Yasuhiro

キーワード：多文化主義(multiculturalism)¹、文化多元主義²、文化人類学、多様性、文明

要旨

本書は文化人類学的な立場から、危機をはらんだ現代世界の諸問題を取り扱っている。原書第三章の「文化とは何か」において、「文化」の本質的概念を問い質しているのである。いわゆる未開社会、いわば人間の最も原初的な本質を保っていると思われる社会(例えば、ナバホ・インディアンなど)のあらゆる様相を克明に調査・記録・分析し、人類の文化の普遍的な部分と特殊・個別的な部分とを識別することを通じて、人間についての理解を深めるものである。そのためには文化に対する多様性に対する認識が肝要であり、それぞれの文化は進歩の度合いによって一直線上に秩序づけられるような単純なものではなく、それぞれの文化が自然風土に根ざした独自の価値を有し、優劣をつけるような性質のものではない「文化多元主義」の立場を説いている。

はじめに

本書は、James F. Downs, *Cultures in Crisis*, Glencoe Press, California 1975, (第二版)のうちの第三章“What Is Culture?”を翻訳したものである。同書の構成は次のようになっている。

1. Race: The Deadly Myth, 2. Ethnocentrism and Cultural Relativism, 3. What Is Culture? 4. Foundations of Culture, 5. Class and Caste, 6. Nationalism, 7. Communities: Real and Official, 8. Status and Role, 9. Form and Function, 10. Our Environment and Surroundings の各章と、後半部 Crisis Area I. Drugs, II. The Underdeveloped World, III. The Policeman's Lot, IV. A Blot on the Land, V. Violence, VI. Boys and Girls Together の各章、および結びの The Crises Ahead より成っている。

著者である Downs 教授は、University of California at Berkeley で Ph.D. を取得した人類学者で、University of Arizona の人類学の準教授を経て、Chairman of Cross-Cultural Training, University of Hawaii の教授の経歴をもつ。著書には、*Animal Husbandry in Navajo Culture and Society*; *Two Worlds of the Washo* をはじめとし、共著に *Human Variation: An Introduction to Physical Anthropology*; *Readings in Physical Anthropology* があり、その他の学術雑誌の論文も多数ある。

特に明記しなかったが、翻訳の注をつけるに当たっては、下記の辞書から引用したことを付言しておきたい。『小学館ランダムハウス英和大辞典』『研究社英和大辞典』『岩波英和大辞典』『広辞苑』（岩波；第五版）及び The Random House Dictionary of the English Language を使用している。

なお、「文化」という言葉が多くの人によって語られている。また、町にも書店にも「文化」という言葉があふれているにもかかわらず、総論としての「文化とは何か」という問いに答えてくれる書物がなかなか見つからないのが実情ではなかるうか。そんななかで「文化人類学」という比較的新しい学問が、総論的な文化の問題を扱っている。その先駆的人类学者である本書の著者 Downs 教授は、この種の書物の中でも「文化」の本質についての理解を深めることを主要なテーマとしている。

「文化とは何か。」〈翻訳〉

文化人類学者にとって、文化とはとても特別な概念である。何故ならば、「文化」³は、文化人類学者にとってすべての研究の中心をなすからである。この文化の概念は、近代日本の工場の街に住む人を1万年前に捨てられたアナトリア⁴の村の遺跡を掘った人物とコミュニケーションを可能にするものである。

文化は、人間特有の側面をもち、私たち人間がいかにほかの動物と違うかということを示すものである。しかし、人間を理解する最初のステップは、私たち人間も動物であるという事実を受け入れることである。私たち人間は、ハツカネズミ、テンジクネズミ⁵、象、鯨といった哺乳動物種の特徴と分かち合う哺乳動物の種であるということである。人間に有益な多くの医学的、心理的知識が動物実験の研究によって得られるのも、この理由からである。即ち、人間は他の哺乳動物と同じ生物学的類似性を持っているということがわかる。

しかしながら、哺乳動物の種のなかでも、人間はユニークである。動物の行動の多くは、遺伝的本能によるところが多い。すなわち、学習が動物たちの行動を決める役割が非常に小さい。他の動物と違い、人間の行動の多くは、本能的ではない。人間の行動は、非常に複雑な学習過程の産物だということである。これは「文化」を考える上で極めて重要な視点である。もし、人間の行動が遺伝による本能によって支配されているならば、人間の行動パターン、行動様式を変えようと試みるプログラムの成功は、ほとんど希望のないものであろう。即ち、人間も、他の動物と同様に生物学的な順応によるゆっくりとした過程に隷属されることになるだろう。

これは、人間が生物学的な進化に影響されていないことを意味するものではない。勿論、人間も他の生物種同様に、遺伝や自然淘汰⁶という同じプロセスに委ねられている。二百数百万年前、地上のすべての種にこれらのプロセスが造られ、しかし、すべての動物と全く違う能力と潜在能力をもっている猿⁷に最も近い単一種が、造られた。この大きな相違が「文化とことば」を発展させるための新しい種の知的能力であった、といわれる訳です。

この新しい種の動物「人間」は、他の動物とは比較できない速さで自分達の行動を環境に適合・順応させる能力を身につけていたということが出来る。さらに、生物学的順応性とは違い、人間の知的順応性は、他の動物にない特質を失ったり、損ねたりするものではなかった。即ち、飛行能力がこの良い例であろう。鳥や蝙蝠(こうもり)は、飛行を獲得していく過程において、羽が進化することから、前肢の他の機能が失われた。鳥や蝙蝠は、腕や前肢を発達させ

るために遺伝的な潜在能力をもはやもち得ないということである。一方、ホモサピエンス⁸は、前腕や腕や他の身体的、技術的特性を失うことなしに飛行するための能力を発達させていった。人間は、歩くし、ボートを漕ぐし、馬に乗るし、自動車を運転もすると同時に、飛行機、グライダー、気球、小型飛行機⁹、そして、宇宙船¹⁰で飛んだりする。変化させることなしに適合・順応するこの能力は、人類の未来における希望の源であり、人間文化の基礎なのである。

おそらく、人間の特異性のカギは、「象徴・シンボライズ」¹¹にある。即ち、「象徴・シンボライズ」とは、ある事柄を他の物に代用する能力があるということになるであろう。もっと、解かり易く言うと、動物種のなかで人間だけが、赤と白と青の配色の旗¹²に対し、特別な意味を与えられるのである。例えば、世界の至る所で、アメリカに対し怒れる若者たちが勇んでアメリカの国旗を下ろし、引き裂いたり、燃やしたりすることに大いなる鬱憤を晴らし、満足を得るということである。即ち、この国旗というシンボル(象徴)の破壊は、イランやジャカルタやクアランプールについてほとんど聞いたことのないアイオア¹³の州民を非常に激怒させることさえ可能なのだ。

そんな中でも、もっと微妙なのは言語である。私達人間は際限ないほどに多くのものに意味を与えている。音を発して、即ち「発音」に伴う意味の体系的な形態が言語である。例えば、英語で、次のようなちょっとした変化が意味を変えることに成る。即ち、cat, kit, cot, cut。英語の方言では、この音声はcatと同じく考えられるのだが、cetには意味がない。要するに、ここでのポイント(要点)は、音という象徴のちょっとした相違が、全く違う目的と条件を象徴(意味)するということである。

人間は、このようにシンボライズする能力をもって識別し、分別し、社会状況を分類する手助けをする働きを何時もしている。アメリカ人にとって、微笑は「喜び、親しみ、幸せ」を意味している。明らかな意味を持たずに、微笑する人は怪しいのである。同様に、身振りも、また、象徴的な価値をもつのである。アメリカ人が子供に「バイバイ」を教えるとき、彼らは手を動かす動作で上下する。インドや日本や他のアジアの国々では、この身振り(ジェスチャー)は「さようなら」ではなく、「こちらへおいで」を意味する。

他の動物では、象徴(シンボライズ)する能力は欠けているようだ。あるいは、それ(シンボライズする能力)は、非常に初歩的な形で存在するだけである。私たち人間の生活においては、それは基本である。言語で象徴(シンボライズ)する能力は、他の人々が決して体験しない経験の結果を彼らに教えることを可能にしているのである。それ(言語をシンボライズする能力)は、私たちに過去の世代の知識を蓄えることを可能にしている。音や物や手振りに意味

を付与することが、それらのグループはあまりにも大きいので個々人のメンバーはお互い会うことが無いかもしれない、様々な目的をもったグループを形成することを人々に可能にしているのである。象徴は、さもなければ、協調する理由など全く無いかもしれないだろう人間と一緒に結びつけるものなのである。

外国の地において、二人のアメリカ人がお互いに知り合い(アメリカ人と認識し合い)、そして友人になる。というのは、広大なアメリカのどこかで二人が生まれたからという理由からではなく、彼らの言語とか、身振りとか、服装とか、表情において、彼ら二人は非常に多くの共通したシンボルを共有するという理由からである。もし、これに反して、ふたりの一人が中国語を話したならば、そして、中国的な表情と身振りをもって応えたならば、二人の偶然の生誕地は、ふたりを結びつける役割を果たさないであろう。

文化は、ある人間の集団によって共有され、また、彼ら(ある人間の集団)によって後世に伝えられるシンボルの体系であると言えよう。もう少し適切に、この定義を「文化」に当てはめて見よう。すると、一般的に言えば、人間の文化は、「抽象の潜在的な能力」である。それ(人間の文化)は、ほとんど際限ないほどの変化(バリエーション)のなかで、違った時代の、違った場所で、違った人々によって違った方法で表現されているのである。しかしながら、この定義における重要な言葉は、システム「体系」である。ある人達のグループ内で共有される象徴(シンボル)は、習慣や活動の単なるでたらめな寄せ集めではない。むしろ、それぞれの文化が、その文化のいろいろな要素と関連し、そして、相互に依存する、それぞれ独自の論理を持つ傾向がある。しかも、いろんな要素と関わり、独立していることに私たちは気がつくであろう。文化的変化、社会的変化を促そうと試みる人にとっては、この体系的な要素(を理解すること)は、極めて重要である。明らかな利益の実施(利益をもたらす習慣)を取り入れることに対する抵抗は、単にその実施に対するものではなく、外国人が全く見えないその文化に付随する他の面・様相の変化の影響に反対することを反映しているかもしれない。

ある特定の文化的体系の複雑さを詳細に述べる代わりに、私たちは、おうおうにして「文化様式(パターン)」¹⁴を持ったものとしての「文化」について語っているのである。これが意味するところは、いかなる社会における組織の信仰や習慣や形態が、相互に関連していることが伺われる、ある(一貫性のある)テーマ(主題)¹⁵をもっている、ということである。私たち自身の文化に

おける時間の重要さは、ひとつのそのような例である。そして、そのパターンは、産業過程から倫理に至るまで、私たちの生活の多くの場面において、表れているのである。

アメリカ文化におけるもうひとつの文化様式(パターン)は、政治から結婚、子どもの育て方にいたるまで、私たちアメリカ人の生活の多くの分野で、個人に重きが置かれていることに表されていることであろう。軍隊のような組織や、大規模な工場労働やチーム・スポーツなどの分野では、厳格な個人主義は、ただ単に不適切であるばかりではない。むしろそれは、失敗を導くものであろう。にもかかわらず、私たちは個人主義を抑圧する時でさえ、(私たちは)個人主義の理念に強力な象徴的支持を与えているのである。

軍隊は個人の英雄的行為に最も高い(名誉の印の)勲章を与え、そして、多くの軍基地では、定期的に「兵士の週(Soldier of the Week)」を尊んでいる。むしろ、私たちは人間として、組織よりも個々人の将軍や海軍提督に賛美を与えたり、あるいは、中傷したりしがちなのである。

大企業は創造的で自立的な考え方をする人を探し求めていると強調するが、大企業は、たとえば、(会社の仕事)の分野とはまったく関係のない(従業員の)服装のスタイルにおいてでさえ、一般的な会社の基準から大きく異なっている創造性豊かな従業員を昇進させないでいるのだけれども...

私たちは、スポーツ・スターの天文学的な給料を正当化しつつ、しかも彼らをお世辞いっぱい賞賛し、私たちはスポーツ・スターをもてはやしているのである。見栄えのしない平凡な「チーム・プレイヤー」、(フットボールの)相手陣営を攻撃する選手に対しては、私たちは恩着せがましい態度で見下し、低いサラリーを支払い、ほとんど尊敬もせず、最期まで無名に帰してしまうのである。

アメリカ文化の個人主義と同じくらい強く表現される正反対の文化様式(パターン)は、集団の問題を解決するための多数支配の概念(the concept of majority rule)である。アメリカ人は「我々は何をするか」という問題に直面した時、ほとんど(無意識なまでに)自動的に集会を開くのである。幼稚園の先生が、幼児たちの決断が適当であると考えられる問題に対しては、幼稚園の小さな園児たちでさえ、多数決で評決が促されるのである。投票と呼ばれる行為は、多数決ルールが当てはまらない、あるいは、当てはまるはずがない多くの状況においても、象徴的な表現で表されているのである。

多くの会社は、たとえ誰も社長の意思に反対票を投じなくとも、票決が行われる「定例重役会議(regular board meetings)」を開催するである。(もし、

彼あるいは彼女が、反対の票を投じたならば、その投票は無視されるだろう。) 同様に、高校・大学の管理・経営者たちは、生徒が積極的に生徒自治会に参加することを奨励していること(多くの場合、強制されているのだが)に同意しているのである。しかし、一握りの管理・経営者たちは、カリキュラムや財政、人事雇用、学則などの問題に関し、生徒たちの票決で決められることを潔よしとはしないのである。事実、彼らは政策問題に関し、ガイドラインを示す教授会の票決でさえ拒否するのである。それにもかかわらず、どんなにその逆説が皮肉であろうとも、ほとんどの人々は、公然と集団問題に対する解決の方法として、多数決ルールに不満を言い表さないのである。そうすることは、理性あるいは精神的法律を破るということではなく、また、多数決という精神的法則を冒ししないためではなく、私たちがそれらを「当然」であると見なしているところの深くそして微妙なほどに私たちの心に植え付けられている文化的パターンを冒ししないためなのである。

しばしば、文化様式(パターン)は、少なくとも大人の間では、意識のレベルに上らないのである。時々、強制的に、かつ、知らず知らずのうちに無意識的の巧妙さをもって、子供たちは、ある特定の方法で行動することを教えられていくのである。もっとも身近な、そして、表面上、個人的な行動でさえ、それを知ることなしに教えられているのである。往々にして、これら文化様式(行動パターン)は、私達の身体的反応として組み込まれているのである。排便の習慣的姿勢についても、自分たちの排便の姿勢とは違う文化に住むことを強いられている人は、精神的にも肉体的にも、その結果として生じるであろうその違う文化に順応する問題を立証することができるだろう。

性行動は一般的にアメリカ社会全体を通して類似しているということをキンジー博士¹⁶から知り、多くのアメリカ人は、非常に衝撃(ショック)を受けると同時に、また、多くの人たちは、ほっとしたのである。この類似性は、「文化様式(パターン)」にもうひとつの適用を供与している。行為と信念において、ある特定の文化の環境にある人たちは、同じような行動をする。すなわち、彼らは確立された「文化様式(パターン)」に従うのである。私たちの社会においては、最近まで、性は自由に議論されなかったし、また、いかに性行為をするときの「適正な」姿勢を世代から次の世代へと伝える方法が、未だにはっきりしていない。そして、それが感銘するほどに堂々と伝えられるということは、逸脱から生じる激しい精神的感情的苦悩がもたらされるだろう。非常に多くのアメリカ人は、子犬肉のシチュー料理が出されたら、なぜか気持ち悪くなるかを明確に説明できないだろう。しかし、多くの人々は、例えば、フィリピンや

ベトナムでは、犬の肉は、美食家を喜ばすものとして見なされていることから、犬の肉に対する嫌悪感は、決して本能的なものではないということがお解かりになるだろう。

前述した事柄は、人の行動というものは、分析とある程度の予知を可能にさせているものなのだということを示唆している。多くの人々は、勿論、そのような予知は、不可能であると主張する。また、他の人たちは、その可能性を認めはするが、それは、賢明でないし不道徳であると信じている。そして、人類の基本であり独特な特徴である文化は、人間の行動を予測しやすくさせているのである。事実、もし私たちの行動が文化様式化（パターン化）されていないならば、それゆえに、予想予測できないものならば、誰も一日として生き残ることはできないのである。あなたの配偶者が家にいるかどうか、あるいは、どう行動するかどうか、について全く見当が付かない不確かさを想像してみてください。さらにそれに加えて、ある人が車を左側で運転する道路と右側で運転する道路に乗って、そして、全ての人が信号機の色にそれぞれ違った反応することを想像してみてください。

私たちの生活というのは、他の人たちが次に何をすることを予想予測できる能力によって律せられているのである。私たちが事前に知ることが出来ない人の行動というものは、変わり者として、極端な場合には、狂人として烙印を押されることになるのである。すなわち、私たちは、他の人の行動が予想可能でない場合、彼らにレッテルをつけることで、少なくともコントロール可能な環境をつくることのできるのである。事実、(それゆえに)精神異常の行動を予想する精神科医は、私たちの社会において、特別な専門職的な地位が与えられているのである。

しかし、これらの事柄のすべては、読者が尋ねているに違いないだろう「とにかく、文化とは何か」という質問に答えていない。正直に言って、私たちは簡潔にその質問に答えることが出来ないのである。文化人類学者は数えきれないほど「文化の定義」を論議してきたが、どれをとっても完全に満足するものはないのである。しばしば、人類学者は単に文化行動の例を示してきたに過ぎない。例えば、どのくらい多くの天使が頭にヘアピンをしていたか、というような「中世の聖職者たちの論争」¹⁷のように、まことに「つまらないことをせんさく」¹⁸することになるのである。ある著名な人類学者は、家畜の馬の群れを、彼はこれを文化といい、馬の蹄（ひづめ）を、彼はこれを文化でないという、この両者の区別することをおおいに喜びとしているのである。（大事な

問題点をはぐらかすための)この種のへ理屈とこじつけは、ほとんど人間の行動に有益な光を与えていない。

たぶん、エドワード・テイラー伯爵¹⁹によって提案された用語と概念の(文化の)定義が、(いかなる定義よりも)良いものである。すなわち、「幅広い民族学的意味において用いられている文化あるいは、文明というものは、社会の一員として人によって獲得された、知識、信念、芸術、道徳、法律、習慣、そして他の能力、慣わしを含めた複合体のすべてが文化と文明なのである。」²⁰この定義は、人と行動の相互関係を強調するものであり、人類学的アプローチ²¹のひとつのユニークな状況をつくるものである。すなわち、それは、全体論的²²であるということである。即ち、人の生活の全ての営み・様相は、たとえ私たちがどうしてそうなのかを理解しなくとも、人間の完全な理解に関連していると捉えられることである。文化のテイラーの概念は、また、人間の問題と関係性の膨大な複雑性を強調するものである。もっとも単純な概念であっても、おそらく月飛行に必要な計算よりもっと複雑な(専門用語でいうなら、より変数の多い)ものであろう。(すなわち、月への飛行とは、私たちが人間の問題を解決するのに投資しなければならないだろう努力と金の大きさについてのあるものを暗示している。)

多くの近代人類学者たちは、より体系的で厳格な研究でも処理できる正確な用語を追及しながら、私たちの学習した行動が、結局、私たちが物事について、(すなわち、私たちの認知において)どう考えるかの産物であるという前提で文化の新しい定義を発展させてきたのである。彼ら近代人類学者たちは、「認知モデル(cognitive model)」の観点から文化について語っているのである。要するに、私たちは、私たちの関係における周囲の環境や他の人々を導く「知的地図(mental map)」として文化について考えることができるのである。この地図とは、人格と私たち個々が持っている行動の特別な様式(パターン)と混同してはならない。この地図が、有効であるためには、お互いに影響を与え合う人々の数によって、即ち、社会の全体であろうとその一部であろうと、大なり小なりに、共有されなければならないものである。確かに、各個人は、少し違った地図を持っているかもしれない。個々の家族は、次の世代に伝えるやや違った見解を持っているかもしれない。しかし、少なくとも、その一般的な概略(アウトライン)とその詳細の多くは、大多数の人々によって共有されるであろう。私達が違った地図を使用している人達を見つけたときは、即ち、似たような状況を違った方法で反応していると、私達はある文化あるいはもう一つのサブカルチャー²³の境界線を横切ったことになるのである。

これを表すもう一つの方法としては、認識の相違について述べることにしよう。文化的背景の違う人は、実際、同じ物でも、また、同じ状況でも、違ったふうに見ているのである。これは、文化的相違が、趣味の問題、「《諺》 甲の薬は乙の毒、人によって好みは違う。」というよう類の問題であると単純に意味すると理解されるべきではない。アメリカの木材王とアメリカの環境保護主義者が「木とは何か」についての認知が完全に一致している。しかしながら、彼らは「木がいかに使われるべきか」については同意しないのである。

アメリカ・インディアンの村人が、木を困窮するもの、認識するもの、欲望をもつ生き物として見なすことを知り、彼ら両者は驚き、そして、少し困惑さえするだろう。私たちは認識の相違の多くの例を知る。そうであるから、私たちは、それらについてここではこれ以上、詳しくのべることはしない。

重要な事は、これらの相違が、私たちひとりひとりにとって、現実を定義するものであることを、はっきり理解することである。それは、たびたび、（この実）世界であるところのものではなく、私たちがそうであると信じるところのものであるということである。そして、それが私達の行動や他のすべての人々の行動を支配しているのである。

おそらく私自身の経験からのもう一つの実例が有益であろう。北アリゾナ州のナバホ族インディアン²⁴は、魔女が存在すること、そして、人間が狼に変わることも、また、人が他の人の餌食に変わるとも信じている。裕福に育ったアメリカの人類学者の誰もが、魔女も狼人間も信じないし、そして、情報提供者の恐怖に対する私の最初の反応（そういう話しを提供する者の恐れに対する私の最初の反応）は、優越者ぶった「理解」のひとりであった。要するに、私はどっちつかずの礼儀（態度）を装ったが、決してナバホ族の信仰を現実的に信用するものではなかった。しかし、ナバホ族と本格的に交わり生活しているうちに、たったの2～3週間を過ぎたあたりで、わたしは夜、ナバホ族の住居から抜け出ることを躊躇するようになっていたのに気がついたのである。外出する必要があるとき、（私はその愚かさに関心をもったのであるが）ほんのちょっとした音でさえ、胸がどきどきし、私の首の後ろ髪毛が起き上がったほどである。（それは、まさしく私たちの動物的な祖先との結びつきである。）

私は、私が本当に狼人間の存在を信じたと言うことはできない。事実、私が始めたところのものは、私自身のことばで事柄を説明しようと試みたことである。実際に狼が人になるということはほとんどありえないことである。しかし、狼の毛皮を被り変装することは可能ではなかったのではないか。（多くの洗練されたナバホ族は、白人による教育とナバホの伝統遺産とのはざ間でその

対立を解決するのである。)何が起きていたことは確かであり、狼人間が、どんな理由であれ、私にとって、現実になっていたということである。今、どうしてこんなことが問題なのか。たぶん、私は、少し非現実的な間抜けなのかもしれない。しかし、同じような経験をした人たちと意見を交換してみると、狼人間は私が交わった人達にとって真実であり狼人間は本物だと結論づけたのである。

ナバホ族は私と同様に、論理的であり、知的であることを私は直ぐに知った。しかし、このような論理的な人たちが狼人間を信じているのであり、さらに重要な事は、彼らはあたかも狼人間が現実であるかのように行動していることである。彼らの日常の活動は、狼人間が存在している世界観に適合しているということである。人が狼人間に変わるとか、あるいは、変装できるかどうかということは、それとはまったく別なことである。ナバホ族がそれを真実と信じている以上、あたかもそれが本当であるかのように行動している以上、それは彼らにとって真実なのである。

要するに、現実が人の反応を決定するものではない。むしろ、人が、あるいは、むしろ厳密に言うなら社会が、人の反応する現実を定義しているのである。もし、私たちが注意深く見るならば、私たちはこれらを自分たちの周囲でも見ることが可能である。

西部ワシントン²⁵では、雨が非常に降る。この地域に長く住んでいる人は、一日中しとしと降る雨を無視する。そして、彼らは、ちょっとした雨模様でもレインコートを着る、あるいは、雨傘を持ち歩く東海岸のワシントンの人間を、または他の地域からやってくる人間を、西部ワシントンの人達は面白がって彼らを揶揄嘲笑するのである。ここに住んでいる人にも、新しくやってきた人にも、事実、同じ量の雨が古くから降っているのである。その反応は、その雨の量によるのではなく、その雨をどのように見るようになるのかによるのである。

繰り返すが、お互い密着し統一・画一化した集団に住む人たちは、同じような「認識の地図」を共有しながら、何が現実で、そして、いかに現実に反応するかを決め、自分達の周りにある世界観を定義しているのである。

文化について、この単純な事実を把握することに失敗することは、——それは、岩でも、木でもない、人類の環境である——比較文化(クロス・カルチャル)²⁶の文脈で仕事する試みは消えうせてしまう運命にあると考えられよう。人間のユニークな特質という文化について話してきたが、私たちは、人が生まれた社会によって、人の心と身体に植え付けられている地図であると文化を定義した。この地図が、人の現実を定義し、多くの状況のなかで人が行動するガ

イドラインを設定しているということである。文化は、問題を解決するための規則であり、あるいは物事を説明する法則でもある、それは、ただ単に遭遇するというものではないのである。

注

- 1 The doctrine that several different cultures (rather than one national culture) can co-exist peacefully and equitably in a single country. Multiculturalism emphasizes the unique characteristics of multiplicity of cultures in the world, especially as they relate to one another in America.
- 2 *Sociol.* a condition in which minority groups participate fully in the dominant society, yet maintain their cultural differences.
- 3 Culture 本文を読み進んでいくと理解できるかと思うが、「文化」という語は、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む。文明とほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活にかかわるものを文化と呼び、技術的発展のニュアンスが強い文明と区別する。」という「生活・精神様式」の意味合いが大きい。
- 4 Anatolia 「アナトリア」黒海と地中海の間の広大な高原。現在はトルコ共和国に占められている。旧石器時代以来人類が住み、南東部から中部にかけては、新石器時代から青銅器時代の集落跡が少なからず散在している。
- 5 Guinea pig 「テンジクネズミ；(俗称)モルモット」
- 6 natural selection 「自然淘汰(とうた)」ダーウィン進化論の用語
- 7 apes and monkeys 「類人猿とサル」類人猿(=anthropoid ape)とは、chimpanzee, gorilla, gibbon, orang-outan を言う。Monkey は、広義には、類人猿とサルの両者を含む。
- 8 Homo sapiens 「ひと；人類」
- 9 blimps 「小型飛行船」(口語)
- 10 space vehicles =space ships 「宇宙船」
- 11【象徴】(symbole フランスの訳語。中江兆民の訳書「維氏美学」(1883年刊)に初出。語源であるギリシア語シュンボロンは割符の意) =ある別のものを指示する目印・記号。=本来かかわりのない二つのもの(具体的なものと抽象的なもの)を何らかの類似性をもとに関連づける作用。例えば、白色が純潔を、黒色が悲しみを表すなど。シンボル。語源的には、ばらばらなものをひとつにするという意味も含まれる。
- 12 星条旗のこと。
- 13 米国中部の州
- 14 patterns 「範型」' Culture (cultural) patterns ' という用語は、アメリカの文化人類学や社会学の用語となっている。「文化範型」「文化様式」などの訳語が一般に使われている。

- 15 Themes 「主題；テーマ」 Morris E. Opler によれば、文化は一つの中軸的な統合原理によって特徴づけられることは稀であって、普通は、複数の原理（主題）が働いており、現実の文化は、ときには相互に矛盾するものを含めていくつかの主題を中心に組織されている、という。
- 16 Dr. Alfred Charles Kinsey (1894-1956) 米国の生物学者。インディアナ大学動物学教授。米国人の性生活に関する面接調査報告書 *Sexual Behavior of the Human Male* (1948), *Sexual Behavior of the Human Female* (1953) で知られる。
- 17 The medieval clerics' s debate 「中世の聖職者たちの論争」。ヨーロッパ中世におけるスコラ哲学 (Scholasticism) は、その後期 (1300-1500) に至ると、煩瑣哲学とも言われるように、煩瑣主義に陥ったことで知られる。
- 18 Nit-picking *nit-pick*= (informal) to be concerned with insignificant details. 「つまらないことをせんさくする (こだわる)」
- 19 Sir Edward B. Tylor (1832-1917) 英国の人類学者。1883年 Oxford 大学博物館長、1896年同大学人類学教授。人類学の父といわれる。 *Primitive Culture* (1871), *Anthropology* (1881) などの著作がある。
- 20 Edward B. Tylor, *Origins of Culture in Primitive Culture*, (First published in 1871) Gloucester, Mass.: Peter Smith.
- 21 Ethnographic 「民族誌」とは個々の民族の文化を記述する文化人類学の一分野。
- 22 Holistic (holism): 「全体論」現実の基本的有機体である全体が、それを構成する部分の総和よりも存在価値があるという、J.C.Smith の提唱した理論。
- 23 Subculture 「下位文化」ある社会の持つ全体的な統一文化の中において、特定グループの持つ特殊な文化を指す。「part-culture」「部分文化」とも表現されることもある。
- 24 Navajo Indians 「ナバホ族のインディアン」北米インディアンの中で Athapascan 系の南部の主要部族。米国西部に属する New Mexico 州と Arizona 州に居住し、現在米国最大の部族。Navaho とも綴る。
- 25 アメリカ北西部太平洋沿岸に位置する州。
- 26 Cross-cultural= dealing with or offering comparison between two or more differing cultures or cultural areas.

(むらい やすひろ・本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第11号 (2004年3月31日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 11, 31 March 2004

Social cartography: Claims and criticisms(Part 2)

社会地図学：その主張と批判(2)

伊藤 勝久
ITO Katsuhisa

KEY WORDS : Social cartography, Positivists' epistemology, Constructivists' epistemology, Opening dialogues among differences, Mutual understanding

ABSTRACT

This paper follows the prior study, Social cartography: Claims and criticisms (Part 1) (Ito, 2003) which chiefly explains the advocacies of social cartography and the examples of its mapping projects.

Here, I present an overview of two currents of criticisms against social cartography: (1) positivists' criticisms, which stress the uncertainty and untrustworthiness of the social cartography ideas and maps, using the critics' own standards and norms (i.e., their narrative), and (2) constructivists' criticisms, which somehow shares the social cartographers' hermeneutical seeing of multiple realities but doubts the possibility of fulfilling its promise in practice.

Also, an exercise of social cartography usage is shown to seek possible contributions of social cartography to practical research, which may support counter-arguments against these criticisms.

“To be left off the map is, in effect, to not exist”

Patricia Price-Chalita (1994, p. 243), a feminist geographer

“[E]xistence does depend on being on the map”

R. M. Downs (1981, p. 29), a geographic educator

I. Introduction

Social cartography advocates an opening of intertextual space for every social text and seeks to open dialogue among perspectives using metaphorical maps. As already shown in the prior study, *Social cartography: Claims and criticisms* (Part 1) (Ito, 2003), real purpose of the social cartography is not finalized in its visual images. “[T]he ultimate goal of [social] mapping is to challenge the reader to interaction, re-mapping or counter-mapping” (Erkkila, 1998, p. 41) visual conversations, for making knowledge exchange and mutual understanding using intersubjective space, namely a map. Because such a social cartography concept is deeply founded on its inherent ontological view of seeing realities, following the concept could be very difficult for the people who don’t care about other people’s ontological view to see different realities.

I first encountered social cartography in 1996 in a Sociology of Education course at the University of Pittsburgh. That day, the advocator of social cartography, Rolland G. Paulston, came to the class to talk about his idea and explain his “map”, which is shown in Figure 1. I remember I was totally puzzled by his talk and his “map” in the class, and after class, I found that myself and other classmates were perplexed by the idea of social cartography. We talked about how the idea was difficult and nearly incomprehensible.

As already mentioned in the prior study (Ito, 2003), Josef Seppi, a positivist geographer, also describes his first reaction to the figure as: “Paulston’s map of ‘knowledge perspectives’ ..., initially seemed nothing more than a schematic diagram that abstracts philosophical benchmarks as shapes in two-dimensional space. My initial reaction was that Paulston had used the term ‘map’ loosely” (Seppi, 1996, p. 122). My reaction in the class was similar to Seppi’s.

Being puzzled by abstruse concepts of social cartography, I asked a question about the meaning of the vector and the length of the arrows in the figure, which was a very positivistic reaction to his idea.

There are several criticisms found against social cartography and its maps in the discourse of comparative education. The criticisms are roughly divided into two currents: (1) Positivists' criticisms which distrust social cartography's validity as once Seppi and I did, and (2) Constructivists' criticisms which somehow share the similar ontological view with social cartography but doubt social cartography's performativity. Here, these two currents of criticisms are introduced.

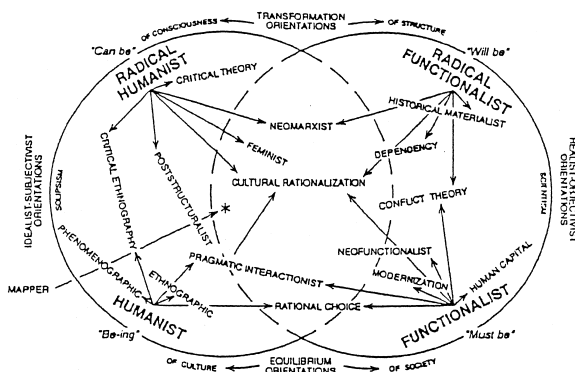


Figure 1. Paulston's (1994, p. 931) "global mapping" of paradigmatic discourse and territorial dispute in sixty recent comparative education texts. "This assemblage opens to all claimants space for inclusion in the intellectual field (Ringer, 1990) and social milieu. Situating the mapper in this representation suggests that '... by the act of attributing spirit to everything, giving every element of the landscape its own point of view, shows [the mapper] to be alive to the fact that there are other powers in the world, [that social cartography] is not a fantasy of omnipotence. It is a matter of doing your best in a difficult, hostile world .. in which the spectator is alive to forces of a complexity we can barely grasp' (Fenton, 1996, p. 40)" (Paulston & Liebman, 1996, p. 15).

Note. From: Social cartography: A new metaphor/tool for comparative studies. In R. G. Paulston (Ed.), *Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change* (p. 15), by R. G. Paulston & M. Liebman, 1996, New York, NY: Garland.

II. Criticisms from Positivists' Standpoint

When I situate this paper in my personal experience in the introduction, I referred to Seppi's (1996) first reaction to social cartography: that "Paulston's map of 'knowledge perspectives' ..., initially seemed nothing more than a schematic diagram that abstracts philosophical benchmarks as shapes in two-dimensional space" (p. 122). As he himself recognizes in the later part of his comment, such a response may be typical for positivists because of their epistemological presuppositions¹ of seeing the world. From their normative view, the lack of objectivity and generalizability of social cartography makes it look too context-dependent. Although Seppi is a positivist geographer, he is somehow conscious of his choosing of a positivistic standpoint as a professional and seems to be sympathetic to social cartography projects. The usual reaction of positivists can be simple ridicule or disregard because the unique nature of social cartography deviates from their norms. Conversely speaking, such reaction may be a reflection of their fear of the characteristics of social cartography that may empower deconstruction of their norms (Comstock, 1976).

Torres (1996) concisely explains the epistemology of the positivists and the problem of social cartography for them as follows:

Planners schooled in positivistic social sciences argue that there is a fundamental social order underlying the dynamic of things themselves. This order is discernible through the methodical and rigorous application of a specific method of social science. This method must reflect the premises of all scientific methods according to the model of natural sciences; that is, a method based on foundationalist objectivity, the search for control and manipulation of variables, experimentalism (or quasi-experimentalism), universality and rationality The goal of social science is to develop a set of arguments that study causal relations; when possible, these detected patterns or regularities can be applied like laws or empirical guidelines Morrow and Brown have shown that "the narratives of scientific methodology are characterized by stories obsessed with questions about empirical evidence, proof and validity" (1994, P. 40). [Therefore, t]he challenge of social cartography from positivism is whether social cartography

relates (represents or can substitute for) empirical theory, involving the “descriptive and analytical (formal) languages through which social phenomena are interpreted and explained”(Morrow and Brown, 1994, p.41). (pp. 423-424)

Watson (1998) also criticizes social cartography for what he sees as its lack of practical utility for educational research. To clarify his practical concerns, he reiterates the importance of drawing “testable hypotheses”, setting a rigid “parameter”, and using “hard data” for comparison. He concludes:

Unless there is hard data for comparison and for use by planners and policy makers, mapping [done by social cartography] is little more than an exercise in intellectual gymnastics: enjoyable for the individual cartographer but of little relevance to anyone else and, sadly, of no relevance to governments and agencies or others involved in delivering education systems. (p.108)

In short, these positivist attacks on social cartography with regard to its becoming an empirical model in a truth-testing enterprise are represented by proclaiming social cartography’s lack of objectivity, lack of systematic processes based on elaboration and manipulation of variables, and lack of possibility for generalization.

However, these positivists’ criticism seems to lack substance against social cartography. Their criticisms are irrelevant to social cartography’s promise, practice, and performativity (judged from how the promise was accomplished through the practice). They just apply their standard to social cartography method and force it to have certain validity as a truth claiming model. As McLaren and Allen (1998) mentioned, “maps are texts that seek to contextualize but cannot escape the locationality of the mapper, the map reader, and the mapped” (p. 226). The performativity of maps should be judged concerning their locationality since maps are embedded/ situated/ situating in locals (family, community, local place, a people, and their distinctive culture) regardless of social cartography or geographic cartography (Ito, 2002). The criticisms lacking such a view are unfounded.

Ⅲ. Criticisms from Constructivists' Standpoint

Another current of criticisms against social cartography comes from the constructivists' view. Different from positivists' epistemology, constructivists start their world view not from the level of grounding assumptions in universal truth but from their subjective views as actors to approach or to be affected by the world. For them, reality is not given by such universal truth but is constituted by people's experience and knowledge through their activities as social actors. Therefore, the constructivists' world view is highly situated in their personal experiences in the social milieu. They see that reality exists everywhere in people or social contexts but nowhere in absolute form. Torres (1996) concisely introduces such a constructivist's view of educational projects as follows:

The polar opposite to positivism is a constructivist model of social science, which reflects a strong alternative vision in which reality appears as a product of discontinuities and unpredictable effects. Learners, in the view of constructivists, actively participate in learning, a notion that applies to the most elementary forms of learning and the most advanced forms of research ... Another premise, in stark contrast with positivism, is that knowledge cannot be separate from meaning and value, hence education is necessarily a moral enterprise. But in a culturally diverse society, this does not imply an absolute moral code, as opposed to procedural principles for guiding ethical thinking and action. In the context of education, caring, justice and individual responsibility are central principles of moral action that should complement each other ... Finally, constructivists recognize that research and education are socially and historically situated activities in institutions that are constrained and enabled by the power relations in the society around them. (pp. 427-428)

Different from positivists' criticism, constructivists' criticisms are mindful to treat maps as local texts, but, therefore, they doubt social cartography's performativity to attain its promise that offers a heterogeneous space for every narrative and welcomes dialogue among them. They may be divided into three different criticisms.

A. Social cartography fails to merge mininarratives into mapping space

The first suspicion toward social cartography's performativity is represented by Beverley's (1996) criticism. He shows that social cartography's claim of "offering fair space" and "hearing mininarratives' voices" may be trapped into contradiction through its practice, which is often found in postcolonial and subaltern studies. Using examples of subaltern studies, he points out social cartography's possible problem. According to him, although researchers of subaltern studies claim that they hear the voice of subalterns, the voice never reflects the subalterns' realities. He says:

This would be a way of saying that the subaltern can speak, but only through the institutionally sanctioned authority ... of the professional journalist or ethnographer, who alone has the power to decide what counts in the narrator's raw material and to turn it into a literal and/or ethnographic narrative. (p. 349)

Indeed, Beverley asserts that the subaltern strategically pretends to be "silent" by not showing their realities to follow the elites' norm to avoid sanctions since they have their lives and they have to protect themselves.²

This paradoxical nature of subaltern study is problematized as follows:

The very idea of studying the subaltern is catachrestic or self-contradictory, in a way that points to a new register of knowledge where the power of the university to understand and represent or map the world breaks down or reaches a limit, and where the idea of representing the subaltern must itself confront the dilemma of subaltern resistance to and insurgency against elite conceptions. Recognizing the nature of this paradox means learning how to work against the grain of our own interests and prejudices—a process that Spivak calls 'unlearning privilege' and that involves undoing the authority of the academy and knowledge centers at the same time that we continue to participate fully in them and to deploy their authority as teachers, researchers, planners and theorists. (p. 351)

He somewhat pessimistically concludes that “[w]e can approach in our work, personal relations and politics closer and closer the world of the subaltern, but we can never actually merge with it, even if, in the fashion of the Russian *narodniks*, we were to ‘go to the people’ ” (p. 354).

Thus, Beverley doubts social cartography’s ability to attain the promise: Every narrative, every other, is able to have its location on (open) space on the maps. Because he sees only oppressive power involved in the mapping processes of social cartography, in which a mapper draws and locates forged mininarratives on the mapping space³, he concludes that mininarratives do not have their (real) locations on the mapping spaces of social cartography, as well as that subalterns do not have their (real) voices in subaltern study.

Beverley’s criticism seems to be self-privileging if his assumption that “subalterns are silent strategically to pretend to follow elites’ norm” is correct. In the examples of relevant social cartography studies shown in the prior paper, Ahmed’s (1997) study may be seriously challenged by Beverley’s claim. In her study, Ahmed collects rural women’s voices about “their experiences with nonformal education, on how they see it effecting their lives, and what they expect from the nonformal education program” (p. 11). Probably, in her map (Shown in Ito, 2003, p.106), nobody is able to confirm the correctness of the location of the rural women’s narratives.

However, as we noted in the paper, the maps of social cartography are not truth claiming universal models. On the maps, the mappers don’t allocate the space of mininarratives coercively like a universal model but show their personal (local) images to view discourse.

As is true of any written discourse, a map begins as the property of its creator. It contains some part of that person’s knowledge and understanding of the social system. ... while we find maps can shape the system objects, we suggest that rather than carve out a truth, they portray the mapper’s perceptions of the social world, locating in it multiple and diverse intellectual communities, leaving to the reader not a truth. (Paulston & Liebman, 1996, p. 14)

Since the maps are the mappers' personal belongings, showing either real voices or forged voices on the maps is not a real issue.

The important point of the promise of social cartography is that the maps of social cartography welcome and wait to hear mininarratives by using open mapping space. "Social cartography suggests not a synthesis but the further opening of dialogue among diverse social players, including those individuals and cultural clusters who *want* their 'mininarratives' included in the social discourse [*Italics mine*]" (Paulston & Liebman, 1994, p. 232). As Paulston and Liebman (1996; 1994; 1993) assert, social cartography is a methodological tool that, although not inevitably hearing and mapping mininarratives' voices as Beverley somehow supposes, does allow for the possibility of hearing their voices. Although subalterns may never have their own voice, as Beverley rightly points out, they at least have the potential to show their narratives by jumping into visual communication using maps. Social cartography may make an opportunity for such a presence.

B. Social cartography may be another totalizing practice

Another suspicion towards social cartography's performativity is shown by Harris-Castelo (1999). She criticizes "[social cartography's] attempts to place into a linear, ordered model the complexity of social relationships" (p. 439). That is to say, social cartographers' "attempt to re-create in 'real space' the 'perceived' relationships found in the 'space of social maps'" (Harris-Castelo, 1999, p. 433) is not much different from "a totalizing practice of [scientific] cartographic representation" which places social phenomena in "a linear, structured model" (Harris-Castelo, 1999, p. 433).

In a similar vein, as a review of an epoch-making book of social cartography project: Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change, edited by Rolland Paulston (1996), Pickles (1999) criticizes contributing authors' confusing mapping varieties which he says "seem to create boundaries rather than challenge them, totalize and order rather than to differentiate, normalize rather than disseminate concepts, categories, and thought" (p. 95).

Harris-Castelo and Pickles seem to fear the possible intervention of authoritarian power by social cartographers during the mapping practice, namely implementation of another totalizing story masquerade under the name of social mapping.

However, as previously mentioned, “the purpose of the mapping exercise is not to leave the process to the visual image only. ... [T]he ultimate goal of [social] mapping is to challenge the reader to interaction, re-mapping or counter-mapping” (Erkkilä, 1998, p. 41). Since social cartography offers opportunities to make visual dialogues among others, it includes every narratives including totalizing metanarrative (Paulston & Liebamn, 1996; 1994; 1993) and locates them as points in a two-dimensional field of difference.

In the prior study, we saw an example of how social cartography can open and pattern an argument and make dialogues with others from the examples of maps in Figure 2 (Paulston, 1995; shown in Ito, 2003, p. 78), Figure 5 (Rust, 1996; shown in Ito, 2003, p. 92) and Figure 10 (Liebman, 1996; shown in Ito, 2003, p. 100). In the arguments, Rust advocates the necessity of “useful metanarrative” (Rust, 1991, p. 618), and he re-maps Paulston’s map in more rigid and totalizing form. On the contrary, Liebman advocates the need of representing invisible unstable elements that float into one’s personal world in mapping space. Therefore, he re-maps Paulston’s map in a more flexible way. These three maps have very different advocacies and processes, and forms which reflect each mapper’s local context in the discourse and their different ways of seeing the issue. As a separate study, each map may only have a limited meaning as a spokesman of an academic ontological view but, as a constituent element of a social cartographic argument, these three maps together would be more meaningful.

Although several maps under the name of social cartography seem to show rather totalizing forms and characters as Harris-Castelo (1999) and Pickles (1999) criticize, they are just a part of social cartographic dialogues. Through such a visual dialogue, mappers may have opportunities to share and to exchange different ways of seeing a discourse.

This dynamics of social cartography is seek by Erkkilä (1998) as “a strength, not a weakness of the method” (p. 212). Again, social cartography is a nonlinear tool not to create finalized visual images but to open dialogues among differences using maps.

C. Suspicion against social cartography's utility in practical research

Another criticism against social cartography concerns its usability. Although Epstein (2004) praises social cartography's creative application of “spatial analysis through visual representation” to educational research, he doubts the advantage of “the use of spatial analysis” (<http://coe.asu.edu/edrev/review/rev73.htm>) and implies the lack of usability of social cartography as a practical analytical tool. In a similar vein, Widlok (2000), an anthropologist, also criticize social cartography's lack of elaborated explanation about “how metaphorical or graphical representations of space can be used as a research tool” (p. 158). He seems to favor a recipe-like clear explanation.

As concrete examples of the counter-arguments against Epstein's and Widlok's views, Ahmed's (1997) anthropological study, Erkkilä's (2001; 1998), Gorostiaga & Paulston's (1999), and Gorostiaga's (2001) policy studies, which are already shown in the prior study (Ito, 2003), are posed as practical research studies adopting social cartography as their methodological tool.

I think the way social cartography is used is highly dependent on each researcher's will, creativity, and spatial sense which actualize visual images. Paulston doesn't show any step by step manual for social cartography other than showing how to draw a conceptual map (Paulston, 1999). Just as the maps of social cartography have open space to include others' narratives, social cartography's visual-based methodology itself seems to be open to anybody who wants to join the social cartography mapping discussions.

IV. Implication

Because discourses of geography have a lot of highly practical

research fields, the reflection of social cartography in geographers' work may actualize more examples of practical research using social cartography as a methodological tool. However, since this possible research may be situated in each geographer's unique context and in the discourse of geography, they may appear in a different manner which may be unimaginable in comparative educators' ways of seeing the world.

Here, I will present a theme, one situated in my academic experience, for seeking possible usage of social cartography in the discourse of "knowledge of geography".

A. Exercise: Mapping ambivalent natures of the governmental editions of regional geography

1. Introduction.

In Japan, as part of a mass-enlightenment campaign conducted by local governments, editing books of the regional history of their area is quite popular among county, prefecture, and municipality governments. Usually these projects are carried out over several years or decades and issue many, many volumes of huge books. Although including geography volumes in such historical projects is quite rare, there are several examples found especially in the prefecture level versions.

The project for editing the Chiba-ken no Rekishi [History of Chiba Prefecture] series (51 volumes), which was launched in 1991 by the Chiba prefecture government, is the one of the rare examples which has three volumes of regional geography books (2002; 1999; 1996). At the beginning, 13 people were working on the regional geography books; 10 professors from one university and five high schools, and three staff members of the prefecture government. In the project, the faculty members were in charge of writing articles in the books, and the three prefecture staffers worked in various roles; preparation of the designs and executions of the regional and social research in the municipalities of Chiba prefecture, some archive work, interviewing of city/town/village government officers, company

employees, farmers/fishermen, and people living in the areas, planning several excursions, drawing a lot of original maps of the areas, and managing several kinds of database soft ware for the studies.

As a matter of fact, the following case study aimed at finding these three staffers' prospective orientation for editing the books, which reflects the outcome of their dreams, thoughts and arguments about ideal regional geography books during the first two years of the project (Ando, Ito & Tozaki, 1997; Tozaki, 1994; Shirai, 1993; Ando, Ito, & Tozaki, 1992).

2. Case study: Characteristics and problems of the governmental editions of regional geography.

Through close readings of all of the texts of regional geography books edited after Meiji period (i.e., after 1868) in Japan, which focused on depicting the areas of prefectures and their municipalities, and interviews with the authors of these books, Ando, Ito and Tozaki

Table 1. A comparison of the three possible directions of regional geography.
Note. From: Jichitai-shi ni Okeru Chishi no Tokutyoo to Kadai [Characteristics and problems of regional geography in the history of a local community]. In K. Nakamura (Ed.), *Chirigaku Chi no Bookken* [The adventure of knowledge of geography] (p. 110), by K. Ando, K. Ito & K. Tozaki (K. Ito, trans.), 1997, Tokyo, Japan: Kokon-Shoin.

	Dainihon kokushi, Vol. 3: Awa (1886)	Nihon Chishi, Vol. 8 : Chiba- ken, Kanagawa-ken (1967)	Sekai no chiri, Vol. 37: Chiba (1984)
Contents	Location	Geographic characteristic	Outline of the physical and social nature of Chiba
	Area	Historical background	
	Municipality	Land form and climate	
	City	Agriculture/forest/fish industry	Challenge for the future
	Topology	Mining/manufacturing industry	
	Road and bridge	Commerce/service industry	Reclamation of the foreshore
	Mountain	Population/settlement/culture	cultivation and construction of the Narita airport
	Farm	Regional division	
	Mine	Keiyo Area:	
	Cape	-Development of	Prosperity and declining of
	Island	manufacturing industries	water transportation: past and present
	Population	-Formation of satellite towns and transfiguration of the area	
	Religion	-Formation of suburban	Declination of
	Dialect	agriculture	agriculture/fishing industry and the rise of a tennis resort
	Military base	-Prosperity and declining of	
	Police office	laver farming at the bay of	
	Court	Tokyo	Flowers, oceans, and dairy farms
Lighthouse	(etc.)		
Post office			
Bank			
(etc.)			

(1997; 1992) realized there were three distinctive characteristics or roles in regional geography: (1) “Documentary literature” to show natural features and cultural climate in an area, (2) “Academic work” to gather topical (scientific) geography studies concerning an area, and (3) “Popular literature” to promote readers’ interest and curiosity about an area. Table 1 shows a comparison of the lists of contents, which eloquently show their distinctive characteristics, of representative works of these three categories: Dainihon Kokushi: Awa [The Regional Geography of the Empire of Japan: Awa (The southern area in Chiba)] (Naimu-sho chiri-kyoku, 1886) as a representative work of a “documentary literature”, Nihon Chishi: Chiba-ken, Kanagawa-ken [The regional geography in Japan: Chiba and Kanagawa prefectures] (Nihon Chishi Kenkyu-zyo, 1967) as an “academic work”, and Sekai no Chiri: Chiba [World geographic magazine: Chiba prefecture] (Kikuchi, 1984) as an example of “popular literature”.

Through the reading of the regional geography books edited by local governments after WW II (Table 2), they found that the Nihon Chishi series, mentioned above as a representative work of “academic work”, had tremendous influence on later books of regional geography in terms of their compilation of contents and editing methods. Why this happened may be because not only because many geographers concerned with the Nihon Chishi worked on later projects in their local areas but also that an academic trend of focusing on topical analysis of an area attaches prestige to their work.

As a matter of fact, from the governors’ point of view, a regional geography is expected to be “documentary literature” to show proof of their effort and success in the industrialization of their area, which gives them material for their political campaigns (Ishida, 1966). In contrast, geographers who write texts of volumes want their work being more significant in terms of “academic work” of geography (Kiuchi, 1981; Aono, 1980; 1971; Takano, 1977). However, from mass readers’ standpoint, both “documentary literature” and “academic work” of regional geography are boring and too heavy, and therefore, they wish for “popular literature” it to be (Chiri Henshu-bu, 1984).

Hence, the regional geographies edited by local governments have

ambivalence among three different expectations of political demand, academic significance, and popularity. In short, the regional geographies edited by local governments are characterized in how well they compromise these three different expectations without rupture.

Table 2. Summary of contents of earlier books of regional geography.
Note. From: Jichitai-shi ni Okeru Chishi no Tokutyoo to Kadai. In K. Nakamura (Ed.), *Chirigaku Chi no booken* (pp. 113-114), by K. Ando, K. Ito & K. Tozaki (N. Kanisawa, trans.), 1997, Tokyo, Japan: Kokon-shoin.

Title	Miyagiken-shi	Fukushimaken-shi	Hiroshimaken-shi	Okayamaken-shi
Year of Publication	1960	1965	1977	1983
Main Editor	Tohoku Univ. Dept. of Geography	Fukushima Univ. Dept. of Geography	Hiroshima Univ. Dept. of Geography	Okayama Univ. and Hiroshima Univ. Dept of Geography
Main Contents	<p>General Statement: Location of Prefecture</p> <p>Nature: Landform, Climate, Soil, Water Quality</p> <p>Production: Agriculture, Forestry, Fishery, Mining, Industry</p> <p>Commerce, Transportation</p> <p>Population, Seasonal Worker</p> <p>Local Review</p> <p>Geographical District</p> <p>Overall Development (the following: History of Transportation)</p>	<p>(Nature) Geology, Rock, Mineral, Ocean, Land, Climate, Soil, Plant, Animal, Catastrophe</p> <p>Geography: General Statement Hamadori Area Nakadori Area Aizu Area</p> <p>(Construction, Development) Agricultural Engineering, General Engineering, Afforestation and Water Resources Development, Electric Development, Underground Resources Development Tourism and Natural Monument</p>	<p>Introduction: Formation and Nature of Prefecture, Population, City, Agriculture, Forestry, Fishery, Livestock Industry, Mining Industry, Regional Development, Transportation, Communication, Tourism, Language, Administration Domain, Regional Division</p> <p>Details: Hiroshima and its Environs Kinan Area Kihokusanchi Area Bihokuzanchi Area Seradai Area Kamishi Kozan Area Binan Area Characteristics of Prefecture</p>	<p>Foundation, Background, Landform, Cultural Milieu, and History of Okayama</p> <p>Area of Sight Yoshi River Basin Asahi River Basin Takahashi River Basin Okayama Plain Islands Area</p>
Focus of Editing (Extract)	(not specified)	<p>In the Chapter on Nature and Construction, we would like to: clarify the structure of nature as the place of human life, a stage of human theater, as objectively as possible; bring out nature as the place for life of Fukushima Prefecture residents by describing the relationship between human and nature, and also the conditions which have changed nature through the power of a human being. (Introduction)</p> <p>...the geography of the prefecture is described as three divided areas; Hamadori Area, Naka-dori Area, and Aizu Area, with a major topic in the connection between nature and human beings, who develop and utilize nature. (Explanatory Notes)</p>	<p>The Chapter on Topography intends to show the correlation, which is constantly moving, between the natural environment and human society of Hiroshima Prefecture.</p> <p>Moreover, this chapter tries to make clear the life of residents in Hiroshima Prefecture by categorizing the prefecture into seven areas as involving political, economic, and geographical situations, and by capturing characters of each area. (Preface)</p>	<p>The Introduction (Part I) takes up the results of studies... in the fields of topography, climatology and historical-geography. Based on these results done by new methods and technology, it intends to elucidate the climate of Okayama, by directing attention to the features of its nature and scenery (Introduction)</p> <p>In the description of cultural milieu and landscape in small regions, we use dynamic geographical methods (adopting the most characteristic feature of the area and emphasizing the historical importance), instead of using a static geographical method (landform, climate, plant, industry)... (Part II Introduction)</p>
Role of Geographic Review	(not specified)	Description of the relationship between nature and human beings	Description of the relationship between nature and human beings; Regional description of life of residents of Hiroshima Prefecture.	Description of the relationship between nature and human beings (climate).

Table 2. (Cont.)

Ehimeken-shi 1983 - 1988		Naraken-shi 1985	Ooitaken-shi 1989
Ehime Univ. Dept. of Geography, Scholars of Geography in Ehime Prefecture		Scholars of Geography and Related Areas	Ooita Univ. Dept. of Geography
(Geography Review I) Regional Character and Division of Prefecture	(Geography Review II Example of Nanyo) Regional Character of Nanyo	Natural Environment and History of Cityscape	Landform
Natural Environment		Prehistory and the Tumulus Period	Climate, Animals and Plants History, Society
Population	Osu City and its outskirts	Ancient Times	Life and Transportation
Agriculture, Mountain, Fisheries Industry	Hachimanshima City and its outskirts	Medieval Period	Ooita
Mining and Manufacturing Industries	Uwa and Nomura Basin	Modern Times	Northern Prefecture
Transportation and Commerce	Uwajima City and its outskirts	Meiji Period	Hida and Kyushu
Community and City	Onikita Basin	Taisho and the first term of Showa Period	Southern Prefecture
Tourism	Goso and Johen District	Post World War II	
Administrative District		After High Growth of Economy Period	
This geographical review surely tries to depict the mechanism of the "character of the place" over time. ...The review describes the mechanism by adapting various methods such as seeing what characteristics one place has compared to other places and how those characteristics spread. The place showing this unique spread is a so-called region, and the description that makes clear the feature of the region is a 'geographical review.' (Introduction)		From the perspectives of regional history, we try to make clear the principle of region, which has been supplemented chronically in the course of history. ... By doing so, eventually we hope to throw light on a regional system that constructs today's Nara. It will be helpful for the future prospect as well as today's view to discover the regional principle behind a constantly transfiguring landscape and see the historical background in which the principle has been cultivated. (Preface)	This chapter describes the correlation between natural environment in Ooita Prefecture and the life of people engaging that environment. (Preface)
"Contemporary Records of Milieu" Description of prefecture milieu for the records for future generations.		Solution and description of "regional system"	Description of the relationship between nature and human beings

3. Using social cartography in this study.

The Ando, Ito, and Tozaki study basically aimed at finding the authors' prospective standpoint for editing books of regional geography. Based on interviews with the editors of the earlier books of government-edited regional geography and close reading and comparison of relevant studies and the books, they made several tables to capture the distinctive characteristics of these books to compare them (shown in Tables 1 and 2).

Figure 2 is a suggested use of a map for this study. By adding such a map to the study, the comparison of earlier books (Table 2) can be simplified and the ambivalent nature of editing local government-issued regional geography books can also be more plainly shown.

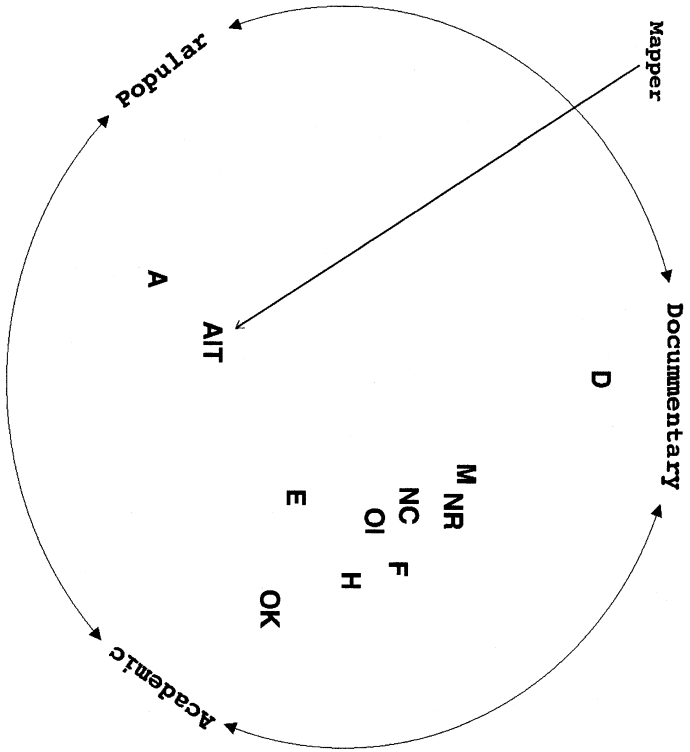
By adding the mapping idea of social cartography, this study's contention can be clearer than if it depends only on tables. Also, by

using this map, the authors' ways of seeing the issue, their standpoints and orientations, which didn't actually appear in the original texts in the study, can be visualized more clearly. Although the central aim of the Ando, Ito, and Tozaki study was finding the authors' standpoint for working with their prospective projects, a map like the one in Figure 2 is able to broaden the study's field of vision. In this way, the study could open dialogue and make discussion that would include every stakeholder concerned with the matter, i.e., politicians, geographers, and the masses.

Now, I'm not so optimistic as to think that presenting maps causes immediate effects of fruitful discussions among stakeholders, but I think this sort of maps can facilitate discussion among them, as a conventional geographic cartography map serves to help one reach a destination. Maps like the one in Figure 2 are able to show the stakeholders' positions, directions, relative location differences, and relative distances as well as to imply possible barriers among them for ongoing discussion of the matter. It is important to note that maps are not for controlling variables and studies (like mathematical manipulations), but for facilitating discussion of studies in a research project.

V. ENVOI

It has been almost seven years since my first encounter with Rolland G. Paulston and his social cartography ideas. Many things have changed around me during this time, which have affected not only my personal everyday life but also my academic thoughts and attitudes. Although it may be unusual among Japanese, who are deeply socialized in the homogeneous race of Japanese and prefer a standardized way of living under a rigid and normative system of society, I married a Taiwanese woman during my staying in the United States. As is usual among every multi-cultural couple living in a foreign country, we have experienced occasional cultural conflicts among my Japanese ways, her Chinese (or Taiwanese) ways, and other people's American ways of living, which taught me a lot about the invisible disturbance hiding



Legend:

- A: Sekai no chiri, vol. 37: Chūda (1984)
- AIT: Ando, Ito, & Torzaki (1997), i.e., mapper
- D: Dainihon kokushi, vol. 3: Awa (Naimu-shō chiri-kyōku, 1886)
- E: Ehimeken-shi (Ehimeken-shi Hensan Linkai, 1983-1988)
- F: Fukuoshimaken-shi (Fukuoshimaken-shi Hensan Linkai, 1965)
- H: Hiroshimaken-shi (Hiroshimaken-shi Hensan Linkai, 1977)
- M: Miyajiken-shi (Miyajiken-shi Hensan Linkai, 1960)
- NC: Nihon Chishi, vol. 8: Chūba-ken, Kanagawa-ken (Nihon Chishi Kenkyū-zyo, 1967)
- NR: Nara-ken-shi (Nara-ken-shi Hensan Linkai, 1985)
- OI: Ooita-ken-shi (Ooita-ken Sohmu-bu, 1989)
- OK: Okayamaken-shi (Okayamaken-shi Hensan Linkai, 1983)

Figure 2. A map of earlier books of regional geography books depicting the areas of prefectures in Japan.

even in our everyday happy family lives (as shown in Kadohata's Ukiyo story mentioned in the prior paper). Although Epstein (1999) and Widlok (2000) doubt the utility of social cartography, the utility was quite obvious for us. During the eight years of our staying in the United States, I realized that nobody's claim was either right or wrong. I fully understand that we were just separately located on a multi-cultural perspective space consisted with uncounted narratives (locals).

However, it also made me wonder what it might be like for my family to return to Japan. Even though I had been heavily socialized in standardized ways of the rigid and normative society in Japan, having a multi-cultural family in the multi-cultural environment of the United States has apparently changed my world view. Schutz (1964) addressed this in his sociological analysis " The Homecomer " :

In the beginning it is not only the homeland that shows to the homecomer an unaccustomed face. The homecomer appears equally strange to those who expect him, and the thick air about him will keep him unknown. (Schutz, 1964, p. 119)

Our family's " deviance " from the mainstream culture (metanarrative) of Japan is obvious and serious for our becoming " homecomers " . Watson's (1998, p. 108) words that the social cartography idea has " no relevance to governments and agencies or others involved in delivering education system " especially troubles my mind. In this respect, my innocent daughters would be put into a " deviant " category (because of their deviation of culture compared with other " standardized " pupils) when they reach school age.

As Watson claims, setting rigid " parameters " and using " hard data " may be indispensable for proper operation of educational system. But, in addition, we definitely need generosity and enterprise for representing differences and hearing narratives from locals. How people can be reflexive to others' narratives seem to be the most important matter.

In this vein, when the majority of educators recognize the utility of social cartography ideas as well as scientific methodology for

pedagogical issues, the goddess Pallas Athene's spell will be dissolved and we will find a path for reaching our home. I look forward to the day coming back to my homeland once again, and to see my daughters having happy school lives in their native land (Taiwan, Japan, USA, or something beyond them).

ACKNOWLEDGEMENTS

I wish to express my deepest gratitude to Dr. Rolland G. Paulston, to whom this paper owes much for his thoughtful comments, criticisms, and encouragement.

My thanks are also due to my friend, Ms. Madalyn McNeff, for her help in reading the drafts, making helpful corrections, and giving valuable comments. This paper is dedicated to her memory.

ENDNOTES

¹ Torres (1996) explains the epistemological presuppositions of positivists as follows:

Positivism does not recognize the importance of nonlinear events or the profound discontinuities of real-life phenomena. At the same time, the subjectivity and singularity of the researcher is disdained in the function of a notion of social objectivity. The notions of science and ideology are defined not only as potentially antagonistic and irreconcilable practices, but also as practices that are clearly differentiable and discernible through the systematic application of the scientific method and certain ethical and epistemological precepts regarding the separation of value judgements and empirical judgements. (p. 423)

² Such composition of subaltern, or subordinate, people toward the elite is shown as "power/mutism--subalternity" (Beverly, 1996, p. 348) composition.

³ According to Harley (1988), “[geographic] cartography was [or, has been] primarily a form of political discourse concerned with the acquisition and maintenance of power ” (p. 57). There are normative powers involved in geographic cartography externally and internally :

The most familiar sense of power in cartography is that of power *external* to maps and mapping. This serves to link maps with the centres of political power. Power is exerted *on* cartography. Behind most cartographers there is a patron; in innumerable instances the makers of cartographic texts were responding to external needs. Power is also exercised *with* cartography. Monarchs, ministers, state institutions, the Church, have all initiated programmes of mapping for their own ends. In modern Western society maps quickly became crucial to the maintenance of state power—to its boundaries, to its commerce, to its internal administration, to control of the population, and to its military strength... Maps are still used to control our lives in innumerable ways. A mapless society, though we may take the map for granted, would not be politically unimaginable. All this is power *with* the help of maps. It is an external power, often centralized and exercised bureaucratically, imposed from above, and manifest in particular acts or phases of deliberate policy... I come now to the important distinction. What is also central to the effects of maps in society is what may be defined as the power *internal* to cartography. The focus of enquiry therefore shifts from the place of cartography in a juridical system of power to the political effects of what cartographers do when they make maps. Cartographers manufacture power: they create a spatial panopticon. It is a power embedded in the map text. We can talk about the power of the map just as we already talk about the power of the word or about the book as a force for change. In this sense, just as with other artefacts and technologies, maps do have politics (Winner 1980)... Power comes from the map and it traverses the way maps are made. Maps are a technology of power, and the key to this internal power is cartographic process. By this I mean the way maps are compiled and the categories of information selected; the way they are generalized, a set of rules for the abstraction of the landscape; the way the elements in the landscape are formed into hierarchies; and the way various rhetorical styles that also reproduce power are employed to represent the landscape. To catalogue the world is to appropriate it

(Barthes 1980; Wood and Fels 1986), so that all these technical processes represent acts of control over its image which extend beyond the professed uses of cartography. The world is disciplined. The world is normalized. We are prisoners in its spatial matrix. (Harley, 1992, pp. 244-245)

In short, "power is being exercised through maps" (Dahl, 1992, p.65), as Beverley points out.

BIBLIOGRAPHY

- Ahmed, Z. (1997). Mapping rural women's perspectives on nonformal educational experiences: A case study in a Bangladeshi village. Unpublished doctoral dissertation, University of Pittsburgh, Pittsburgh, PA.
- Ando, K., Ito, K., & Tozaki, K. (1992, January). Kenshi ni Okeru Chishi-hensan no Seika to Kadai [Harvests and problems in the governmental editions of prefectural regional geography]. A paper presented at the 154th meeting of the Association of Historical Geographers of Japan. Chiba, Japan.
- Ando, K., Ito, K., & Tozaki, K. (1997). Jichitai-shi ni Okeru Chishi no Tokutyoo to Kadai [Characteristics and problems of regional geography in the history of a local community]. In K. Nakamura (Ed.), Chirigaku Chi no Booken [The adventure of knowledge of geography] (pp. 108-122). Tokyo, Japan: Kokon-Shoin.
- Aono, J. (1971). Nihon chishi no henshuu ni kanshite [Several thoughts for editing Nihon Chishi]. Tokyo, Japan: Nihon Chishi Kenkyu-zyo [Japan Regional Geography Research Institute].
- Aono, J. (1980). Nihon chishi zen 21-kan no kankoo wo oete [After thought for editing 21 volumes of Nihon Chishi]. Tokyo, Japan: Nihon Chishi Kenkyu-zyo [Japan Regional Geography Research Institute].
- Beverly, J. (1996). Pedagogy and subalternity: Mapping the limits of academic knowledge. In R. G. Paulston (Ed.), Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change (pp. 347-356). New York, NY: Garland.
- Chiba-ken Shiryoo Kenkyuu Zaidan [Chiba Historical Material Research Foundation] (Ed.). (1996). Chiaba-ken no Rekishi: Chishi 1 [The history

- of Chiba prefecture: Regional geography 1]. Chiba, Japan: Chiba-ken.
Chiba-ken Shiryoo Kenkyuu Zaidan [Chiba Historical Material Research Foundation](Ed.). (1999). Chiaba-ken no Rekishi: Chishi 2 [The history of Chiba prefecture: Regional geography 2]. Chiba, Japan: The government of Chiba prefecture.
- Chiba-ken Shiryoo Kenkyuu Zaidan [Chiba Historical Material Research Foundation](Ed.). (2002). Chiaba-ken no Rekishi: Chishi 3 [The history of Chiba prefecture: Regional geography 3]. Chiba, Japan: The government of Chiba prefecture.
- Chiri Hensyuu-bu (1984). Shuukan asahi hyakka Sekai no Chiri hensyuu tantoosha ni kiku [Interview to the editors of Sekai no Chiri]. Chiri [Geography Magazine], 29(4), 61-63.
- Comstock, W. R. (1976). On seeing with the eye of the native European. In W. Capps (Ed.), Seeing with a native eye: Essays on native American religion (pp. 58-78). New York, NY: Harper and Row.
- Dahl, E. H. (1992). Commentary: Brian Harley's influence on modern cartography. Cartographica, 29(2), 62-65.
- Downs, R. M. (1981). Maps and metaphors. Professional Geographer, 33(3), 287-293.
- Ehimeken-shi Hensan Iinkai [The compilation committee of Ehimeken-shi](Ed.). (1983-1988). Ehimeken-shi, Chishi, vol. 1-5 [The regional geography of Ehime prefecture]. Matsuyama, Japan: Ehime-ken.
- Epstein, I. (2004, March 17). [Review of the book Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change]. The Education Review [On-line serial]. Available: <http://coe.asu.edu/edrev/reviews/rev73.htm>
- Erkkilä, K. (1998). Mapping the entrepreneurial education debates in the United States, the United Kingdom and Finland. Doctoral dissertation, University of Pittsburgh, Pittsburgh, PA.
- Erkkilä, K. (2001). Entrepreneurial education: Mapping the debates in the United States, the United Kingdom and Finland. New York, NY: Garland.
- Fukushimaken-shi Hensan Iinkai [The compilation committee of Fukushima-shi](Ed.). (1965). Fukushimaken-shi 25: Shizen and kensetsu [The history of Fukushima prefecture: Nature and development]. Fukushima, Japan: Fukushima-ken.
- Gorostiaga, J. M. (2001). Mapping the decentralization of education debate in

- Argentina. Unpublished doctoral dissertation, University of Pittsburgh, Pittsburgh, PA.
- Gorostiaga, J. M., & Paulston, R. G. (1999). Mapping new approaches in program evaluation: A cross-cultural perspective. Pittsburgh, PA: Department of Administrative and Policy Studies, University of Pittsburgh. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 428 433)
- Harley, J. B. (1988). Silences and secrecy: The hidden agenda of cartography in early modern Europe. Imago Mundi, 40, 57-76.
- Harley, J. B. (1992). Deconstructing the map. In T. J. Barnes & J. S. Duncan (Eds.), Writing worlds: Discourse, text and metaphor in the representation of landscape (pp. 231-247). New York, NY: Routledge.
- Harris-Castelo, S. (1999). [Review of the book Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change]. International Journal of Qualitative Studies in Education, 12(4), 433-434.
- Hiroshimaken-shi Hensan Iinkai [The compilation committee of Hiroshimaken-shi] (Ed.). (1977). Hiroshimaken-shi: Chishi-hen [The regional geography of Hiroshima prefecture]. Hiroshima, Japan, Hiroshima-ken.
- Ishida, R. (1966). Nihon ni okeru chishi no dentoo to sono shisooteiki haikai [The tradition and philosophical background of regional geography in Japan]. Chirigaku Hyooron [Geographical Review of Japan], 39, 348-356.
- Ito, K. (2002). Deconstruction and reconstruction of the definition of the term "map". Regional Views, 15, 1-12.
- Ito, K. (2003). Social cartography: Claims and criticisms (Part 1). Bulletin of Tomakomai Komazawa University, 10, 74-122.
- Kadohata, C. (1989). The floating world. New York, NY: Viking.
- Kikuchi, T. (Ed.). (1984). Sekai no chiri, Vol. 37: Chiba [World geographic magazine: Chiba prefecture]. Tokyo, Japan: Asahi Shinbun-sha.
- Kiuchi, S. (1981). Shohyoo, Nihonchishikenkyuuzyo-hen Nihon Chishi, zen 21-kan [Review of the book series of Nihon Chishi]. Chirigaku Hyooron [Geographical Review of Japan], 54, 281-282.
- Liebman, M. W. (1996). Envisioning spatial metaphors from wherever we stand. In R. G. Paulston (Ed.), Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change (pp. 191-215). New York, NY: Garland.
- Miyagiken-shi Hensan Iinkai [The compilation committee of Miyagiken-

- shi](Ed.). (1960). Miyagiken-shi 5: Chishi and kootsuu-shi [The regional geography and the history of transportation in Miyagi prefecture]. Sendai, Japan: Miyagiken-shi Kankoo-kai.
- Morrow, R., & Brown, D. D. (1994). Critical theory and methodology. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Naimu-sho Chiri-kyoku [The Department of Geography in the Ministry of the Interior](Ed.). (1886). Dainihon kokushi, Vol. 3: Awa [The regional geography in the Empire of Japan: Awa](Vols. 1-3). Tokyo, Japan: The Department of Geography in the Ministry of the Interior.
- Naraken-shi Hensan Iinkai [The compilation committee of Naraken-shi](Ed.). Naraken-shi, 1: Chiri-chiikishi, keekan [Geography-region and landscape]. Tokyo, Japan: Meicho-shuppan.
- Nihon Chishi Kenkyu-zyo [Japan Regional Geography Research Institute](Ed.). (1967). Nihon Chishi, Vol. 8 : Chiba-ken, Kanagawa-ken [The regional geography in Japan: Chiba and Kanagawa prefectures]. Tokyo, Japan: Nihonmiya Shoten.
- Okayamaken-shi Hensan Iinkai [The compilation committee of Okayamaken-shi](Ed.).(1983). Okayamaken-shi 1: Shizen fuudo [Nature and cultural climate in Okayama-ken]. Okayama, Japan: Okayama-ken.
- Ooita-ken Sohmu-bu [Department of general affairs at Ooita prefecture government]. (1989). Ooitaken-shi, Chishi-hen [The regional geography of Ooita prefecture]. Ooita, Japan: Ooita-ken.
- Paulston, R. G. (1995). Mapping knowledge perspectives in studies of educational change. In P. W. Cookson, Jr. and B. Schneider (Eds.), Transforming schools (pp. 137-179). New York, NY: Garland.
- Paulston, R. G. (Ed.). (1996). Social Cartography: Mapping ways of seeing social and educational change. New York, NY: Garland.
- Paulston, R. G. (1999). Mapping comparative education after postmodernity. Comparative Education Review, 43(4), 438-463.
- Paulston, R. G., & Liebman, M. W. (1993). An invitation to postmodern social cartography. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 358 576)
- Paulston, R. G., & Liebman, M. W. (1994). An invitation to postmodern social cartography. Comparative Education Review, 38(2), 215-232.
- Paulston, R. G. & Liebman, M. W. (1996). Social cartography: A new

- metaphor/tool for comparative studies. In R. G. Paulston (Ed.), Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change (pp. 7-28). New York, NY: Garland.
- Pickles, J. (1999). Social and cultural cartographies and the spatial turn in social theory [Review of the books Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change and Mapping reality: An exploration of cultural cartographies]. Journal of Historical Geography, 25(1), 93-98.
- Price-Chalita, P. (1994). Spatial metaphor and the politics of empowerment: Mapping a place for feminism and postmodernism in geography? Antipode, 26(3), 236-254.
- Rust, V. D. (1991). Postmodernism and its comparative education implications. Comparative Education Review, 35(4), 610-626.
- Rust, V. D. (1996). From modern to postmodern ways of seeing social and educational change. In R. G. Paulston (Ed.), Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change (pp. 29-51). New York, NY: Garland.
- Schutz, A. (1964). Collected papers II: Studies in social theory (A. Brodersen, Ed.). Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.
- Seppi, J. R. (1996). Spatial analysis in social cartography: Metaphors for process and form in comparative educational studies. In R. G. Paulston (Ed.), Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change (pp. 121-139). New York, NY: Garland.
- Shirai, T. (1993). Kenshi Chishi-hen no hensan dookoo to sono kadai [Trends and problems of editing regional geography in a prefecture]. In Y. Yamada (Ed.), Tenkan-ki ni Tatsu Chiiki no Kagaku [Regional science at turning point](pp. 307-314). Tokyo, Japan: Kokon-Shoin.
- Takano, F. (1977). Ootsuka ni okeru chishi-gakuha no keisei to hatten [Foundation and development of Ootsuka school in Japanese regional geography]. Tookyo Kyooiku Daigaku Chirigaku Kennkyuu Hookoku [Transactions, The Department of Geography in Tokyo University of Education], 11, 73-80.
- Torres, C. A. (1996). Social cartography, comparative education, and critical modernism: Afterthought. In R. G. Paulston (Ed.), Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change (pp. 417-433). New York, NY: Garland.

- Tozaki, K. (1994). Nihon ni okeru Kindai Ikoo no Chishi no Seikaku to Yakuwari ni Tsuite [Characteristics and roles of regional geography after Meiji-period in Japan]. Nihon Chirigakkai Yokooshu [Abstracts: The Annual Meeting of the Association of Japanese Geographers], 46, 174-175.
- Watson, K. (1998). [Review of the books Mapping multiple perspectives and Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change]. Comparative Education, 34(1), 107-108.
- Widlok, T. (2000). [Review of the book Social cartography: Mapping ways of seeing social and educational change]. Journal of the Royal Anthropological Institute, 6(1), 158.

(いとう かつひさ・本学助教授)

苫小牧駒澤大学紀要第11号 (2004年3月31日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 11, 31 March 2004

A Look at “Wasei” English

「和製」英語の考察

Robert Carl OLSON
ロバート・カール・オルソン

KEY WORDS : Creole, “Japanization”, Katakana pronunciation, Loanwords, Multiculturalism, Pidgin

ABSTRACT

Multiculturalism is one byproduct of an international world. Language creation, adaptation and usage are some of the challenges that multiculturalism must meet in order to facilitate communication between speakers of different languages and cultures. But at the same time, it is important that adaptations in the name of multiculturalism do not stampede existing languages and cultures. These issues and others surround a new hybrid dialect that consists of Japanese and foreign language loanwords known as “wasei” English.

INTRODUCTION

For the purpose of illustration, let's take a quiz. Match the English words listed on the left with their Japanese counterparts listed on the right (1). Pronunciations for the Japanese terms are in parenthesis.

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1.) SOCIAL | A.) 国際 (kokusai) |
| 2.) IMPROVE | B.) 経済学 (keizai) |
| 3.) INTERNATIONAL | C.) 社会の (shakai) |
| 4.) ECONOMICS | D.) 改良する (kairyō suru) |

Those without exposure to the Japanese language may find the above phrases difficult to decipher. Now, retake this quiz using these “wasei” English terms.

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 1.) SOCIAL | A.) <i>INTANASHONARU</i> |
| 2.) IMPROVE | B.) <i>EKONOMIKUSU</i> |
| 3.) INTERNATIONAL | C.) <i>SO-SHARU</i> |
| 4.) ECONOMICS | D.) <i>REBERU APPU</i> |

While room for error still exists, the latter group of terms is more likely to be understood than the former. The answers are:

- 1.) C. 2.) D. 3.) A. 4.) B.

Even a person with no experience with Japanese would likely succeed if only by matching the similar letter patterns. The same principal can be applied to a verbal quiz; if the previous terms from the first quiz were read first in English and then in Japanese to a non-Japanese

speaker, it is likely the speaker would have difficulty matching the terms. But the same speaker given the benefit of the similar pronunciations of the terms in the second quiz would most likely succeed because of their similarity to English (2).

This morphing of English words (and sometimes words from other languages) into Japanese-compatible terms is known as "wasei" English. "Wasei" is the term applied to concepts, practices or items created in or adjusted for Japan. An example is the sport of baseball; while the general rules and objectives remain the same for both the United States and Japan, few will argue that the brand of baseball played in Japan has a unique flavor and has been "Japanized" to the point that both are similar but separate entities.

"Wasei" English is a similar phenomenon.

"Wasei" English is an embryonic concept whose definition is still being constructed. For the purpose of this paper, "Wasei" English will be defined as taking words or phrases primarily from English (although other languages are represented) and assigning them a *katakana* pronunciation (3) so that native Japanese speakers may use them in daily conversation.

This paper has four objectives:

- To introduce various encounters with "wasei" English through the use of multimedia.
- To explore the similarities and differences of "Wasei" English and pidgins and Creoles.
- To explore some of the reactions to "wasei" English and other similar language creations by members of the community.
- To explore the impact of "Wasei" English on the teaching of English conversation at the university level.

“WASEI” ENGLISH: PASSING FAD OR PERMANENT FIXTURE?

Every year, the Webster's Dictionary adds numerous words to its list of words that constitute the English language. I found one entry to be of particular interest: McJob. Defined as a temporary, low-paying job (I am paraphrasing), “McJob” is pure slang. This, however, does not negate the apparent significance of this word and its impact on daily communication; what was once most likely a private joke is now a public term.

Pidgins and Creoles

Can “wasei” English be headed down the same path that leads from specific group usage to general linguistic availability? To even attempt to answer this question, it is necessary to explore the linguist phenomenon of the pidgin.

A pidgin is a contact language used by two or more groups who do not share a common language in a given geographic area (4). The Slave Trade in the early United States provides an example. During the formation of what is now the United States, slaves were taken from Africa, the Caribbean and the Dutch West Indies among others to work in the southern states, notably Louisiana. The slaves were separated from their fellow countrymen and countrywomen and placed in diversified groups. The purpose of this was to prevent collaborative escape or revolt efforts: as the vast majority of slaves did not speak English, they could not communicate with each other using their native languages. The need for slaves to communicate with one another, however, was fulfilled through the use of a conglomeration of Dutch, French, Spanish and other languages. This form of patchwork language is a pidgin. In this case, the pidgin was so strong and effective that it became the native language for the children of the slaves who created it. This pidgin is still prevalent today and its name is synonymous with New Orleans and its unique culture---Creole. Creole, however, is more than a way of life in the Deep South. Creole is the label given to pidgins that become the native language of the descendents of the people who created them. Creole is not limited to the descendants of the slave population mentioned earlier; Creoles exist around the globe and continue to grow

and, in some cases, die out.

Concerning "wasei " English, are we seeing the beginnings of a pidgin? In regards to the literal interpretation of a pidgin, the answer is " no. " "Wasei " English is not a creation of the various foreigners who live in Japan. Rather, it is the native Japanese who are creating "wasei " English by borrowing the language of foreigners. Furthermore, "wasei " English is used by the native Japanese to communicate not only with foreigners but also with each other.

Nonetheless, "wasei " English appears to be filling a communication void and its size has reached a considerable level and continues to grow. On January 20th, 2003, The Japan Times ran an article in its editorial section titled "*What's in a loanword?*" The article states that the Kadokawa Shoten's Dictionary of Foreign Words listed 25,000 words borrowed from languages other than Japanese. In the year 2000, however, Sanseido's dictionary counted over 45,000 such words with 90 percent coming from English. The article continues to state that loanwords influence daily conversation from the streets to the schools to the government offices. It is in this sense that "wasei " English appears to be headed toward becoming a pidgin and possibly a Creole.

The size and prevalence of loanword and "wasei " English usage has inspired some, aggravated others but encouraged all aware to examine the impact of "wasei " English and loanword usage on various aspects of Japanese language and culture.

WHERE IS "WASEI " ENGLISH

I would like to be able to write that my interest in "wasei " English was the result of my keen observational skills noticing a new trend of communication among my students, but that would be dishonest. My introduction to "wasei " English came from a student who used the term "bonnet " to describe a problem with his car. I asked him if he learned that term in Australia (as in my native United States, the term "hood " would have been used to describe the panel that covers the engine). He replied that while Australia does use the same term, "bonnet " was a form of "wasei " English.

After listening to his explanation (much of which has been incorpo-

rated into this report) I told him that this was interesting but I had never encountered “wasei” English until today. He suppressed a laugh and told me to look and listen around; anything that sounded like Japanese run through a katakana filter was probably some form of “wasei” English.

I took his challenge and recorded some of the forms of “wasei” English I encountered.

In the movies.

Like many other native English speakers living in Japan, video is an important part of my life. I hold memberships at most of the major chains and now have no problem finding the titles I search for. Part of the reason is my familiarity with each shop, another part is the influx of “wasei” English-like titles(5).

Consider for these titles for instance:

Wild Speed is known as “WAIRUDO-SUPEEDOO.”

Terminator 3 is listed in katakana as “TA-MINE-TA 3.”

Pirates of the Caribbean is “PAIRE-TSU-OBU-ZE-KARIBEAN.”

Lord of the Rings is “RO-DO-OBU-ZE-RINGU.”

Some titles that would be difficult to transform into katakana or would likely lose their appeal to viewers if done so were simply given new titles in “wasei” English. Take *One Hour Photo*, starring Robin Williams as a department store worker who winds up stalking a family he is obsessed with. The “wasei” English title given to this movie is, predictably enough, “SUTO-KA-” (the “wasei” English term for “stalker”). The same action was taken with the horror movie, *The Ghost of Edendale*. It is likely that most viewers are not familiar with Edendale and so the producers decided that “GO-SUTO HAUSU” (the “wasei” English term for “ghost house”) would better convey the story.

Even titles that would be relatively easy to translate into Japanese are often given katakana equivalents. Take *About Schmidt*, for example. This title could be given the Japanese title, “SHUMIDDITO NO TAME NI,” which means, “about Schmidt.” Even more interesting to me is that I believe that in past years it would have received such a title. In 1991, I visited the

Tomakomai-branch of the YES VIDEO chain to rent "Silence of the Lambs." I could not find the movie largely because the Japanese title, "HITSUJITACHI NO CHINMOKU" sounds completely different from the English title--even though it is a direct translation and has the exact same meaning, i.e. HITSUJITACHI NO CHINMOKU means "Silence of the Lambs.". The point that I am trying to make is that even when traditional Japanese can be used, it is often passed over in favor of a "wasei" English title.

In the newspaper

The Monday, January 10th, 2004 edition of the Hokkaido Shinbun (Newspaper) contained a number of "wasei" English-like words on its front page.

SENTA (for "center")
REESU (for "lease")
PURO (for "pro" or "professional")
KA-DO (for "card")
KUREJITTO (for "credit")
BO-NASU (for "bonus")
SHU-ZU (for "shoes")
TOPPU (for "top")
DAUN (for "down")
TERO (for "terrorism")

Again, there are Japanese equivalents to these terms. I am not a newspaper editor and therefore can only speculate on why these terms were used. The point I do wish to make is that "wasei" English can be encountered in daily Japanese newspapers, which are primarily designed for native or fluent Japanese readers.

On the television

On Monday, January 12th, I watched the news program "World Business Satellite(6)" to see if "wasei" English would be found in this form of media. It was and the amount of was considerable.

The topic of conversation was beer and how companies are coping with

the recession. “Wasei” English terms used throughout the program included:

KONPANI (for “company”)

MA-KETTO (for “market”)

SE-RU (for “sale”)

PURAIKU (for “price”)

KE-SU (for “case”)

In my opinion, what was more impressive than the amount of “wasei” English terms was the ease of how they were used. The speakers did not appear to be pretentious, but rather every-day people who were going about their jobs. This suggested to me that the “wasei” English terms they were using were as natural as their native Japanese language.

I am convinced that “wasei” English is part of today’s communication repertoire in Japan. For how long it remains and the extent of its influence remain to be seen.

IMPRESSIONS OF “WASEI” ENGLISH

Is “wasei” English the linguistic form of baseball; a welcome import that has enriched Japanese culture while offering bridges to other countries and their cultures? Or is “wasei” English the linguistic form of the black bass: an alien form of communication that is driving out Japan’s native language and culture?

It is too early to offer a definitive answer. What can be done is to examine both the positive and negative comments.

The Positive

Arguments for “wasei” English seem to center on its ease of use and ability to compensate for perceived weaknesses in the Japanese language.

First, it is my opinion that some “wasei” English vocabulary is simply easier to use than Japanese and, therefore, increases conversation. If a colleague wishes to speak to me about “shoheki jokyo,” my contribution to the conversation will be limited, at best. However, if the same conversation centers on the topic of “baria-furi” (barrier free), I will have more to say and

be more willing to listen.

Others appear to agree.

The younger generation is embracing "iero" (yellow) over the Japanese "kiiro," "kicchin" (kitchen) over "daidokoro" and others, in part because they appear to be easier to use and have been deemed as more positive than their Japanese equivalents.

Finally, "wasei" English can fill gaps left by Japanese, both linguistically as well as culturally.

Ask a Japanese person about the Japanese word for the disease "AIDS," and you will get a blank stare? Why? Because such a word doesn't exist (7) The same can be said about the economic term "capital gains." In this case, "wasei" English can actually enrich Japanese while enhancing communication. Furthermore, Japan appears to be in the midst of a communication drought in regards to face-to-face conversation. The Japan Times in a January 12th, 2004, article states that the "keitai sundrome" (people who become dysfunctional when not in possession of their portable phones) is encouraging a mass withdrawal from society. I can find no hard "statistics" to support this claim, but I explored this issue in an earlier paper (8) and suggested that portable phones, email and other forms of technology were suppressing our ability to communicate with each other. I am not sure whether technology is the symptom of the illness or the illness itself or a combination, but I consistently observe people of all ages avoiding interacting with people and instead relying on technology. Disturbingly, the same Japan Times article suggests that the "Japanese have never been particularly skilled at communicating (9)" and if this is true, "wasei" English may become even more important as it facilitates communication from a group that doesn't appear to communicate very well.

The Negative

Of course, it is easy for me as a native English speaker to support a possible pidgin that accommodates my language abilities and culture while putting the onus of study and adaptation on others with little, if any respect.

What are the opponents of "wasei" English saying?

First, there is Prime Minister Junichiro Koizumi who in May of 2002 exploded at his telecommunications minister for the overuse of loan words,

most notably “back-office.” The Prime Minister, who was obviously having trouble following the conversation, asked in exasperation, “If I don’t understand it, how will ordinary people?”(10)

Next is the National Institute for Japanese Language, which has increased its efforts to replace certain “wasei” English terms with purer Japanese equivalents.

It would be easy at this point to accuse Japan of xenophobia; Japan is a traditionally closed country both in terms of geography and ideology. But to do so would ignore that other countries are also on guard against the intrusion of English. France has replaced the term “computer” with “ordinateur” and “start up” with “jeune pousse.” Germany has also taken steps to ensure its language’s integrity (11).

There appears to be two main arguments against “wasei” English: the danger of Japanese losing its integrity and identity and the possibility of miscommunications due to the use of vocabulary that lacks a common definition.

The presence of “Spanglish”

The first argument has merit because there is precedent.

I am referring to the phenomena of “Spanglish” in my native United States. “Spanglish” is an English/Spanish hybrid form of slang that became prominent partially through use by the movie and music industries. One of Spanglish’s most famous phrases comes from the movie “Terminator 2,” in which Arnold Schwarzenegger mutters to the villain, “Hasta la vista, baby.” The feelings of critics are summarized by Mexican writer Octavio Paz, who says Spanglish is “neither good, nor bad, but abominable(12).” Spanglish shares some of the loanword borrowing and creating characteristics of “wasei” English. Consider these linguistic alterations.

- 1.) “Chaqueta” is Spanglish for “jacket” even though the term “saco” exists.
- 2.) Speakers of Spanglish often add an “-er”-like suffix to English terms to give them instant “Spanglishization.” “To park” thus becomes “parquear.”

- 3.) Direct translations that would be disregarded by language purists often become Spanglish terms, such as "hot dog" becoming, "perro" "ca-liente" (literally meaning "dog hot").
- 4.) "Kenedito," a Spanglish term that takes its origin from the general Spanish disapproval of the Kennedy administration's Bay of Pigs invasion is used to portray someone who cannot be trusted.

Is this a passing phase? It does not appear so. Spanglish was popular in 1991 in Michigan, which was thirteen years ago and, geographically speaking, about the furthest point from Mexico in the continental United States, and is still prominent. So prominent, in fact, that Spanglish courses are taught at Pomona College. Others will likely follow.

Is this necessarily bad?

It is if you are Veronica Padilla. Ms. Padilla who is bilingual (Spanish and English) believes that Spanglish hurts her children's ability to learn true Spanish and appreciate true Mexican culture. Patrick Osio, Jr., the editor of the public affairs Website HispanicVista.com, agrees. "A dialectical mixture of (Spanish and English) is not going to get you much anywhere (13)."

Can "wasei" English push Japanese language and culture away from its citizens? Is that happening now? And if so, to what extent?

"Wasei" English and Miscommunications

Another concern of "wasei" English is the lack of consensual meaning of its terms. In other words, when I use "wasei" English, are you hearing what I am saying? Let's return to Prime Minister Koizumi's irritation with his telecommunications minister for use of the loanword, "back office."

Now, what does "back office" mean, exactly?

To me, "back office" refers to decisions made in secret by those who use their power and influence to get what they want. The Japan Times thought the phrase referred to "a narrow windowless cell where you put a new or under-performing employee (14)."

We were both wrong.

In this case, "back office" is a kind of computer software that helps com-

panies manage their paper work.

In this case.

There is always a danger of miscommunication when using any language; as human beings we are imperfect. This danger, however, appears to increase when using growing dialects or new forms of slang. It is in this sense that “wasei” English should be used with caution.

“WASEI” ENGLISH AND UNIVERSITY TEACHING

Due to its newness, instructors are headed into uncharted waters in regards to “wasei” English and English conversation teaching. Without the benefit of extensive research and the subsequent data-- a dilemma that shadows any new concept-- it is impossible to offer concrete conclusions. It is, however, possible to make predictions that, regardless if found to be accurate or inaccurate, will serve as guideposts for future researchers. This section will attempt to do just that. I offer four points for consideration.

- 1.) *“Wasei” English may enhance daily classroom communication.* Its simplicity may empower students to contribute more to classroom discussion and may reduce the time necessary for consulting dictionaries or other methods of searching for words during conversation with others.
- 2.) *“Wasei” English should not be substituted for correct English words, phrases, grammar and pronunciation.* I do not support tests that ask students to have a linguistic-level understanding of English grammar nor do I believe that there is only one, perfect form of pronunciation for each, single word. But I do believe that there is a proper range of language acquisition that students should strive to enter and teachers should strive to teach.
- 3.) *“Wasei” English will not likely benefit students who take standardized English proficiency tests.* The TOEIC, TOEFL, STEP and other forms of standard English tests measure just that--the student’s ability to navigate through and with standard English. “Wasei” English, though convenient in some cases, is not standard English and will not help a student who is trying to take such a test in order to apply for a place

in an overseas college or gain accredited proof of his or her English ability.

- 4.) *"Wasei" English can be a bridge---or detour---to other cultures depending on its use.* "Wasei" English used by a Chinese student and a Korean student to communicate is most likely beneficial. The same students using "wasei" English as a means of avoiding communication in another language is destructive.

IN CLOSING

As is often the case with concepts, their use rather than their simple presence will determine the merit or demerits. In the case of "wasei" English, a new form of communication that is still in its beginning stage, more time and research is needed to see if it grows to the point that, one day, people will purchase "wasei" English dictionaries or if it is a flash-in-the-pan verbal fad that will die out like forms of slang and other forms of communication that never grow beyond the sole use of highly specified groups.

What can be suggested about "wasei" English is that its presence is exerting linguist and culture debate and, in some cases, change in Japan, both between the Japanese and the foreigners who reside in Japan.

ACKNOWLEDGEMENT

The author would like to extend his deepest appreciation to Yoshiki Katsura for his introduction to and patient explanation of "wasei" English. This report would not have been written if not for his assistance.

FOOTNOTES

(1) Translations come from Takahashi's Pocket Romanized English-Japanese Dictionary (2nd Revised Edition). Taiseido Shobo Co., Ltd. 1975.

(2) The author assumes the reader is a native-English speaker or is highly proficient in using English.

- (3) Katakana and hiragana are the writing systems for Japanese phonics. Katakana is the system used to represent foreign words in the nearest Japanese equivalent. For example, the word "house" would be represented by the katana symbols "ハウス" and pronounced "HA OO SU."
- (4) From Pidgins and Creoles taken from the University of Oregon's language website.
- (5) The movie titles referred to in this paper were taken from MEDIA LAND/SUNHOME VIDEO in Tomakomai, Hokkaido.
- (6) World Business Satellite airs Monday through Friday at 11:00pm on Channel 47.
- (7) Japan Times. January 20th, 2003.
- (8) Olson, Robert C. *"Don't mean nothin'; Teaching English to the Freeta generation.* Bulletin of Tomakomai Komazawa University, Vol. 8, 30. November, 2002.
- (9) Japan Times. January 20th, 2003.
- (10) Japan Times. January 20th, 2003.
- (11) Japan Times. January 20th, 2003.
- (12) Japan Times. January 6th, 2004.
- (13) Japan Times. January 6th, 2004.
- (14) Japan Times. January 20th, 2003.

RESOURCES AND SOURCES

Newspapers

Hokkaido Shimbun. Monday, January 10th, 2004.

Newspaper articles

"*We're just hanging on the telephone.*" Media. The Japan Times. 12, January, 2004.

"*What's in a loanword?*" Editorial. The Japan Times. 20, January, 2004.

"*You say tomatoes, I say tacos, err, tortillas.* American Perspectives from The Washington Post and The Los Angeles Times. 6, January, 2004.

Personal Interviews

With Mr. Yoshiki Katsura, a freshman at Tomakomai Komazawa University.
Fall/Winter semester of 2003.

(ロバート カール オルソン・本学講師)

苫小牧駒澤大学紀要第11号 (2004年3月31日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 11, 31 March 2004

Coercive Power and Bilingual Education

強制力と二言語使用教育

Seth Eugene CERVANTES

セス ユージン・セルバンテス

KEY WORDS: bilingual education, coercive power, limited English proficient (LEP) language minority groups, essentialization, BICS, CALP

ABSTRACT

In most industrialized nations, the effects of population mobility are being felt in both private and public domains. Nations on the receiving end of this unprecedented movement of people from around the world have been forced to reconsider how they educate language minority groups. Coercive power, here meaning power wielded by the majority group to maintain its privileges at the expense of language minority groups, has allowed those in power to dictate what type of policies they feel will most likely maintain the status quo and at the same time give the impression of goodwill. It is within this context that the debate over bilingual education has become even more important than previously thought.

INTRODUCTION

According to a recent report issued by the World Economic Forum (WEF), Japan must increase its current immigration rate 11 times to maintain current levels of productivity. The WEF report, which considered the ramifications of slower-labor force growth and an increasingly aging society, warned that if Japan doesn't increase its current immigration rate, its economic output, which is at 8% of the world's total output, would decrease to half its current rate of production. Raising the rate of immigration is one possible solution to this complicated problem.

What is interesting about some of the current research being conducted is that they often fail to consider seriously immigration, which may accompany such drastic changes in a nation's demographics. Nonetheless, Japan is left with some difficult decisions in the not so near future. At the moment, foreign residents make up only 1% of Japan's total population (Cummings 2000). This number is manageable. However, let's suppose that this number were to increase as some have suggested. Let's suppose that the school systems were inundated with young children who are linguistically and culturally different from the majority Japanese population? How would Japanese society and those in power respond to these new conditions? Yet, as complicated as these questions seem to be, most industrialized nations have had years of experience dealing with significant rises in their language minority populations.

THE LEGACY OF *LAU V. NICHOLS*

Social problems are only problems if the majority perceives them as such. Real or imagined, social problems are mainly defined by those in power. Since it is often the case that those in power set the agenda and the boundaries of what is appropriate and inappropriate behavior, those belonging to minority groups rarely have a voice in the decision making process. Bilingual education is no exception. Bilingual education has a legacy stretching back to colonial America. Despite English being the obvious language of wider use by its citizens, America does not have an official language (Crawford, 1999)

In 1974, however, the landmark case *Lau v. Nichols* set the agenda for educators and policy makers concerning the implications and practices of bilingual education in the proceeding decades to come. This case originated from a local San Francisco poverty lawyer who claimed that his client, Kinney Lau, a Chinese student, was being denied access to an education, and therefore a future, because the language of instruction (English) was incomprehensible(Crawford, 1999). In the end, Judge Shirley Hufstедler of the Ninth Appeals Court declared:

The state does not cause children to start school speaking only Chinese. Neither does a state cause children to have black skin rather than white nor cause a person charged with a crime to be indigent rather than rich. State action depends upon state responses to differences otherwise created.

These Chinese children are not separated from their English-speaking classmates by state-erected walls of brick and mortar, but the language barrier, which the state helps to maintain, insulates the children from their classmates as effectively as any physical bulwarks. Indeed, these children are more isolated from equal educational opportunity than were those physically segregated Blacks in Brown; these children cannot communicate at all with their classmates or teachers.

The *Lau v. Nichols* decision meant that language minority students were, essentially, “language deficient” and at a disadvantage mainly because they did not understand the language of instruction, making them constitutionally entitled to special assistance. It was not merely enough to provide these students with the SAME opportunities as other students, schools became constitutionally, and more importantly, financially obligated to do whatever necessary to help them to acquire English. This decision set into motion a number of policies and programs designed at helping mainstream “language deficient” students(Cummins, 2000, Crawford, 1999).

The interpretation of *Lau v. Nichols* would have a lasting effect on bilingual education in terms of policy and practice in the years that followed. Both proponents and opponents of bilingual education interpreted the *Lau v. Nichols*, in terms of ‘equity’, making it difficult for the general public to discern one side from the other. For example, both sides argued passionately that it is important to help LEP students acquire English. Both sides argued

passionately for the future of LEP students. The discursive debate over *Lau*'s legacy would help bring about a number of goodwill policies nationwide that have done little but compound problems even further-enter California's Proposition 229.

California's Proposition 229 was passed into law in June 1998, reversing some 25 years of education policy. It promised to mainstream students after 1 academic year. Interestingly enough, research is quite clear that anywhere from 5 to 7 years is needed to acquire the language needed to perform within academic contexts (Cummins, 2000). That is, the ability to comprehend language in settings that are context reduced and cognitively demanding. Bilingual education, despite the almost universal agreement with findings in research journals that bilingual education was, and still is, effective, was declared a failure. Almost 70% of California voters voted to make Proposition 229 the law of the land. Some commentators praised its successful passage. One went so far as to proclaim, "Since bilingual education was banned in California about a year ago, test scores have risen. Even more telling, the students who were put on the English crash course or into mainstream classes are well ahead of those still stuck in bilingual ones."¹ Unfortunately, as Krashen points out so eloquently in a front page article in TESOL Matters in the fall 2001 edition, most of the so called advances made by LEP never materialized: "According to data released by the California State Department of Education in Spring 2001, 2 academic years after 227 was passed, 877,031 students in Grades 2-11 have been in school for more than 1 year and are still classified as LEP. Proposition 227 has clearly failed to deliver. In fact, it has failed 877,031 times in California."

These claims were apparent falsifications used as misinformation to further obfuscate facts from reality. For the most part, the mass media rarely reports on the successes of bilingual education, but prefer, instead, to focus their attention on the apparent negative aspects of bilingual education, leaving the public with an incomplete picture of bilingual education. It is little wonder, if we consider the mass media's gross and blatant negligence, how the opponents of bilingual education were able to pass Proposition 227, and others like it, into law.

COERSIVE POWER IN THE WIDER SOCIETY AND ITS CONSEQUENCES

It's difficult to put into words the feelings and emotions experienced following the tragic events of 9-11. Its surreal almost movie like quality seemed to have caught most off guard. And for Americans in particular it was a day of complete horror and shock. Yet, in some parts of the world, the events of 9-11 contained meaning and clear messages as to what would proceed. That is, while Americans asked "Why did this happen to us?" many in the world's poorest communities were asking, simultaneously, a quite different question: "What WILL happen to us?"

Issues of power often appear obliquely in the mass media. Unfortunately, the aftermath of 9-11 as it relates to coercive power and ultimately bilingual education is indeed noteworthy. The issue of coercive power is a non-issue in the public discourse on education. This is so, despite the fact that most real academic work on the subject of coercive power and its manifestations has been too overwhelming to simply ignore as irrelevant. More than ever, the general public, and most importantly, policy makers need to comprehend how the manifestations of coercive power between dominant and subordinate groups permeates throughout our society at local, national, and even, global levels. Plainly speaking, those without a voice, as represented by the poor language minority communities that abound in most industrialized nations, rarely have a say concerning the education of their own children.

When it comes to the education of language minority children, discussions become muddled as both sides of the political agenda use some of the same language of goodwill to sway public opinion. The discourse of most orientations fails to capitalize on social realities that dictate how coercive power works to impede any meaningful change. Topics that relate to bilingual education have a tendency to be discursive, having little, if any, significance to the effective employment of bilingual education. At the heart of the matter is coercive power and its manifestations in the wider society.

Kubota (2001) brings this problem more into focus with her discussion concerning the "essentialization" and polarization of perceived differences between the ideal representations of the SELF to the deficient OTHER. Ideas concerning the ideal SELF have marginalized the OTHER. This is a reoccur-

ring theme in some of the most volatile debates ragging on over the effectiveness, or lack of, bilingual education. In part, this has given rise to feelings of hopelessness among language minority groups, the insignificant OTHER. If these conflicts are not resolved along the way, old fears and false notions of the OTHER in relation to the ideal SELF become reinforced, and nothing changes.

ARE LANGUAGE MINORITY STUDENTS DEFCIENT?

The word “deficient” means that something is inadequate, or not good enough. Bilingualism, if referring to minority groups, is often considered a deficiency. The problem doesn’t reside with the teachers, the school system or the wider society, but with the child. By providing bilingual children with a poor education, an education that has little relevance or meaning, it ensures that the dominant group will maintain its privileges. In essence, the language “deficiency” label takes on a meaning wider than originally meant. Language minority groups have interpreted it, unconsciously, to mean that they are deficient people from deficient cultures. And like a self-fulfilling prophecy, many of these so-called “language deficient” students develop actual deficiencies.

THE BICS/CALP DISTINCTION OF LANGUAGE PROFICIENCY

Children, it is said, acquire a second language easily “if they are exposed to [English] in the classroom at an early age.”² Cummins (2000) differentiates between two forms of second language proficiency: basic interpersonal communicative skills (BICS) and cognitive academic language proficiency (CALP). Basically BICS is “playground” English. English used for simple everyday use and conversation. Conversely, CALP is language required to understand and produce language in settings that are “context reduced” and “cognitively demanding.” Typically, the acquisition of CALP requires anywhere from 5 to 7 years—quite a long time, considering that language minority children must compete with language majority children whose knowledge of the target language is consistently expanding. In other words, the bar is raised with the passing of each school year. The BICS/CALP distinction is important for a number of reasons. One of the most oblivious being that a child can indeed acquire some aspects of a target language with rela-

tive ease, yet the full-on exposure to English without any consideration to content often results in what some researchers in the area of bilingualism call “partial” or “limited” bilinguals. These students are able to converse with teachers and students using BICS, which takes anywhere from 6 months to 2 years to acquire, but are unable to perform academically because they have yet to adequately acquire the target language.

Unfortunately, teachers frequently make the mistake of confusing BICS with CALP. Believing their LEP students to be fluent in academic domains of language, they judge failure to be a result of deficiencies residing in the student. In some cases, LEP students are diagnosed, inaccurately, as having learning disabilities. As these students progress through the school system they continually face social and academic problems.

CONCLUSION

Clearly, as related to future potential problems, bilingual education may come to be viewed as a drain on social resources. The research is pretty clear about the effectiveness of bilingual education. Those from the dominant group, however, tend to believe that the unprecedented movement of populations worldwide into their communities threaten their privileges, privileges they often deny having. It is for this reason the benefits of bilingual education for both majority and minority groups need to be vocalized more succinctly. Language of minority groups must be seen as national resources that can be tapped for the benefit and the empowerment of all. It is best to remember, especially for those in power, that empowerment can only be realized through collaborative efforts. Employing bilingual education is a step in the right directions to achieving such goals.

REFERENCES

- Crawford, J. (1999). *Bilingual Education: History, Politics, Theory, and Practice*, 4th edition. Los Angeles, CA: Bilingual Educational Services.
- Cummins, J. (2000). *Language, Power and Pedagogy: Bilingual Children in the Cross-fire*. Clevedon: Multilingual Matters
- Krashen, S. (2001). *Are Children Ready for the Mainstream After One Year of Structured English Immersion?* *TESOL Matters*, 11, 4, p. 1.

Kubota, R. (2001). Discursive Constructions of the Images of U.S. Classrooms. *TESOL Quarterly*, 35, 9-38.

Micklethwait, J. (2000, March 11-17). Survey: The United States. Oh, say, can you see? *The Economist*, pp. 1-18

1 John Micklethwait, *The Economist*, 11-17 March, 2000:15

2 California's Proposition 227

(セス ユージン セルバンテス・本学非常勤講師)

苫小牧駒澤大学紀要第11号 (2004年3月31日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 11, 31 March 2004

日本語の動詞による名詞の格支配の指導

—— に格の名詞と動詞とのくみあわせを中心に ——

Instructions as to Regimen of Substantive Cases Using Verbs in Japanese
: Focusing on the Combinations of Diptotes and Verbs

楊 志 剛
Yang Zhigang

キーワード：日本語教育、動詞と名詞とのくみあわせ、に格、
場所理論、教える順序

要旨

本論文では日本語の格の指導，特にに格に注目してその先行研究を考察してきた。その結果，日本語の格における教育指導研究はまだ不十分であるといえるだろう。それを改善するために私は，格支配という概念を導入し，さらに，前にくる名詞句を，動詞が要求する形式の格とする立場をとった上で，奥田の連語論におけるに格の名詞と動詞との組み合わせの分類に基づいて，教育内容を作成するべきだと考える。

ところが教育現場から見ると，奥田の連語論におけるに格の名詞と動詞との組み合わせの分類の多義性が，学習をたいへん困難なものにする可能性がある。これを解決するためには池上（1981）の場所理論を採用して，奥田の分類における様々なに格のむすびつきを，基本的な用法と派生的な用法，そして例外的な用法に再分類することで，に格の名詞と動詞との組み合わせの教育内容を構成し，これに基づいて教育内容の順序構造を明らかにしてみた。

〈目 次〉

第一章 課題の設定

- 1-1 中国の日本語教科書における格支配の現状と問題点
- 1-2 先行研究の検討
 - 1-2-1 日本語を母語としない学習者に対する日本語教育分野について
 - 1-2-2 日本人における国語教育分野について
- 1-3 本論文の課題

第二章 格支配の指導の基礎理論

- 2-1 動詞による名詞の格支配をめぐって
 - 2-1-1 仁田(1993)における格支配論
 - 2-1-2 益岡(1987)における「意味役割と格の対応」について
 - 2-1-3 城田(1993)における文法格と副詞格
 - 2-1-4 奥田(1983)における連語論
- 2-2 に格の名詞と動詞とのくみあわせに関して
 - 2-2-1 奥田におけるに格の名詞と動詞とのくみあわせの分類
 - 2-2-2 むすびつきの特徴
 - 2-2-3 教育の面から見た奥田によるに格の名詞と動詞とのくみあわせの問題点

第三章 教育内容の構成および順序構造

- 3-1 池上(1981)における場所理論の紹介
- 3-2 に格の名詞と動詞とのくみあわせの再構成
- 3-3 教育内容の順序構造
- 3-4 今後の課題

第一章 課題の設定

1-1 中国の日本語教科書における問題点

中国語を母語とする学習者を対象にした日本語の授業では、通常、教師が中国語の「介詞」を媒体にして格助詞の説明を行っている。また、この方法でもそれなりに成果をあげていると言われているが、こうした教授法はあくまでも便宜的なものでしかない。中国語の文法体系の中に「格」という文法形式がないことから、日本語の格や、いわゆる格助詞の教授法を新に構成する必要があると考える。格助詞の「に」もこのような助詞の一つである。

日本語におけるに格の文法的な形は、中国語では「賓語」であったり、「間接賓語」であったり、「状語」であったり、さらには副詞的な成分に相当する場合がある。形式的には「介詞」を介して「実詞」に後置する場合と、「介詞」を使わない場合とがある。そのため「に」を導入する際には、教師が有効な方法を探らなければ、学習者は母語の中のそれに似たものと混同してしまい、誤用を繰り返すことになる。

ここで、中国の上海訳文出版社が出版した高等学校(大学)日本語科教材「日本語」(1980)の日本語の「に格」に関する章を検討しておこう。この教科書では、に格について次のような7つの使い方に分けている。

- ① 存在の位置や、動作あるいは作用の方向、着落点、対象を表す。
 - 1 人民公園に池や丘も花壇などがあります。
 - 2 はやく教室に行きましょう。
 - 3 わたしたちもバスに乗っていきましょう。
- ② ある時間点を表す
 - 4 わたしは一九七五年の夏到北京へ行きました。
- ③ 動作や作用の目的を表す
 - 5 わたしは切手を買うために、郵便局に寄りました。
- ④ 比例の基準を表す
 - 6 わたしは週に二日休めます。
- ⑤ 動作の結果があるところに停留する場所を表す
 - 7 世界地図はどこにはりますか。
 - 8 彼はおつりをポケットに入れました。
- ⑥ 動作、作用、性質、状態の範囲を限定する
 - 9 この問題はわたしには分かりません。

10 たばこは体に悪いから、やめなさい。

⑦ 動作，作用，変化の結果を表す

11 わたしはパンにします。

12 わたしは通訳になるつもりです。（「日語」1980：108～109）

この分類には、次のような問題点がある。第一に、

(1) その知らせにおどろく。

「日本語文法セルフ・マスターシリーズ3
・益岡隆志 田窪行則 p20」

(2) 共産党が政府案二反対スル。

「文法格と副詞格・城田 俊・p76」

という二つの文は、奥田靖雄（1983）によると「心理的な態度や態度的な動作を表すかわりのむすびつき」に分類される用法であるが、中国の教科書ではこのような分類や用法を扱っていない。第二に、①～⑦の用法間の相互関係が示されていないのである。そこで私は日本語における格はどのような文法的な機能を果たしているのか、そしてどのような動詞の意味によって格をとるのかを、教育の場において示さなければならないと考える。

日本語のに格の名詞と動詞との組み合わせは、一つの形式で様々な文法的意味をもち、また文の中で様々な文法的機能をも果たしている。したがって、中国人学習者が格を使う上での大きな問題は、ある意味をあらわすとき、どの「格助詞」を選べばいいのか、言い換えるならば、ある格助詞が与えられた表現の中でどのような意味をあらわすのかを、いかにして理解するかにある。そこで私は、奥田靖雄の「日本語文法・連語論」の連語という概念を取り入れ、それに基づいて教育内容を構成するべきであると考えます。

1-2 先行研究の検討

1-2-1 日本語を母語としない学習者に対する日本語教育分野について

ここでは、益岡隆志・田窪行則による「日本語セルフ・マスターシリーズ3・格助詞」（1987）で格助詞二の基本用法としているものを検討してみたいと思う。

1 具体物・抽象物の存在位置

駅の前に大学がある。

この大学は駅の前にある。

- 2 所有者
私には子供が3人いる。
われわれには金も暇もない。
- 3 動作や事態の時，順序
3時に会議がある。
3年前に彼から金を借りた。
- 4 動作主
私にはそれはできない。
彼にこれをやらせよう。
- 5 着点
目的地に着く。
壁にカレンダーを貼る。
- 6 変化の結果
信号が赤に変わる。
学者になる。
- 7 受取手・受益者
子供にお菓子をやる。
恋人に指輪を買う。
- 8 相手
恋人に会う。
田中さんに聞く。
- 9 対象
親に逆らう。
提案に賛成する。
試験の結果に失望する。
人間関係に悩む。
- 10 目的
海に海水浴に行く。
買い物に行く。
- 11 原因
寒さに震える。
酒に酔う。

(益岡隆志 田窪行則1987: 4~5)

ここでは，次の問題点があるだろう。

上記の用法の相互関係が，どのような判断基準に則してまとめられているの

かが明らかではない。例えば、上の引用4にある「動作主」を表す格助詞「に」と、「動作・変化・状態の主体を表す」(益岡・田窪 p 1)格助詞「が」(例：彼が本を読む。雨が降る。目が赤い)とは同じような意味であると考えられることができるが、これらをどう区別するのかについては曖昧である。また、「所有者」を表すに格と、「受け取り手・受益者」を表すに格も共通する意味を持っていると思われる。つまり「受け取り・受益者」は、所有権の変化や状態という意味を表していると思われるのである。

1-2-2 日本人における国語教育分野について

日本語を母語とする人々に対して日本語の格の指導をどのように行っているのかにつき、菅原厚子の「名詞の格・子どもたちにおしえるために」を検討しておきたい。菅原(1995)は、奥田の連語論に基づき、に格の名詞と動詞との組み合わせについて、以下のようにまとめている(菅原 1995:7-9)。

1. ありか

- 1・1 存在(ありか一般)
庭に大きなびわの木があった。
- 1・2 出現物のありか
ほっとした色がふたりの娘の顔にあらわれた。
- 1・3 知覚した物のありか
あそんでいる人たちがむこう岸にみえる。
- 1・4 発見物のありか
道ばたにすみれをみつけた。
- 1・5 所有物のありか
南山伏町にちいさな家をかりて...
- 1・6 現象のありか
空に星がかがやいている。

2. 空間的な配置の関係

- 2・1 配置
ものほしざおに洗たくものをかけた。
- 2・2 接触
夜風はかみそりのようにほおにあたる。
- 2・3 出会い
道で太郎にあった。

3. 空間的な移動

3・1 ゆくさき

それじゃ、山に行くのは、土曜日にしましょうか。

3・2 目的

まちへ買い物のでかける。

4. 変化の結果

4・1 物の状態の変更

どうかすると、お光は髪をきれいにいちょうがえしにゆって、

…

4・2 人の社会的な状態の変更

彼女を嫁にもらう。

5. あい手

5・1 はなしあい手

身体検査をしながら、子どもたちにはなしかけた。

5・2 やりもらいのあい手

現在の親がひとり娘に身代を譲って…

5・3 動作的な態度のあい手

…あの夜、良人にさからって、ほおをうたれたことを思いだし、心がいたんだ。

6. みなもと

6・1 心理的な態度の対象

秋子は今の境遇に満足している。

6・2 原因

よこしぶきの雨にびしょぬれにぬれながらも…

6・3 手段

…少しもせいた気もちなどなく、手鏡にかみをそろえる。

7. 時間

7・1 時間

土曜日にでかけて、月曜日に東京にもどるのが、ここ二、三年の土居の習慣になっている。

8. 論理的な関係づけ

8・1 比較

お三輪にくらべて、どこかに品がある。

8・2 よりどころ

誕生日にかこつけて、酒を飲んだ。

これらに格と動詞の組み合わせ（〈格のくっつき〉）の派生関係について菅原は、「〈格のくっつき〉の機能的な意味は、多義的であるが、その多義的な意味のあいだには派生的な関係をみいだすことができる。例えば、〈ありかのに格〉は、〈存在〉から〈出現物のありか〉、〈発現物のありか〉、〈所有物のありか〉へと枝わかれしていくのだが、この派生は動詞を取り替えることによって生じてくる。つまり、物にたいするはたらきかけが、その物の〈ありか〉をあきらかにすることを求めているのであるが、物にたいするはたらきかけ方のちがいによって、〈に格〉の名詞によってさしだされる空間の意味づけがすこしずつ修正されていく。」（菅原1995：11）と述べており、ここで派生する根拠は「動詞をとりかえることによって」であるとしている。しかし、ここではどの種の動詞による、どのような「物にたいするはたらきかけのちがい」から、派生が生じているのかについての論理的な根拠は明示されていない。

さらに、菅原はこれら〈格のくっつき〉の相互関係について、「いくつかの機能的な意味の連続性は、かならずしもみごとにたもたれているわけではない。たとえば、空間をさしめず、〈に格〉の名詞は、移動動作とくみあわせることで〈ゆくさき〉をあらわしているわけだが、〈ゆくさき〉と〈ありか〉は両方とも空間であることでは共通である。しかし、現代日本語ではこれらのあいだの派生の関係を説明することがむずかしい。これらの歴史的な研究があきらかにしてくれるだろうが、無理やりにこじつけるのではなく、動詞がさしだす動作の質のちがいから、同じ空間が〈ゆくさき〉としてあらわれたり、〈ありか〉としてあらわれたりすることをおしえるに、とどまらなければならないだろう。この〈ゆくさき〉をあらわす〈に格〉は、配置の関係をあらわす〈に格〉にきわめてちがいがち。『つける、かける、はる、あてる』のような動作動詞とくみあわさるとき、〈に格〉の名詞は〈付着物をともなう物〉をいいあらわすようになる。しかし、〈ゆくさき〉をあらわす〈に格〉の名詞は空間名詞であるが、〈付着物をともなう物〉をあらわす名詞は物名詞である。」（菅原 1995：11）と説明している。このように菅原は、名詞の種類の違いも異なった〈格のくっつき〉を生みだす理由の一つとしているが、仮に動詞と名詞の種類の違いから〈格のくっつき〉の相互関係を逐一説明していくとなると際限のない作業になってしまう。さらに、どれが基本的な〈格のくっつき〉で、どれが派生してきた〈格のくっつき〉かを認定することも困難である。

1-3 本論文の課題

前の節では、日本語の格の指導、特にに格に注目してその先行研究を考察し

てきた。その結果、日本語の格における教育指導研究はまだ不十分であるといえるだろう。それを改善するために私は、格支配という概念を導入し、さらに、前にくる名詞句を、動詞が要求する形式の格とする立場をとった上で、奥田の連語論におけるに格の名詞と動詞との組み合わせの分類に基づいて、教育内容を作成すべきだと考える。

ところが教育現場から見ると、奥田の連語論におけるに格の名詞と動詞との組み合わせの分類の多義性が、学習をたいへん困難なものにする可能性がある。これを解決するためには池上（1981）の場所理論を採用して、奥田の分類における様々なに格のむすびつきを、基本的な用法と派生的な用法、そして例外的な用法に再分類することで、に格の名詞と動詞との組み合わせの教育内容を構成し、これに基づいて教育内容の順序構造を明らかにしていきたい。

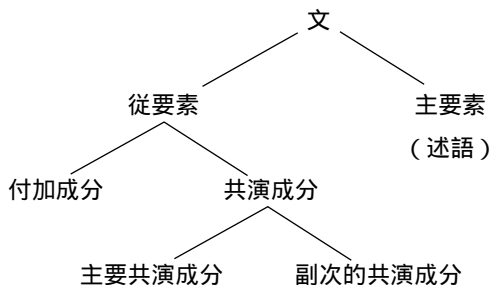
第二章 格支配の指導の基礎理論

2-1 動詞による名詞の格支配をめぐって

本節では、日本語の「格」の意味的・統語的な特性を考察することにする。

2-1-1 仁田（1993）における格支配論

仁田の「動詞と名詞句との依存関係から見た文の成分」



上のように文の成分を認定した上で、さらに仁田は、動詞の格支配について「動詞が文の形成にあたって自らの表す動きや状態や関係の実現・完成のために、必要な共演成分の組み合わせを選択的に要求する働きを、その動詞の〈格

支配」と呼ぶことにする。そして、この共演成分の動詞および他の共演成分群に対する類的な関係の意味のあり方を〈格〉と名付ける。」(仁田1993:15)と定義している。

例えば仁田は「広志が洋子に花束ヲ贈ッタ。」という文で、「『広志が』『洋子に』『花束を』という名詞句が、動詞『贈る』にとっての〈共演成分〉とみとめて、動詞『贈る』が自らの表す動きの実現・完成のために、『広志が(N[名詞]が)』『洋子に(Nに)』『花束を(Nを)』というそれぞれ共演成分を要求する働きが〈格支配〉であり、『広志が』『洋子に』『花束を』といった共演成分が、それぞれに『贈る』及び他の共演成分に対して表している{主(運動):出どころ}{相方:ゆく先}{対象(変化)}といった論理的類的な関係の意味が〈格〉である。そして「贈る」の要求する{主(運動):出どころ,対象(変化),相方:ゆく先}といった格の組み合わせが、動詞「贈る」の取る〈格体制〉である」と述べている。(仁田1993:16)

全体的に見れば、仁田は日本語の格の形について、以下のようなものを抽出した。

[文法格:

意味	形式
・主	「N[名詞]が」・「Nカラ」「Nデ」
・対象	「Nヲ」・「～ト」「～カ」「～ヨウニ」
・相方	「Nニ」「Nト」「Nカラ」・「Nニ向カッテ」 「Nニ対シテ」
・基因(手段-基因的)	「Nニ」「Nデ」

[副次的な格:場所格

意味	形式
・出どころ	「出どころ(空間)s」 「出どころ(空間)o」 「出どころ(状態)s」 「出どころ(状態)o」
・ゆく先	「Nニ」「Nへ」 「ゆく先(空間)s」 「ゆく先(空間)o」 「ゆく先(状態)s」

- 「ゆく先(状態)o」
・ ありが
 「ありが(空間)s」
 「ありが(空間)o」
 「ありが(状態)s」
 「ありが(状態)o」
・ 経過域 (仁田1993:28~37)

*[注:[ゆく先o]とか「出どころs」という表示は、当の格が「対象」の「ゆく先」であり、「主」の「出どころ」である、ということを示している。

上の分類から仁田は、格を意味的なものとしてとらえていることがわかる。例えば、[主]という格は形式として「N(名詞)が」を採ったり、「Nカラ」を採ったり、「Nデ」を採ったりすると考える。仁田の格支配では、ある動詞が、主格、対象格、相方格を要求するということは示されていても、その中で使用可能な形式のうち、どの形式を採るのかについては、さらに別の根拠が必要になってくるが、その根拠にまでは言及していないのである。

格支配を統語的なものととらえているのは、村木新次郎である。村木(1991)は補語と述語に関して、意味・統語・機能という三つのレベルに分けている。「…第二のレベルでは、補語の統語形式上に関するもので、名詞句の形態論的なすがたである。…述語との関係をあらわすものにかぎっていえば、主格(ガ)、対格(ヲ)、与格(ニ)、出発格(カラ)、方向格(ヘ)、共同格(ト)、比較格(ヨリ)、状況格(デ)といった、格助詞が存在する。主格、出発格、状況格などの名称は、それらの格形式がもっている中心的な意味にもとづいて命名されるだけで、これらの名称にふさわしくない用法も実際にはありうる。意味的な表示をさけて、ガ格、ヲ格、ニ格、…といった純粹に形式にもとづく名付けのほうが誤解をまねかない点ですぐれているかもしれない(村木1991:139)。さらに村木は、格支配について次のように述べている。「動詞には、それぞれ固有の、主としていくつかの名詞とむすびつく性質がある。すなわち、動詞の結合能力である。名詞句だけを対象にして、主格をもふくめて格支配という用語をもちいることにする」(村木1991:238)。本論文では村木の「格支配」という用語を使うことにする。

2-1-2 益岡(1987)における「意味役割と格の対応」について

益岡は動詞と名詞の結び付きによる意味構造において、動詞が名詞に対して持つ何種類かの「意味役割」を考え、それに基づいて包括的、かつ整然とした記述を試みた。日本語の文法記述に一般化をもたらす意味役割として益岡があげているものは、次のとおりである。

動作主・対象・経験者・相手・着点・起点・場所・共同者・道具・原因・その他

上のいくつかの意味役割の中で、以下の6種のもは「中核的意味役割」と呼ばれる。

「動作主」「相手」「対象」「経験者」「着点」「起点」
(益岡1987:105~107)

益岡は、さらにこうした意味役割のあり方と、表現上の具体的な形(特に格助詞の現れ)との関係を、次のように示した。

- 1 動作主 → ガ格
 - 2 対象 (他動詞の場合 → ヲ格
 それ以外 → ガ格
 - 3 経験者 (状態述語の場合 → 二格
 それ以外 → ガ格
 - 4 相手 (対称述語の場合(太郎が次郎と話したという場合)
 → ト格
 それ以外 → 二格
 - 5 着点 → 二格(へ格)
 - 6 起点 → カラ格
 - 7 場所 → 二格
- (益岡1987:114)

益岡は各種の格の成分を「項」と呼び、述語と格の項との意味的な依存関係は並列的なものではなく、階層的な性格をもっているものだと言主張する。つまり、[項₁[項₂[項₃ 述語]]](益岡:p123)のようなものだということである(益岡1987:123~125)。そしてこうした階層性に基づいて、各種の意味役割にも序列が認められるという。

関係構造の階層性と「意味役割の序列」

着点 > 対象 > 起点・相手 > 動作主・経験者

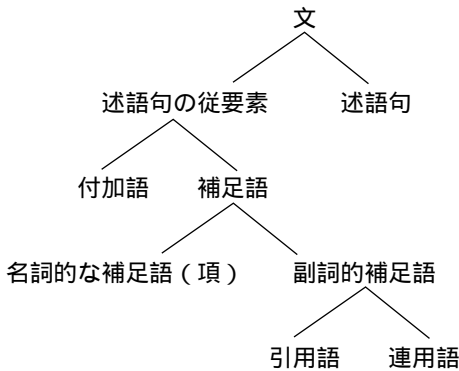
ニ(へ) > ヲ > カラ, ニ > ガ

AさんがBさんに土産の品を差し上げた。(相手)

Bさんが子供を回転木馬に乗せる。(着点) (益岡・1987)

これについて南不二男は「現代日本語文法の輪郭」で、次のように指摘している。「このような益岡の意見とは違った、別の観点からする階層の区別も認められると、筆者は考えている。これは、上の益岡の用語でいうならば、動作主、経験者、および対象に当たるもの(主格、対格)と、その他のもの、つまり、着点、起点、共同者、手段などにあたるものを、大きく区別することである。前者を『一次役割』、後者を『二次役割』と呼んでもよい」(南1993:155)。つまり、一次役割は中心的なものであって、二次役割は周辺的なものである。ということは、上記の一次役割はそれと結びつく動詞との意味的な関係が二次役割より密接だと考えられるのである。動詞の自/他の区別との関係はまさにその例である。

益岡の問題点は、彼の文の成分の分類方法にあると考える。益岡は文の成分を次のように分類している。



しかしこれでは、付加語と補足語を区別する基準が必ずしも明示されているとは言い難い。例えば、

先日、太郎が花子と外国で密かに結婚した。

という文について、益岡は次のように述べている。「『太郎が』と『花子』は、述語『結婚する』にとって必須成分(補足語)である。なぜなら、これらの要素は、『結婚』という事象の成立に不可欠な、主体とその相手を表しているか

らである。『結婚する』という述語は、その意味からして、事象の主体とその相手の存在を要求し、『誰かが誰かと結婚する』という表現形式を取ることに
よって、述語の働きを全うするのである。…一方、『先日』、『外国で』、『密
かに』という要素は、『結婚』の事象の表現に付加的情報を与えるものの、述
語『結婚する』にとって不可欠な要素ではなく、省略しても述語句が不完全な
ものになるわけではない（益岡1987：82）。しかし、ある動詞にとって「不
可欠な要素ではなく、省略しても述語句が不完全なものになるわけではない」
というだけで、付加語と補足語が区別されるだろうか。これについて、城田の
指摘は的を得たものである。「例えば、逮捕スルはスル人・サレル人だけで
なく逮捕の原因も必須補語と考えざるを得ません。逮捕は罪・容疑なくしてで
きないからです。この時、デが必須補語をマークしているというより、“ノ罪(カ
ド、容疑、ケンギ)デ”全体が必須補語をマークします。このような所にも必
須補語というものが語や文の構成の一般に関わる文法の枠を踏み越える様子
がうかがえます。また、寺村などでは一般に副次補語とされていますが、買ウ・
売ルなどで、値段を示すデは必須補語でなければなりません。値段がなければ、
買ウ・売ルはヤルにかわってしまうからです」（城田1993：69）。益岡の主張
する付加語と補足語の区別は曖昧であり、その区分に基づいて導入された項（益
岡によると、項とは補足語の中の名詞句の形式をもっているのである）自体が
すでに曖昧な概念なのである。このような概念を用いての格の議論は問題があ
るだろう。

2-1-3 城田（1993）による文法格と副詞格

城田は、一方で意味的な諸要素を抽出し、他方で、どの格がどのような統語
的な構造に組み込まれ、どのような表現上の形で現れるかの仕組みを明示的に
記述しよう試みてきた。つまり城田は、具体的な実例における各種の用法を検
討しながら、一般論的な理論の中での位置付けをはっきりさせ、かつ具体的用
法を詳細かつ個別に説明しようとしたのである。

例えば、

文法格助詞ヲ	(一次機能 二次機能)	文法格 (直接補語を示す)
		副詞格 (道筋・起点・持続時間を表 して述語を修飾する)
副詞格助詞ニ	(一次機能 二次機能)	副詞格 (範囲を限定して用言を 修飾する)
		文法格 (1)文法格 ₁ (述語転化)

補語を示す)
(2) 文法格₂ (直接補語を
示す)
(城田 1993: 74~77)

しかしながら城田の理論に基づいて教育内容を構成すると、次の問題点が浮かび上がる。

- (1) 社長ヲ誘拐スル。
- (2) 共産党ガ政府案ニ反対スル。

城田によれば、例文(1)中のヲは「直接補語」をマークするが、それで示されるのは「文論的機能」だけである。その場合、他動詞“誘拐する”は「直接補語を必要とする動詞であるから、ヲは直接補語として結びつく語である名詞を示し、名詞はヲをとって動詞に直接補語として支配されているということを示すに過ぎない」(城田1993: 74)。また、例文(2)では、「ニはヲと同義であり、直接補語をマークしているのみです。単なる文論上の支配を示しているだけです。」(城田1993: 77)と述べている。そこでは文法機能として直接補語を表すヲと、直接補語を表すニが、どう区別されるのかについては、言及されていないのである。中国人学習者が日本語を勉強するに際し、この点が解決されなければならないところだと考える。

2-1-4 奥田(1984)における連語論

奥田は連語について次のように定義している。単語の組み合わせは「名付けた意味をもったひとつの単語と、それによりかかって、その名付けた意味を限定(具体化)するひとつ以上の(名付けた意味をもった)単語とからなりたち、全体でひとつの名付けた意味を表す単位である。…ふつつ、連語はふたつ、あるいはみつつの単語からなりたっていて、そのうちのひとつが核になっている。その核になる単語の語彙的な意味をせばめて、具体化するというし方で、ほかの単語をしたがえる<かざられ>とそのかざられによりかかる<かざり>とのふたつの構成要素からなりたっている」(奥田1984: 69)。

これについて鈴木重幸が「連語論的なむすびつきというのは、かざられの語彙的な意味をかざりが一層具体化してみせるという関係であるとすれば、かざられの語彙的な意味がかざりの存在を要求することになるだろう。…例えば、かざられ動詞がさしだす動作と何らかの客体との関係において成立するとすれば、かざられ動詞は、必要とすれば、その客体を差し出すことをかざり名詞に

要求するだろう。かざられになる単語の語彙的な意味は、かざりと従属的なむすびつきを生み出す、もっとも重要な要因である」(鈴木1983:11)と述べている。本論文での格支配と、奥田のいう「その核になる単語の語彙的な意味をせばめて、具体化するというし方で、ほかの単語をしたがえる〈かざられ〉とそのかざられによりかかる〈かざり〉とのふたつの構成要素からなりたっている」ということは、一致している部分があると考えられる。

2-2 に格の名詞と動詞とのくみあわせに関して

2-2-1 奥田におけるに格の名詞と動詞とのくみあわせの分類

に格の名詞と動詞とのくみあわせの分類

		〈 分類 〉	〈 例 文 〉	
二格の名詞と動詞のくみあわせ	対象的なむすびつき	1. ありか	a, 存在的なむすびつき	庭に大きなびわの木があった。
			b, 内在的なむすびつき	白い雲にはかがやきがあった。
			c, 所有物のありか	...狂おしい情熱があなたのなかにひそんでいる。
			d, 所有者のむすびつき	しかし、あなたには信一君がいる。
			e, 認知物のありか	えんがわのいすに女客のひざがみえた。
			f, 出現物のありか	ほっとした色がふたりの娘の顔にあらわれた。
		2. ゆくさき	五時までには会社にかえります。	
		3. くつつき	この子ははじめて汽車にのったので...やがて甘えるようにひざによりかかる。	
	4. ゆずり相手	現在の親がひとり娘に身代をゆずらずに...		
	5. はなし相手	なな子は梨花に得意で予告する。		
	6. かかわり	a, 心理的な態度	不二子はしんから注射におびえている。	
		b, 態度的な動作	政府は人民に奉仕しなければならないはずであるが...	
	7. はたらきかけ	...ただ露店の商人がやすみもなく兵器のおもちゃにぜんまいをかけ...		
	8. 道具	...手鏡にかみをそろえる。		
規定的なむすびつき	1. 結果規定の	雪郎さんをふつうの状態にかえすために...		
	2. 内容規定の	郡が立派な男にみえた。		
	3. 様態規定の	ずたずたにひきさかれた布類をみるのが、...		
	4. 目的規定の	秘書は病院に三日にあげず連絡にかよっている。		
状況的なむすびつき	1. 空間的な	ねこがひなたにまあるくなっている。		
	2. 情勢的な	拍手のうちに場内があかるくなった。		
	3. 時間的な	六時に店がしまりますね。		
	4. 原因的な	ひとつひとつ丹念に見ていけば、生徒たちの可愛さにまぶたがうるんでくる。		

この表の中のありかのむすびつきを、さらに次のような六つに分類されている。

- a 存在のむすびつき
 - b 内在のむすびつき
 - c 所有物のむすびつき
 - d 所有者のむすびつき
 - e 認知物のむすびつき
 - f 出現物のむすびつき
- (奥田 1983 : 284)

これらのむすびつきについては、奥田が次のように述べている。

a 存在のむすびつき

「に格の名詞は、存在動詞と組合わさると、存在という状態が成立するために必要なありかを示す。日本語では、存在動詞は、ある、いる、おる、ございますに限られている。このほか、すむ、とまる、のこる…存在する、滞在するような、存在動詞にちかい動詞があって、存在のむすびつきを表す単語のくみあわせにちかい単語のくみあわせを作る能力をもっている。だが、そのうちのいくつかの動詞は、くっつけの動詞のグループにいれた方が正当だろう。

庭におおきな枇杷の木があった。

おなじ東京にあの人間が存在することを過小評価していたことになる。

気がついてみると、三吉は自分の細君のそばにいた。

くっつけ動詞と移動動詞は 状態態の形 つく ついている・くる きている)をとると、存在動詞の資格をもってきて、に格の名詞とのくみあわせにおいて存在のむすびつきをつくる。」(奥田1983 : 284)

b 内在のむすびつき

「動詞「ある」が/属性として、部分としてもっている/という語彙的な意味を実現する場合にはに格のくみあわせにおいて内在的なむすびつきをつくる。かざりになるに格の名詞は、空間的なニュアンスをもたない具体名詞か抽象名詞であって、動詞との関係において空間的なありかをめざす、属性や部分のありかをしめしている。

この現象には現代固有の特徴があります。

白い雲にはかがやきがあった。

内在のむすびつきをつくる能力のある動詞には、『ある』のほかに、もつ、ふくむ、おびる、いだく、やどす、ひそむなどがある、内在のむす

びつきを存在のむすびつきに含めることができなくなる。内在のむすびつきを表す単語のくみあわせは、所有物のありかや出現物のありかを表す単語のくみあわせからも、ずれ=抽象化の結果うまれている。さらに、くっつきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせからも派生してきている。

...くるしい熱情があなたのなかにひそんでいる。

さらに、内在のむすびつきを存在のむすびつきからくべつする根拠として、可能の動詞とに格の名詞とのくみあわせがある。この種のくみあわせでは、に格の名詞は能力(可能性)の所有者をしめしている。

わかい夫婦にはそんなおちついたまねはできなかった。

薬局の主人の高声が彼女に全部きこえた。」 (奥田1983:286)

c 所有物のありか

「もつ、かりる、かうのような二三の所有動詞が、場所を示すに格の名詞でひろげられると、このに格の名詞は所有物のありかをしめす。

春日堂は銀座うらに店をもっている。

お金ができれば、世界中に土地をかうの。」 (奥田1983:288)

d 所有者のむすびつき

「所有者のむすびつきは内在のむすびつきの変種にすぎないだろう。このむすびつきをあらわす単語のくみあわせでは、かざりの名詞は人間あるいは人間の組織をしめすものがなり、かざられ動詞には『ある』のほかに『いる』ももちいられる。そして、かざりとかざられのあいだには、存在と所有との関係が表現できる。

しかし、あなたには信一君がいる。

あなたの方に貯金があれば、あとが安心だから...」 (奥田1983:288)

e 認知物のありか

「認知活動を示す動詞(みる、みうける、...かんじる)をひろげるに格の名詞は、その動詞との関係において、認知をうける物あるいは現象や状態のありかを示している。

...高瀬舟はくろずんだ京都の町の家々を兩岸にみつつ、東へはして...

えんがわのいすに女客のひざがみえた。

この種のに格の名詞のはたらきが、認知活動の行われた場所を示しているものではないことは、次の例ではっきりする。

鏡の中にかれの後ろ姿をみつめた。

「みつける」「みいだす」「みあたる」「みとる」「みとめる」「ききとる」のような動詞とありかとのくみあわせは、その単語づくりの型からみて、くっつきのみすびつきを表す単語のくみあわせを比喩的に使用することからうまれてきたようである。」

(奥田1983:289)

e 出現物のありか

「出現動詞がに格の名詞とくみあわせると、そこに格の名詞は出現物のありかを示す。あらわれる、あらわす、おこす、おきる…もたらず、きたす、かもす、きざすのようなものがある。それに生産動詞のうち、つくる、こしらえる、もうける、たてる、きずくなどは出現性の意味をもっている。

やがてむこうの城跡の方にしろいけむりがおこった。

ほっとした色がふたりの娘の顔にあらわれた。

警官隊はついに議場にはいり、議長のまわりに人櫃をつくった。

これらの出現性の動詞のほかに、くっつけ動詞や移動動詞のあるものが、語彙的な意味のずれ=抽象化の結果、出現動詞のグループにはいり込んできている。例えば、でる、だす、たつ、たてる、にじむのような動詞。

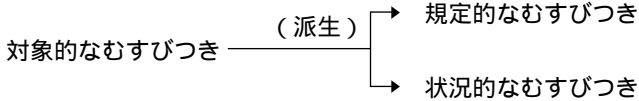
出現性の動詞が状態のかたちをとるばあいも、ありかをしめずに格の名詞とのあいだにあるみすびつきは、存在あるいは内在的なニュアンスをおびてくる。

背をまるめて腰かけたうしろすがたに今日一日の会議のつかれがあらわれていた。」

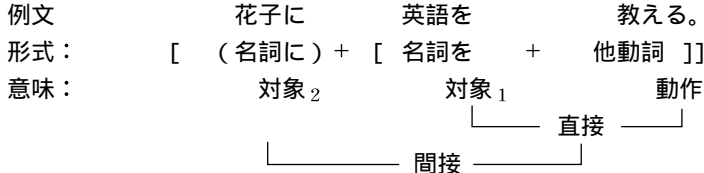
(奥田1983:291)

2-2-2 むすびつきの特徴

奥田は、に格の名詞と動詞と組み合わせを対象的・規定的・状況的なむすびつきという三つのむすびつきに分類した。それぞれの関係を図示すれば、以下のとおりになる。



この对象的なむすびつきについて、奥田は「を格の名詞と他動詞との間に存在する对象的なむすびつきが直接であるのに対して、に格の名詞と他動詞との間に存在する对象的なむすびつきは間接的である。…間接的な対象というのは、動作が直接的な対象に働きかけていく過程にくわわって、何らかの補助的な役目を果たしているものである。…間接的な対象を示すに格の名詞は、を格の名詞と他動詞との組み合わせをひろげているのであって、に格の名詞と他動詞とのくみあわせはを格の名詞を媒介にして成り立っている」(奥田1983:282)と述べており、このことを図示すれば、



となる。

そして、状況的なむすびつきについて奥田は、「…一般的に言えば、状況的なむすびつきは、動作にとっては外的空間、条件、情勢などを表現している。このことから、この単語のくみあわせでは、かざりとかざられとの関係は、極めて弱い」(奥田1983:317)と述べ、規定的なむすびつきについては、「かざり名詞でしめされる状態あるいは現象は、動作そのものの成立に直接に関係せず、動作のもっているなんらかの側面を規定してかかる。従って、かざり・かざられでしめされる2つのものの関係は内的である、この点で对象的なむすびつきとは意味的に異なっているが、そのことは語順の中に表現を受けている」(奥田1983:309)と述べている。

これら三つのむすびつきの中でも、对象的なむすびつきには「動作(あるいは状態)とその動作の成立に加わる対象との関係」が認められる。したがって、本論文で採用している格支配の考え、動詞がその前にくる名詞句の格の形式を

決定する に基づくと、主な研究対象は「対象的なむすびつき」となる。しかし「規定的なむすびつき」や「状況的なむすびつき」も考慮する必要があるだろう。

前の表によると、奥田には格の対象的なむすびつきを八つに分類している。そこでまずは、それら一つずつ考察していくことにする。奥田によるそれら八つのむすびつきの相互関係を図示すれば、次のようになる。

(派生)

- | | | | | |
|---|------------|---|---|--------------|
| 1 | ありかのむすびつき | | 4 | ゆずり相手のむすびつき |
| 2 | ゆくさきのむすびつき | ／ | 5 | はなし相手のむすびつき |
| 3 | くっつきのむすびつき | ／ | 6 | かかわりのむすびつき |
| | | ／ | 7 | はたらきかけのむすびつき |
| | | ／ | 8 | 道具のむすびつき |

例えば、

- a 壁に手をつく。
- b 彼にウソをつく。

という二つの文の場合、奥田の解釈で考えてみると「壁に手をつく」は、くっつけ動詞「つく」からも分かるように、くっつきのむすびつきに属しているが、「彼にうそをつく」という文では、動詞「つく」が、くっつけ動詞であるものの、この文が実際にあらわしているものは、言語活動であるから、かざり名詞は「動作がその表面にくいこんでいく物＝対象を示している」（奥田1983：296）ものではなく、「人間を示すものに限っている」（奥田1983：301）のである。この文は、はなし相手のむすびつきに属しているということになる。したがって、はなし相手のむすびつきは「語彙的な意味のずれ＝抽象化をともなって...くっつきあるいはゆくさきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせから派生したもの」（奥田1983：301）であるといえる。

2-2-3 教育の面から見た奥田によるに格の名詞と動詞とのくみあわせの問題点

2 2 1で分類方法を表にしたが、言語教育の観点からこれを検討すると、このように羅列的な分類方法は、詳細なだけに暗記すべきところが多くなって、仮にこの表をそのまま授業に採用すると、学習者は、苦痛を感じることになるだろうと容易に推測できる。たとえ奥田の分類が日本語における格の名詞と動詞の組み合わせをくまなく網羅していたとしても、指導に際しては、その中身

を再構成する必要があると考える。つまり、それらのむすびつきの中で共通している特徴は何であるかを見出し、その特徴に基づいて、それらのむすびつきを基本的な用法、派生的な用法、例外的な用法に再構成することが重要である。この再構成にあたっては、池上の「場所理論」の導入が有効であると考えられる。次章では、池上の「場所理論」の検討を踏まえたうえで、教育内容の構成を試みる。

第三章 教育内容の構成及び順序構造

3-1 池上(1981)における場所理論の紹介

池上(1981)は「〈運動〉(すなわち、〈場所的移動〉)と〈静止〉(〈場所的な存在〉)は、それぞれ〈変化〉と〈状態〉のもっとも具体的なレベルでの表れということにする。…外界における変化と状態はきわめてさまざまな様相で現れ、それらを表現する言語形式もそれに応じて一見きわめてさまざまであるように思われる。しかし、変化と状態の表現において実際に用いられる言語の表現形式は、その基本的な型だけを取りあげれば、ごく限られた数のもので、それらはまたごく限られた要素により規定されているように思える」(池上1981:24)と述べている。

その場所理論の構造の分類について、池上は「〈変化〉と〈状態〉の分類とその構造型」で述べている。

「	例文	構造
変化:	John goes to the station. (太郎八駅へ行く)	I. $X \rightarrow Y$
状態:	John is in the room. (太郎八部屋ニイル)	II. $X > Y$

一般的に二つの項の間の関係を $X R Y$ 『XとYの間にRという関係がある』という形で表すことが行われる。…XとYという二つ項の間の関係Rは、Iでは『〜から〜への変化』>『矢印で表示』、IIでは『(〜の〜における)存在』>『不等号で表示』ということである」。(池上1981: p81)

池上の理論のもう一つの重要な概念は、具体と抽象である。池上は次のように述べている。「具体的な物事についての表現が抽象的なものごとの表現に転用されるということがある。…例えば、『机ヲ動かス』 『心ヲ動かス』、『金ヲ払ウ』 『注意ヲ払ウ』、『人ガ急イデ行ク』 『仕事ガウマク行ク』、…

などでは、それぞれ前者の方が具体的、後者の方が抽象的な表現である。(つまり、机の『動き』は眼で見えても、心の『動き』そのものは、視覚の対象になるようなものではないし、『甘い』菓子は舌で味わっても甘い言葉はそうは行かない。)『分ケル』と『分カル』,『起キル』と『起コル』,『行く』と『ヤッテ行く』などでも前者が具体的、後者が抽象的であり、後者としての用法は前者からの派生とされる」。(池上1981:5)

池上は変化と状態、具体と抽象という概念を用いて、「〈変化〉と〈状態〉について、それが〈具体的〉『つまり、対象として知覚可能』である場合、〈抽象的〉『つまり知覚不可能』である場合ということを用いて来たが、これは上のⅠ,Ⅱの形式においてそれぞれを構成する三つの項『XとY,および→か』が〈具体〉であるか〈抽象〉であるかによって規定することができる」(池上1981:81)と述べている。

「	X	Y	→>	変化	状態
	具体	具体	具体	…〈場所の変化〉	〈場所の存在〉
	具体	具体	抽象	…〈所有権の変化〉	〈所有〉
	具体	抽象	抽象	…〈状態の変化〉	〈状態〉
	抽象	具体	抽象		
	抽象	抽象	抽象		

」(池上1981: p84)

上の表を(1)～(4)の例文を用いて説明すると、

	X	Y	XとYの関係
(1) 太郎八 山二 イク。	= 具体	具体	具体
(2) 太郎が 医者二 ナッタ。	= 具体	抽象	抽象
(3) 庭に おおきなびわの木が あった。	= 具体	具体	具体
(4) この現象には 現代固有の特徴があります。	= 抽象	抽象	抽象

となる。

(1)は、三つの項X「太郎」とY「駅」と「→」で表す「～から～への変化」(今の位置から駅へ<に>)動作「イク」から構成されている。この三つの項は、太郎が具体的な「人物」であって、「駅」は具体的な物を表す場所名詞である。したがって、「イク」という動詞が表す変化は〈具体〉である。この文には格の名詞「駅」と動詞「イク」が組合わさって、「ゆくさき」を表す〈場所の変化〉

を示していることになる。(2)では、X「太郎」は具体的な人物であり、Y「医者」は〈抽象〉である。そして「→」で表される変化は、状態の変化である。一方の項が〈抽象〉であることで、その変化は2項とも〈具体〉であったときの〈場所の変化〉ではなく〈状態の変化〉に変わっているのである。(1)を基本と考えるならば、(2)の〈状態の変化〉は、一方の項が〈抽象〉になることで基本から派生したものだと思えることができるだろう。

同じように(3)は、具体名詞X「おおきなびわの木」や、場所名詞「庭」や存在動詞「アル」から構成されている。この文は上の表によって「場所の存在」を表す文である。一方、(4)では、X「特徴」は〈抽象〉で、Y「現象」も〈抽象〉である。そして、存在動詞「アル」と組み合わせると、〈状態〉を表す文になる。(4)は、場所の存在から派生してきた文と考えることができる。

本論文では、に格の名詞と動詞との組み合わせを対象としているため、主な検討対象は「X・Y・→あるいは」という三つの項の中の「Y」と「→あるいは」という二つの項である。さらに、池上が「XとYのいずれかが〈抽象〉であれば、→あるいはは必然的に〈抽象〉になる」(池上1981：p82)と述べていることから、本論文でに格の名詞と動詞との組み合わせの派生関係について検討する際には、に格の名詞が〈具体〉であるか、あるいは〈抽象〉であるかという判定が関与することになるだろう。

池上は具体と対象の曖昧さについて次のように述べている。「例えば、John became a doctor のような場合の a doctor は表層的には名詞句で一見〈具体〉という特徴を持っているように思えるが、意味的には(その際、‘a state of being a doctor’ というパラフレイズで示したように)実は〈医者であるという状態〉という〈抽象的〉な特徴をもつものと考えられる。この場合 ‘a doctor’ を何か〈具体的〉な、John と対立するような〈もの〉ととらえないのは、医者になっても John という人物のアイデンティティ(同一性)は変わっていき、単に一つの表面的な属性を得たにすぎないと考えられるからであろう。」(池上1981：79～85)

「場所や空間的」であるという場合、疑問文で表現される際には「どこから」、「どこへ」、「どこに」という疑問詞に置き換えることができる。例えば起点は、「どどこから」、着点は「どどこに」ということであり、存在も「どどこに」在るとか居るとかいう際の「どどこに」に相当する空間だといえるだろう。池上の「〈起点〉と〈到達点〉の非対称性」(池上1981：121)によると、一番優位なのは到達点である。つまり、到達点はこれら三つの中で特に基本的である。その到達点というものを日本語では、普通「に」で表しているのである。

3-2 に格の名詞と動詞とのくみあわせの再構成

この節では、奥田のに格の名詞と動詞との組み合わせを、池上による抽象と具体の基準から再構成したい。それに際して、具体的なものは基本的な用法に、抽象的なものは具体的な用法から派生した用法とする。

1 ありかのむすびつきについて

a 存在のむすびつき： 動詞：存在動詞 ある・いる

- (1) 庭に大きなびわのきがあった。
- (2) ざぶとんのうえに、...おき手紙があった。

奥田はこの種のむすびつきの名詞について、「具体的な名詞であって、空間的な性格をもっているものである『たとえば、学校、庭、山、村、町』」（奥田1983：284）と述べている。ここでいう「空間的な性格」を例文で考えてみると、これらの名詞は、そのことがらの存在している場所を表しているのだと思われる。よって、この種のむすびつきは場所の存在を表す具体的なものなのである。この意味で、私は存在のむすびつきを基本的な用法にする。

b 内在のむすびつき：動詞 属性・部分という語彙的な意味をもっている動詞。「ある」など。

名詞：空間的なニュアンスをもたない具体名詞や抽象名詞

- (1) 白い雲にはかがやきがあった。
- (2) この現象には現代固有の特徴があります。
- (3) ああした女のひと、男に魅力がある。（奥田1987：p285）

(1)の「白い雲」は、かがやくということがらの場所であり、この場所を表す名詞と存在動詞とが組み合わさると、存在のむすびつきが認められるだろう。つまり、(1)では“どこに”という質問が可能である。しかし、名詞が〈抽象〉である場合、(3)の「男」に対しての疑問詞は「誰」であり、(2)では「現象」という言葉に対しての疑問詞は「なに」であるために、場所名詞だとは言えない。(2)～(3)のに格と動詞のむすびつきは、抽象的であり派生的なものとも認められる。さらに奥田は、内在のむすびつきの名詞は、空間的なニュアンスを持たないと述べている。したがって内在のむすびつきは、場所の存在という存在のむすびつきから派生してきた状態をあらわすむすびつきと認められるだろう。

c 所有物のありか、

- (1) お金ができたら、世界中に土地をかうの。
(2) 南山伏町にちいさな家をかりて... (奥田1987:288)

この種のむすびつきのに格の名詞は、場所名詞であるから、それが、存在のむすびつきの下位区分に属することができる。

d 所有者のむすびつきとは、場所の存在から派生した状態を表すむすびつきと考えることができる。

- (3) あなたには信一君がいる
(4) あなたの方に貯金があれば、あとが安心だから。
(奥田1983:288)

この種のむすびつきの名詞は、場所名詞ではなく、人間関係を示しているので、場所の変化、存在というような基本的な用法から派生してきたものだといえるだろう。

e 認知物のありか

動詞：認知活動動詞。みる、みうける、みえる、みあたる、発現する、きく、きこえるなど

名詞：場所名詞。認知をうける物あるいは現象や状態のありかを示す
...高瀬舟はくろずんだ京都の町の家々を兩岸にみつつ、東へは
しって...

えんがわのいすに女客のひざがみえた。

...質素な服装をした老人を旅客のむれのなかにみつけた。

(奥田1983:288)

この種のむすびつきで使っている名詞は「兩岸、いす、旅客のむれのなか」、のような場所を表す名詞であるため、場所的な存在と思えるが、動詞は存在動詞ではなく、人間の認知活動であるから、この種のむすびつきは、存在のむすびつきの下位区分の位置に属することができるだろう。

f 出現物のありか

動詞：出現動詞 あらわれる、あらわす、おこす、おきる、できる、うまれる、うむ、生ずる、はえる、さく、わく、きえる、もえる、

かもすなど

生産動詞 つくる, こしらえる, もうける, たてる, きずくなど

名詞: 出現物のありかを示す名詞。

ふかいえくぼが陶器のはだにぼつんとできる。

やがてむこうの城跡の方にしろいけむりがおこった。

ほっとした色がふたりの娘の顔にあらわれた。

(奥田1983: 290)

この種のむすびつきは, 具体的な名詞であらわすものなので, 基本的な用法としての「場所的な存在」に属することができる。しかし, 動詞の語彙的な意味によって, 存在のむすびつきに下位区分することができると思う。

奥田がいう, ありかのむすびつきの中の存在のむすびつき, 認知物のむすびつき, 出現物のむすびつきなどは, に格の名詞は具体的な場所名詞であるため, これらのむすびつきは基本的な用法に属していると考えられるだろう。しかし, 内在のむすびつきや所有者のむすびつきは, 存在を表すむすびつきから派生したものとするのが適切であると思う。

2 ゆくさきのむすびつき

動詞: 方向性をもった移動動詞

名詞: 空間的なニュアンスをもった具体名詞

ゆくさきのむすびつきが具体的な場所への変化を表すむすびつきであることは明らかである。また, ゆくさきのむすびつきが方向性をもっているということは, 「山に行く」の山や, 「社にかえります」の社や, 「広場にあつまる」の広場や, 「汽船にうつつて」の汽船などが, ゆくさきのむすびつきの動作が向かっている到着点だと考えられるからである。

奥田は「移動動詞のあるものは, 空間性をもたない名詞とくみあわさって, 出現物のありかのむすびつきをこしらえている。例えば, ことばにだす, 顔にだす, 表情にだす」(奥田: p 293)と述べているが, 池上の場所理論からも, この現象は場所の変化から状態の変化へ転化したものと考えられる。

3 くつつきのむすびつき

動詞: くつつけ動詞 自 動 詞 とまる, たつ, つく, くつつ

く, のりこむなど

他 動 詞 かける, くつつける, くわえる,

のせる, つるなど
 作用動詞 + つく, こむ, いる, つけるのよう
 な接尾辞

名詞: 具体名詞

くつつきのむすびつきの特徴について奥田は、他動詞の場合では「第二の物=対象がに格の名詞でしめされる」としている(奥田1983: 295)。自動詞の場合では「に格の名詞は、動作がその表面に、内部にくいこんでいく物=対象をしめしている」(p295)と述べ、さらに、くつつきのむすびつきは「ゆくさきのむすびつきとはちがって、このむすびつきは空間的なニュアンスがまったくかけている」(奥田1983: 295)と述べている。しかし、くつつきのむすびつきをつくる動詞は、ある動作の変化を表す動詞であることは間違いない。また、池上の理論からも、動作の変化は必ず初めから終わりまでという過程があるということがいえるのである。その初めは起点と呼び、終わりは到達点と呼ぶことができる。この到達点は日本語で普通「に」で表される。したがって、くつつきのむすびつきも、場所の変化を表すむすびつきの一つだと思われる。自動詞の場合でいえば、に格の具体名詞は、動作がに格の名詞が表している物=対象に食い込んでいく到達点なのであり、他動詞の場合でいえば、に格の名詞が表しているものは、あるものが、あるものをその到達点に向けて行かせる先にある到達点という意味である。この意味でいえば、くつつきのむすびつきは「空間的なニュアンスがまったくかけている」のではなく、空間的な方向性をもっているとするのが適切であろう。

先に述べたように、池上によると変化や状態の起点, 到着点, 存在点の三つの要素は、対称的なものではなく、また、これらで一番優位なものは到着点といえるだろう。この点から考えてみると、奥田が列挙しているに格の名詞と動詞と組み合わせの中の、一番基本的なむすびつきは、くつつきのむすびつきであるといえるかもかもしれない。仮にそうならば、このくつつきのむすびつきは、他のむすびつきよりも基本的なものであって、他のむすびつきを派生する能力を持っているむすびつきであるということになるだろう。

くつつきのむすびつきについて鈴木重幸は、くつつきのむすびつきが文法機能として重要であると述べている。くつつくところは「に格の名詞からなる対象語の基本的なもので、主語や対象語であらわされるものがくつつく対象である。(自動詞の場合は主語, 他動詞の場合は対象語であらわされるものがくつつく。) ...この種の対象語はテキスト(「にっぽんご4の上」)で状況語のありか、ゆくさきとしてあつかったに格の用法とちかい関係にある。これらの名

詞のに格の用法として、つながっているのである」(鈴木重幸・1972:83)。

ところが、存在のむすびつき、くつつきのむすびつき、そしてゆくさきのむすびつきの相互関係をゆくさきのむすびつきの(5)、くつつきのむすびつきの(6)を例にあげて、意味的な面からさらに考察してみると、

(5) 太郎は 駅に 行った。

(6) 壁に 絵を 貼った。

において、(5)は太郎がもともといた場所から駅に行くという、場所の変化という事柄を表す文であり、この事柄は、太郎が「行く」という動作を終えると、駅にいるという状態になることでもある。ここで得られる状態は場所の存在であると思われる。この過程は「移動→場所の存在」である。(6)の場合でも、絵がくつつくという動作のはたらきかけを受けて、この動作が終わると「壁」という新しい場所にくっついているという状態になる。この過程も「移動→場所の存在」である。

つまり、ゆくさきとかくつつきとかは、存在という状態の中の一時的な過程であるといえる。ゆくさきにもくつつきにも存在という事柄が含まれている。そういう広い意味で考えると、ゆくさきのむすびつきも、くつつきのむすびつきも存在のむすびつきから派生してきたものなのである。つまり、これら三つのむすびつきの中で、存在のむすびつきを一番基本的なむすびつきだとすることができるのである。存在のむすびつきは、他のむすびつきを派生する能力が一番強く、したがって、存在の結びつきを教育内容の中心に据えられることになるだろう。

ここまで考察してきた、存在、ゆくさき、くつつきの3種類のに格の名詞と動詞との組み合わせに共通することは、場所、あるいは空間的な方向性という特徴を有しているということであった。これら三つのむすびつきの名詞は主に具体的な場所名詞で表わされる。さらに、名詞や動詞の意味の抽象化によって、これらのむすびつきから、様々なむすびつきを派生することができるのである。奥田自身、ゆずり相手のむすびつき、はなし相手のむすびつき、かかわりのむすびつき、はたらきかけのむすびつき、道具のむすびつきなどは、主にゆくさきのむすびつきやくつつきのむすびつきから派生してきたものであると述べている。奥田自身は派生の理由として、「ずれ=抽象」という言葉を使っているが、何によって「ずれ=抽象化」したのかまでは明確には言及していない。しかし、各むすびつき間に見られる派生という関係を認めていることは事実であり、教育内容を構成する際には、奥田の派生関係も考慮することが必要となる。

2章であげた奥田の規定的なむすびつきや状況的なむすびつきも、検討する必要がある。

例えば、規定的なむすびつきに属する結果規定のむすびつきでは、以下のようなものがある。

動詞：変化動詞 かわる，なりさがる，おわる，成長する，発達する
など
生産動詞 つくる，こしらえる，そだてるなど
出現動詞 する，なる，うむ，うまれるなど

奥田は規定的なむすびつきについて「名詞で示される状態あるいは現象は、動作そのものの成立に直接に関係せず、動作のもっているなんらかの側面を規定してかかる」（奥田1981：311）と述べているが、これについて例えば、

そのぼくが急に強盗にかわって...

ぼく，おおきくなったら，魚の研究者になりたい。

（奥田1981：311）

という文が示しているものは、場所の変化を表すゆくさきのむすびつきから派生した、状態の変化をあらわすむすびつきであると思われる。

奥田がいうように「この種のむすびつきが、ゆくさきのむすびつきのずれ＝抽象化の結果うまれてきたことはうたがない」（奥田1983：311）だろう。同じ規定的なむすびつきに属する目的のむすびつきも、ゆくさきのむすびつきから派生してきたものである。例えば、

橋のたもとに、河原へ洗濯におりるもののかよう道がある。

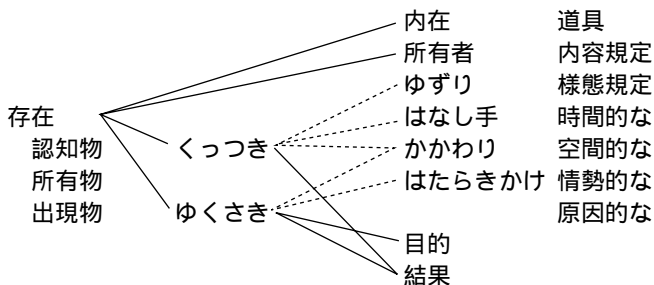
（奥田1981：315）

などがそうである。

3-3 教育内容の順序構造

これらの考察から、以下のような順序構成で、に格の名詞と動詞とを組み合わせ、指導することを提案する。

<p>基本的な用法 (派生する能力をもつもの)</p>	<p>派生的な用法 (基本的な用法から派生したもの)</p>	<p>例外的な用法 (派生関係をもたず、支配関係によわないもの)</p>
---------------------------------	------------------------------------	--



このように、に格の名詞と動詞との組み合わせについて、まずは基本的な用法を指導し、それを基礎として、派生的な用法や派生関係にない例外的な用法を教えていくべきであると考え。それにより、に格の多義性による難しさが解消され、学習者はに格の多義性の煩雑さを克服することができるのではないかと考える。

3-4 今後の課題

私の今後の課題は、教育の実践的な視点から、に格の組み合わせについて、具体的な教育プランを作成することである。それについての研究を今後とも興味深く進めて行きたいと思う。

〈参考文献〉

- (1) 奥田靖雄 『日本語文法・連語論(資料編)』 むぎ書房(1983年)
- (2) 奥田靖雄 「語彙的なものと文法的なもの」 『ことばの研究・序説』 むぎ書房(1984年)
- (3) 奥田靖雄 「単語をめぐって」 『ことばの研究・序説』 むぎ書(1984年)
- (4) 奥田靖雄 「格助詞 渡辺の構文論をめぐって」 『ことばの研究・序説』 むぎ書房(1984)
- (5) 奥田靖雄・国分一太郎 「国語科教育とわたしたちの研究」 『国語教育の理論』
- (6) 池上嘉彦 「『する』と『なる』の言語学」 大修館書店(1981年)
- (7) 鈴木重幸 『日本語文法・形態論』 むぎ書房(1972年)
- (8) 鈴木重幸 「編集にあたって」 『日本語文法・連語論』 むぎ書房(1983年)
- (9) 鈴木重幸 「奥田靖雄の言語学 とくに文法論をめぐって」 『ことばの科学 3』 言語学研究会編 むぎ書房(1989年)
- (10) 益岡隆志 『命題の文法』 くろしお(1987年)
- (11) 益岡隆志 田窪行則 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』 くろしお(1987年)
- (12) 南不二男 『現代日本語文法の輪郭』 大修館(1993年)
- (13) 仁田義雄 「拡大語義論の統語論」 『日本語学の新展開』 柴谷方良 久野 編(1989年)
- (14) 仁田義雄 「日本語の格を求めて」 『日本語の格をめぐって』 仁田義雄編 くろしお(1993年)
- (15) 城田 俊 「文法格と副詞格」 『日本語の格をめぐって』 仁田義雄編 くろしお(1993年)
- (16) 高木一彦 「『を格の名詞と動詞とのくみあわせ』を授業して(1)『教育国語7 4』 教育科学研究会・国語部会編(1983年)
- (17) 菅原厚子 「名詞の格・子どもたちにおしえるために」 『教育国語1995・1』 教育科学研究会・国語部会編 むぎ書房(1995年)
- (18) 村木新次郎 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房(1991年)
- (19) 上海外国语学院日语教研室 《高等学校教材 日语(日语专业用)》 上海译文出版社(1981年)
- (20) 小学館 『国語大辞典』 (1981年)

(ヤン・チーカン・本学非常勤講師)

苫小牧駒澤大学紀要第11号 (2004年3月31日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 11, 31 March 2004

「日本事情」科目の可能性

The Use of Subject; Nihon-Jijo (Aspects of Japan)

野田 孝子
NODA Takako

キーワード：日本事情，留学生，異文化適応，カルチャーショック，
日本語教師

要旨

「日本事情」科目では、バラエティーに富んだ教育内容を活かし、専門教育の基礎知識の習得と共に、留学生の日本での適応を促す授業展開が、同時に行えることが可能であることを明らかにする。

この目的の為に、問1. 「日本事情」の学習目的とは何か、問2. 教授法やその内容は何か、そして、問3. 授業を通し異文化適応は促進されるか、の3つの問いかけを通して考察していく。

第1章 はじめに

日本語を学ぶ学生が、日本語のみならず日本に関する様々な事柄にカルチャーショックを受けたり、否定的な感情を抱くと、日本語学習の妨げになることを実感する。例えば、「先生どうして日本は...?」というイライラしたような嫌悪を含んだ質問を受けることがある。このような感情は、定義によりカルチャーショックに当たると思われるが、「日本事情」という授業科目の中でよくみられるケースである。^(注1) 学生は教師やクラスメートの手助けがあったとしても、カルチャーショックのブラックホールに落ちてしまった場合、抜け出すことは容易ではない。これは、中国の大学で日本語教師をしている時も同様であった。中国の場合、ホスト国にいるわけではないので、ステレオタイプ化された古い情報で、日本に対しての評価を加えているケースもあり、日本についての説明に四苦八苦することもある。

日本語教師が「日本事情」科目の担当者になる場合があるが^(注2)、それは「日本語」という言語と、その言語の背景にある日本文化が切り離せない関係にあることが影響しているからと思われる。

シューマン(1978)は第二言語習得研究において、言語は文化の一部であり、学習者の属する言語コミュニティと第二言語のコミュニティの関係や、学習者の第二言語文化への適応度が第二言語の習得に影響を及ぼすと提唱し、言語と文化は切り離せない関係にあるとしている。

つまり、「日本事情」科目と「日本語」との関係を考えて、「日本語」科目では十分に行えない言語運用能力の向上を、「日本事情」のクラスで目指したり、「日本語」という言語以外の知識を「日本事情」としてとらえ授業に役立てる場合がある。従って、「日本語」のための「日本事情」、または逆に「日本事情」を知るための「日本語」という関係が見られる。

そして、シューマンのみならず、小川(2002)も言語が文化の一部であると示し、「日本事情」は「日本語」の基底部であると捉えている。

長谷川(1992)は、各大学における「日本事情」科目の位置付けを、日本語教育の観点から捉える立場と、留学生教育の立場から捉える立場に大別している。私はこの二つの立場から、「日本事情」科目を考察していきたい。

大学入学直後の留学生の日本語能力は日本語能力検定試験1,2級程度であり、この語学力では大学の専門教育を受ける能力に達しているとはいえない。^(注3)

2002年より「日本留学試験」が開始され、海外での受験も可能であり、その獲得した点数を申告して日本の大学の入学許可が得られるようになった。1983年6月中曽根康弘首相(当時)の指示に基づいて推進された、留学生10万人計

画も達成され、それに伴う受け入れ制度も整ってきている。それと共に、彼らの留学生活に対するモチベーション維持というソフトの面も考慮する必要があるが、現実的にそこまで至っていないと考える。実際のところ、在日中国人学生においては、留学することにより留学前に持っていた対日本イメージが下がる傾向がみられる。^(注4) これにより、当然のこととして、学習意欲は低下する。

要(2002)は、来日直後の留学生の支援には、言語以外の要素を含んだ生活知識を与えることが有用であるとの調査をまとめた。「日本事情」科目は、留学生が抱えている問題解決へのきっかけや、回避、解決方法の一端を担える内容と考える。この科目を通して、学生の為に何ができるかを以下の3つの問いかけを中心に検討していきたい。

問1. 「日本事情」の学習目的とは何か。

問2. 「日本事情」の教授法やその内容とは何か。

問3. 「日本事情」で異文化適応は促進されるか。

問1は、「日本事情」のねらいとは何か、役割とは何かを探っていく。

次に、問2で、実際に行われている「日本事情」の教授法やその内容を検証し、その教授法や内容の長所・問題点を抽出して、よりよい「日本事情」に向けての足がかりを探っていく。

最後の問いは、学生のモチベーションを高めるための手段として、「日本事情」が利用できることを検討するためのものである。

第2章 学習の目的は何か

「日本事情」科目の指導要領的なガイドラインは、1962年の文部省令21号の『外国人留学生の一般教育等履修の特例について』「3. 特例による科目開設にあたっての留意事項」にある。従って、その内容を一部紹介することにする。

- (1) 日本語科目および日本事情に関する科目(以下日本語科目等という)を置き、これを開設する場合、いくつかの授業科目に分けて実施することができるものとする。たとえば、日本事情に関する科目としては、一般日本事情、日本の歴史および文化、日本の政治、経済、日本の自然、日本の科学技術といったものが考えられる。
- (2) 日本語科目等として開設する授業科目は、大学教育の水準に応じた内容を有することを要し、初歩的内容のものは従来どおり基準外の扱いとする。

また、各授業科目の内容については、日本人学生に対する一般教育科目の趣旨と同様の教育的意図を実現できるように留意するとともに、学生が在学または進学する学部の専攻分野に応じた基礎知識をもあわせて学習できるよう配慮することが望ましい。

(3)、(4)省略

(5)保健体育科目の講義2単位を日本語科目等によって代替する場合は、日本事情に関する科目中に、保健体育科目の趣旨を加味し、保健衛生等の内容をもりこむ等について配慮されたい。

以上の「日本事情」科目のガイドラインの要点を以下に纏めてみた。

教育内容は、①一般日本事情、②日本の歴史、③日本の文化、④日本の政治、⑤日本の経済、⑥日本の自然、⑦日本の科学技術、⑧保健体育、⑨学部の基礎知識が挙げられる。

この教育内容8つのうち、①一般日本事情、③日本の文化に関して、詳細の見当がつきにくいので、『日本事情ハンドブック』（1995）^(注5)を参考に纏めてみた。それによると、①の一般日本事情は、日本社会、会社、教育、ジェンダー等、他の7項目に該当しない日本に関するあらゆること。また、③の日本の文化は、コミュニケーション（身振り、しぐさ、表情、言語）、生活、習慣、伝統文化、芸術、思想が挙げられる。

教育水準は、初歩的内容のものを基準外とした、大学教育の水準となる。

そして、学校教育法や大学設置基準の一部を改正する省令の施行（平成3年文高第184号）に準拠すると、そのねらいは、①専門教育の基礎知識習得の場、②幅広い教養や総合的な判断力を養う場、そして、③外国人留学生の履修の負担軽減の場、④日本語教育等の充実を見込むものとなる。

ガイドラインの考察より、教育内容は抽象的で各大学の采配に頼るところが大きい。そしてバラエティーに富む分、学習単元の枠の確定が困難である。^(注6)

細川（2000 p.16）は「日本事情の教育内容の確定はことごとく失敗した」と評し、佐々木（1999 p.29）は「日本事情の領域の危うさは否めない」と指摘した通りである。しかし、このバラエティーに富んだ領域を最大限に利用すると、学生の異文化適応に効果のある授業を提供できると考える。その具体例は第4章で考察する。

3. 「日本事情」科目の教授法やその内容は何か

留学生は、講義内容や専門書の理解といった受容能力、ディスカッションや試験、レポートといった表出能力のレベルアップを図る不断努力をしていかなければならない。また、それだけではなく日本の生活に適応していかなければならないという課題も抱えている。

では、1992年に長谷川らが行った調査（以下、「日事調査」という）^(注7)を横軸、また、「日本事情」に関する研究（細川2003）を縦軸として具体的にどのような授業が行われているのか、長所や短所を抽出しながら探してみる。

3-1 「日事調査」について

実際の「日本事情」科目の教育水準については、現実には高いレベルを望んでいるわけではなく、「日本語が十分でなく...なかなか目的を達し得ない」という報告もある。

「授業方法」は下記の通りで、表1は、「授業方法のタイプ」、図1は、「授業タイプの割合」である。

表1 授業方法のタイプ

授業方法	授業方法の詳細
A	教師講義
B	討 議
C	学生発表
D	読解教材
E	視聴教材
F	その 他

図1 授業タイプの割合

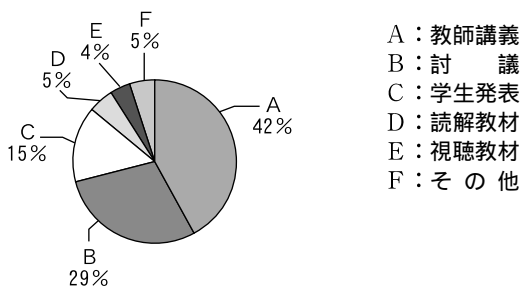


表1ならびに図1より、教師主導型の講義式が一番多く、次に討議式で、学生発表は、割合が15%と低くあれ、細川らのアプローチが影響し（詳細は後で述べる）、今後増加が見込まれる。

次に、表1で示した各授業方法についての研究を考察し、長所と短所を比較する。

A. 講義式

教師による一方通行の形式。大学教育の水準に達した授業内容はできるが、学生の日本語能力を考慮すると負担が大きい。

例えば、原土（1988）は、授業の最初に使用する専門用語を学習し、空欄を埋めるプリントを使った上での講義を行っているが、学生の授業理解に役立たせるため、こう言った工夫が必要と思われる。

B. 討議式

一方通行型講義より理解し易い。ただし、学習者同士の日本語能力や基礎知識に差がある場合、グループのバランスに考慮が必要である。利点は、誰もが気軽に発言することができるということである。教師のリーダーシップ力が鍵を握る。

C. 学生発表

実践的な活動で、学習者が自分の力で調査を進めることが前提となるので、学習レベルの高さが要求される。発表者の努力は勿論、教師の周到な準備と支援が必要となる。

倉地（1988）は、プロジェクトワーク型「グループ研究プロジェクト」を行っているが、研究実施前の準備段階に4ヶ月間の時間を費やしている。また、この貢献として、学習者の相互協力、異文化理解、コミュニケーション能力の向上を挙げている。

細川はプロジェクトワークを原型に、討議式と学生発表を組み合わせた「総合」という名称での「日本事情」科目を現在開講しているが、詳細については後に紹介する。

D. 読解教材

講義式と類似している。単調なクラス活動にならない様に努力していかなければならない。文語的表現の理解が必要となる。利点は能力別教材があることだが^{注8)}、学生の考察能力を高める学習内容にはなっていない。

E. 視聴教材

教材が変わっただけで、Dと同様の工夫が必要となる。

例えば、聴解クラスのモチベーションを、報道番組ビデオとラジオニュースという教材で比較した場合、前者のほうが向上した（市川 1991）との事例も

ある。

F. その他,

その他の項目の中には、校外学習やホームステイ、華道などの体験学習が該当する。溝口（1995）の行った授業では、訪問前と訪問後に学習を行い、学生個々人の問題に対応できるケアを行っている。学習者全員から「通常の授業より学習意欲を感じ、真剣に取り組んだ。」とのアンケート結果がでている。日本人や日本文化に親しんだり、異文化適応を課題のねらいとしている。

3-2 「日本事情」科目の先行研究

細川（2003）は、「日本事情」科目の研究の視点を、1960年代は「教育内容」、1980年末頃から「教育方法」、そして、さらに現在は「異文化適応の訓練過程」とみなした研究が行われていることを指摘している。また、小川（2002）は、現在の「日本事情」教育を、知識型「日本事情」は否定的に捉えられ、いわゆる行動能力育成型へと転換しつつあると論じている。

二人の解釈を纏めてみると、現在「日本事情」という科目を「異文化適応」の「手段」として、授業を行っているものとする。

この役割については、私自身も「日本事情」科目の学習目標として捉える必要を感じていたことである。

「異文化適応の訓練過程」として踏まえた、細川が行っている「総合」という名称の「日本事情」科目は、学習者が日本の社会・文化を的確に理解し、その上で、この社会に適応し、また、「柔軟な自己アイデンティティーの確立として」（細川1999 p.64）学習者自身が自分の日本を発見することをねらいとしたものである。

この細川の授業は、日本人学生と留学生の異文化コミュニケーション型共同授業で、学習者各自が、日本の社会や文化についてのテーマを持ち、インタビュー調査を行い、口頭発表や討議を行うというもので、教師はそのサポート役を勤める。

佐々木^(注7)はアンケート調査による「授業内容の特色」を以下のように纏めている。

- ① 教師の専門領域をもとに、学習者の興味と関心を優先させた内容決定。
- ② 学習者の自文化と日本文化との比較対象を中心とする授業。
- ③ 小さいまとまりの内容を積み重ねたものが多いこと。

これらの特色から、学習者の立場に立った授業が展開されていることが伺われるが、自文化と日本文化との比較対象にする授業の場合、二つの文化間の差

異が強調される内容になりかねなく、それが、学習者の学習モチベーションを下げる結果につながる。また、小さいまとまりの内容の場合、知識の習得が断片的にしかならない。4章では、これらのマイナス要因を引き起こさないような授業内容も含めて、「日本事情」科目の可能性を検証していく。

4. 「日本事情」で異文化適応は促進されるか

以上、各章をふりかえってみると、「日本事情」をどう教えるか、教育目標はどこにおくかの定義付けは難しい。とりあえず、文科省のねらいどおり授業を提供したとしても、教員自身の満足には至らない。また、留学生に日ごろから接触の多い日本語教員は、日本語の上達のみならず日本という国で学習者が自立した生活を送ることができるように支援していきたいと願う。「日本事情」科目では、学習者に対してそういったサポートの貢献もできると私は考える。ガイダンスでは、キメ細やかなケアを学生にできるとは言えず、個別カウンセリングでは、全ての学生が現状で抱えている問題をカウンセリングするとは考えがたい^(注9)。

日本留学試験などを課さず、初級終了から初中級レベルの留学生を正規の学部生として多数受け入れている大学では、講義中にさまざまな学習目的が追求できることが理想である。しかし、現実の学生の学習能力を考えると困難な部分も多い。

留学生は否定的な反応を経験すると、不安・過度の緊張、恐怖や苦悩などの防御的な心情が強化され、結果として、学習への意欲が阻害されるケースがある。日本語を学ぶ学生が、カルチャーショックをできるだけ和らげたり回避できたりする手だてを身に付けることができる授業、文化の差異を強調せずに日本を語る方法を模索したときに、「日本事情」科目に行きついたのである。

ステレオタイプ^(注10)は、強い感情や価値判断の要素を含み、好悪や善悪などの判断基準として作用するので、学習へのモチベーションや異文化適応にも悪影響を及ぼす。最近の「日本事情」研究では、文化に対し「文化は存在しない」という立場をとる「戦略的日本文化非存在説」(河野2001 p. 4)、または、「崩壊する」(細川2000 p.24)、「剥ぎ取りから始まる」(牲川2000 p.37)と、日本に対して固定的に抱いているステレオタイプを解消する教授法の必要性を唱えている。

例えば、他人がもっている思い込みや固定化されたステレオタイプで自分が決めつけられたとき、とても居心地の悪い思いをし、ひいては、互いの人間関係に悪い影響を及ぼすことがある。このような、ステレオタイプを解消させる

ための効果的な方法として、「共同学習」がある。この「共同学習」について、上瀬（2002）は、ブラウン（1995）が説いた特性を四点にわたり紹介している。

その特性の一つは、小集団で共同的に相互依存させることである。相互依存とは、分業できるように構成された学生同士が、グループとしてうまく達成するために各自が他者を必要とすることをいう。二つ目は、生徒間の相互作用を頻繁にすること。また、三つ目は、地位を対等にし、グループ全体の成功に各自の貢献が重要だと意識させることである。最後に、学校としての統一された指導法であることを意識させることである。これらの特性にそった授業方法は、プロジェクトワークが該当すると考える。

細川の「総合」科目はその成功例であり、理想の「日本事情」科目の提供は共同学習、プロジェクトワークと言えよう。

共同学習場面では、相手を正確に理解しようとする気持ちが高まり、それに伴い、相手への信頼度が高まり、相手を否定的に見る傾向も少なくなる。日本人学生と共同作業を行うクラスでは、そういう、留学生のステレオタイプの解消のみならず、日本人学生にとっても有効であると考ええる。

細川（2002 p.249）は、「日本事情」のクラスとは、①異文化適応、②日本語のための総合的な訓練の場、そして、③社会・文化を客観視する相対比の作業の場でもあると論じている。学生の支援サポート対策は一つではなく、学習者や教員の力量や適正、おかれている状況に応じてさまざまな解決策が見出せるが、「日本事情」科目は、そのような柔軟な授業展開を可能にすると考ええる。

注

1. カルチャーショックとは、個人が自身の持っている生活様式・行動・世界観等と異なる場面に接触したときに生ずる緊張、驚き、戸惑い、イライラ、疲れ、不安、恐怖や不適応状態のこと。Bryjak, G.J. & Soroka, M.P. (1997) Berry, J.W. [et al.] (1992) Theodoreson, G. & Theodorson, A. (1986)
2. 原土（1988）は、日本語教師が「日本事情」を担当するに当たっての長所を3点にわたって纏めている。一つ目は、限られた日本語の範囲で解説し、理解させ、発表させたり、書せたりする授業ができる。二つ目は、限られた日本語の範囲での適切な教材を選択することができる。最後に、学習・研究の成果を、日本語で発表されたレポート・論文の類を読み、且つ、外国人留学生自身がレポート・論文の類への書き方能力へ発達することの手助けをすることができるということである。「日本事情」科目を日本語教師が担当する意義は大きいと思われる。

3. 入学時、外国人留学生の実際の日本語能力は、日本国際教育協会と国際交流基金とが行っている日本語能力試験の1, 2級程度である。なお、日本語能力試験での認定基準は、次のようになっている。

1級：高度の文法・漢字(2,000字程度)・語彙(10,000語程度)を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような総合的な日本語能力。(日本語を900時間程度学習したレベル)

2級：やや高度の文法・漢字(1,000字程度)・語彙(6,000語程度)を習得し、一般的なことからについて、会話ができ、読み書きできる能力。(日本語を600時間程度学習し、中級日本語コースを終了したレベル)

1級合格で、大学教育の基礎レベルであり、日本人学生と共に日本人教官による通常の授業を受けるには不十分な日本語能力であると思われる。

4. 葛文綺(2003)「留学前後における対ホスト国イメージの変化に関する研究 中国人留学生と日本人留学生との比較を通して」『異文化コミュニケーション』No 6 異文化コミュニケーション学会の研究論文より引用。

5. 水谷修他編(1995)『日本事情ハンドブック』大修館書店

6. 『外国人留学生のための日本事情教育のあり方についての基礎的調査・研究 大学・短大・高専へのアンケート調査とその報告』(代表者 長谷川恒雄)1992・1993年度科学研究費補助金研究成果報告書(総合研究(A)課題番号04301098)で調査された「講座の中に出現するキーワード及びその度数」(1科目/1大学の抽出ではなく、2科目以上/1大学もあり、その場合はそれぞれの科目でキーワードを抽出している。)の結果を、注表1 「講座の中に出現するキーワード度数の分類項目とその割合」として纏めてみた。

注表1 講座の中に出現するキーワード度数の分類項目とその割合

キーワード度数の分類項目	割合(%)
日本の自然等	12.5
日本の文学等	3.5
日本の文化・芸術等	8.0
日本の思想・宗教等	14.5
日本の社会等	17.5
日本の経済等	12.5
国際社会等	0.2
日本の政治等	8.5
日本の歴史等	9.5
日本の教育等	2.7
科学技術、数学等	1.5
地域的特色	3.0
日本語習得等	5.7
合計	100.00

キーワードとして使用率が高かったものを順に並べてみると、1番目は日本の社会等(17.5%)、次に日本の思想・宗教等(14.5%)、3番目は日本の自然等(12.5%)、日本の経済(同%)となった。

それぞれ分類項目として分けられたキーワードの詳細は以下になっている。日本の社会等は、①生活、衣食住、家族、結婚、家計、生活様式、②社会、現代社会。日本の思想・宗教等は、①宗教、②倫理、理念、③年中行事、民俗、風習、④習慣、生活習慣、⑤思想、思考様式、⑥日本人論、日本人・日本社会論、日本・日本人理解、社会観⑦行動様式。そして、日本の自然等は、①哲学、倫理学、宗教学等、②社会学、人類学、③国土。日本の経済は、①経済、②産業、工業となる。キーワードから各項目に分けた分類は調査報告者が纏めたものであるが、見た限りその分類が妥当であるとは言い難い。この表からも、学習単元の枠が確定できないことが伺われる。

7. 「日本事情」科目に関する研究調査は「外国人留学生のための日本事情教育のあり方についての基礎的調査・研究 大学・短大・高専へのアンケート調査とその報告書」(以下、「日事調査」とする)(代表者 長谷川恒雄)1992・1993年度科学研究費補助金研究成果報告書(総合研究(A)課題番号04301098)報告書内容の詳細と担当者は以下のとおりとなっている。順番は報告通りである。

- ① 日本事情教育の現状とその対応について 細川英雄
- ② 日本事情の教材・授業内容・授業方法について 佐々木倫子
- ③ 日本事情の科目名と内容 担当教員の専門分野との関係 長谷川恒雄
- ④ 日本事情の理念的イメージについて 砂川裕一

8. 佐々木倫子(2000)が「非母語話者に対する『日本事情・社会文化学習』教材文献一覧」(「21世紀の『日本事情』第2号」くろしお出版)として、文献を集めた。その一覧は、日本語の非母語話者のための「日本事情」、社会文化能力の育成、日本文化学習などの領域を考え、リソースとなり得る教材を集めているが、その文献も、「一般日本事情」の参考資料として考えられるであろう。

なお、教材の傾向として佐々木は、①解説中心、簡略、参考文献の表示がない。②学習を深化させる方向の情報に乏しい。③日本文化礼賛・擁護の傾向は否めない。④日米比較に傾く傾向を強い、と分析している。

文献の使用言語を纏めてみると、()は文献のタイトル数)日本語のみ(28)37.7%、日本語・英語(40)53.3%、英語(1)1.3%、日本語・中国語(1)1.3%、英語+2カ国語以上(5)6.7%となり、英語で書かれているものが全体の6割を占める。平成14年5月1日現在、日本全体で受け入れた留学生の92.8%がアジアからであることを考えると、「日本事情」(大学教育以外も含む)教育に対する学習環境が整っているとは言い難い。

9. 月刊「日本語」(株アルク発行)は2000年10月号で編集部が全国の大学・短期大学47校(送付は63校)から回収した「大学の留学生受け入れアンケート」の回答結果を掲載した。

その質問項目の中に「留学生に対するガイダンス, 研修などがありますか。」というものがあつた。複数回答であるが, 結果は以下のとおりで, ガイダンス39校, 個別カウンセリング21校, 研修合宿11校, その他6校になつた。ガイダンスさえ行われていない大学・短大が四分の一にもなる。

留学生生活のケアをどこで行っているのかが, 疑問である。

10. ステレオタイプとは, W. リップマンが提出した概念である。社会, 人間, 国民性などについて, こうあるはずだとのイメージの体系であつて, それが定着すると, それに見合った事実に注意が集中し, 矛盾する事実は無視されたり, 歪曲されて認識されるようになる。一般に好悪とか憎悪の感情的意味を帯びる。竹内郁郎(1970), 上瀬由美子(2002)

参考文献

- 市川智子(1991)「上級聴解クラスにおけるテレビ報道番組ビデオの利用 米国国務省日本語研修所の場合」『日本語教育』73号 日本語教育学会
- 小川小百合(2002)「文化“知識”としての“日本事情”再考」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第4号 くらしお出版 p.52
- 葛文綺(2003)「留学前後における対ホスト国イメージの変化に関する研究 中国人留学生と日本人留学生との比較を通して」『異文化コミュニケーション』No6 異文化コミュニケーション学会
- 要弥由美(2002)「外国人留学生の来日直後の生活知識と日本語教育 回想調査の因子分析による考察と提言」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第4号 くらしお出版
- 倉地暁美(1988)「中級学習者の日本語日本事情教育におけるグループ研究プロジェクトの試み 異文化間教育心理学の視座から」『日本語教育』66号 日本語教育学会
- 河野理恵(2000)「“戦略”的『日本文化』非存在説 『日本事情』教育における『文化』のとりえ方をめぐって」『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第2号 くらしお出版 p.4
- 上瀬由美子(2002)『ステレオタイプの社会心理学 偏見の解消に向けて』サイエンス社
- 佐々木倫子(2000)「『日本事情』・社会文化教材文献一覧」『21世紀の「日本事情」

- 日本語教育から文化リテラシーへ』第2号 くろしお出版
(1999)「『日本事情』の教育方法」『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ』創刊号 くろしお出版 p.29
- Theodoeson, G & Theodorson, A. (1986) A modern dictionary of sociology
Barnes & Noble books
- Schumann, J. H (1978) The Pidginization Process: A Model for second Language Acquisition Newbury House Publishers
- 牲川波都季(2000)「剥ぎ取りからはじまる『日本事情』」『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ』第2号 くろしお出版 p.13
- 竹内郁郎(1970)『心理学の基礎知識』(株)有斐社
- 細川英雄(2003)「『個の文化』再論：日本語教育における言語文化教育の意味と課題」『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ』第5号 くろしお出版
- 編(2002)『日本語教育と日本事情 異文化を越える』 明石書店 p.249
(2001)「文化リテラシー育成としての日本語教師養成」『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ』第2号 くろしお出版
(2000)「崩壊する『日本事情』 ことばと文化の統合をめざして」『21世紀の「日本事情」 日本語教育から文化リテラシーへ』第2号 くろしお出版 p.16,24
(1999)「日本語教育と国語教育 母語・第2言語の連携と課題」『日本語教育』100号 p.64
(1994)『日本語教師のための 実践「日本事情」入門』 大修館書店
- 原土 洋(1988)「日本事情のとらえ方 東北大学教養部の場合」『日本語教育』65号 日本語教育学会
- 長谷川恒雄(1992)『外国人留学生のための日本事情教育のあり方についての基礎的調査・研究 大学・短大・高専へのアンケート調査とその報告』1992・1993年度科学研究費補助金研究成果報告書(総合研究(A)) 課題番号04301098) p.42
- Bryjak, G. J & Soroka, M. P (1997) Sociology: Cultural diversity in a changing world Allyn and Bacon
- Berry, J. W [et al.] (1992) Cross-cultural psychology: Research and applications Cambridge University Press
- 水谷修他編(1995)『日本事情ハンドブック』 大修館書店
- 溝口博幸(1995)「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育 『日本人家庭訪問』の場合」『日本語教育』65号 日本語教育学会
(のだ・たかこ・本学非常勤講師)

苫小牧駒澤大学紀要 第11号

平成16年(2004)年3月25日印刷

平成16年(2004)年3月31日発行

編集発行

苫小牧駒澤大学

〒059-1292 苫小牧市錦岡521番地293

電話0144-61-3111

印刷

ひまわり印刷株式会社

紀要交換業務は図書館情報センターで行っています

お問い合わせは直通電話0144-61-3311